

下水道の獣

あらほしねこ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

小説『ゴブリンスレイヤー』の二次創作。原作への敬意を示す意味で、あえてネット小説の文体にはしておりませんので、文字がぎちゃりと詰まっています。

色々ありまして、王都の軍を退役したオジサンが、第二の人生として冒険者の道を行くお話。

全12話完結。

目次

退役軍人	1
半闇狩人	26
白磁の師弟	49
地下下水道	78
巡礼尼僧	96
地下に潜むもの	119
暗闇の向こう側	142
魔弾の射手	169
下水道の獣	194
地獄の番犬	224
禁じられた遊び	255
それぞれの門出	289

退役軍人

早朝の冒険ギルド、始業開始の数刻前。受付嬢は、いつものように受け持ちのカウンターで、いつものように依頼を求めて訪れる冒険者達を出迎える用意を整える。そして、微かな喧騒の波が次第に大きくなり、フロアーに冒険者たちの姿が現れる。

さて、今日も忙しくなりそうですね。

そんな、いつもの光景を見渡しながら、彼女の眼は知ってか知らずしてか、ある冒険者の姿を探すように、ひとつ、ふたつと視線を巡らせた。

しかし、彼女の目に留まったのは、探していた冒険者の姿ではなく、黒ずくめの冒険者——というには、あまりにも物々しく、しかし、整然とした出で立ち。

黒塗りのサレット・ヘルム、そしてこれも黒塗りの面頬で覆われた顔の奥に、いささか外連味が過ぎる紅い色眼鏡が光る。そして、肩から羽織った黒いマントの胸元から覗くのは、鈍く黒光りする革張りのブリガンダイン・アーマー。

誰か、新しい装備を整えたのだろうか？ いや、しかし、その雰囲気は自分の記憶にあるどの冒険者とも一致するものはない。

どちらかと言えば、冒険者と言うよりも、強いて言うならば正規軍の武官か。さもな

ければ、異端審問官。

周囲の冒険者たちも、この黒づくめの見慣れぬ来訪者に、微かにではあるが警戒の色を走らせる。しかし、彼はいかにも一見者らしい仕草で周囲を二度三度見渡した後、何やら得心いったかのようにひとりでうなずいている。

(何でしよう、水の都——それとも、もしかして王都からの使者でしようか)

受付嬢は、ほかの冒険者同様、さざ波のような緊張感を全身に巡らせながら、黒衣の来訪者の一挙一動を見守る、とその時、紅い眼鏡と真正面から目が合ってしまった。

しまった。

自らの迂闊さを認識するより早く、黒衣の来訪者は得たりとばかりに真つ直ぐ自分の座るカウンターへ、何故か足音ひとつ鎧ずれの音ひとつ立てず、まったくの無音で歩み寄ってくる。

マントを翻しながら、つかつかと、しかし床の上をすべるように歩き出した黒衣の来訪者に、居合わせたほかの冒険者たちも一斉に警戒の目を向けるが、誰一人として動くとしなかった。否、彼らの名誉のために言うなら、理解と対応が追い付かなかったのかも知れないが。

もちろん冒険者である可能性は十分ある、しかし、どこかの軍閥からの派遣武官、もしくは、いや、あまり考えたくないが、祈らぬものに感化された者を教化する異端審問

官だったとしたら？

いやいや、大丈夫だ。このあいだの定例監査や会計監査でも、ギルド本部から派遣された監査官から問題なしとの総評も得た。それに、このギルドに関わりのある人間で、異端審問官の査問に付されるような心当たりは何もない、何もなし——はず。

ほんのわずかな時間で、受付嬢の頭の中で、熟練の職人が手掛ける糸車のようにぐるぐると思考が回り、大丈夫だ、問題ない。と言ひ聞かせてなお、彼女の緊張感は最高潮に達していた。

そして、そうこうしている内に、とうとう黒ずくめの来訪者はカウンター越しに受付嬢の真正面に立つと、彼女を見下ろした紅い眼鏡を妖しく光らせた。

遠目で見てもそうかとは思っていたが、間近で見るとさすがに大きい。このギルド常連である重戦士に匹敵するかそれ以上、その黒ずくめの風体から否応なくにじみ出る威圧感も手伝い、さながら自分の目の前に黒い壁を据えられたかのような錯覚に陥る。

「あ、あの——」

いつも通りに声をかけようとして出てきたのは、まるで新米時代の自分が蘇ってきたかのような、なんとも情けない声。

彼女とて、冒険者ギルドの職員となつてから、海千山千の冒険者をそれこそ朝食のパンの枚数同様覚えきれないくらい見てきたし、対応もしてきた。しかし、この黒衣の来

訪者を前にして、どういう訳か口の中がからからに乾き、舌がうまく回らない。

受付嬢の目は、ほぼ無意識にフロアーに視線を走らせ、見知った顔を探す。しかし、今日に限って、あのなにかと騒々しい軽薄な冒険者も、使い込みも過ぎる鎧兜に身を包んだ寡黙な冒険者の姿もない。したがって、彼女は心の中で自身に鞭を入れた。

「おはようございます、冒険者ギルドへようこそ！今日はどのような御用件でしょうか？」

なんとか、いつもどおりの声で朝の挨拶を成功させた受付嬢に、黒衣の来訪者は、じろり、とその紅い眼鏡越しの視線を向ける。そして、

「やあ、おはよう。朝早い時間から申し訳ないのだけれどね」

その威圧感の塊の姿には似つかわしくないほど、意外に気さくで、紳士的——と言えなくもない声。

「実はね、私も冒険者になりたくてね。手続きをお願いしたいのだよ、ひとつ、お願いできるか？」

やや鷹揚ではあるが、友好的な口調に、彼女の全身に張り巡らされていた緊張が、僅かに緩み、安堵のそよ風が心を包み込む。

「冒険者登録……ですか？」

「そうなんだよ、私は訳あって失業中の身なんだけれどね。何にせよ、食べていかなければ

ばならないじゃあないか」

「ええ、まあ……そう、ですね」

意外だった、冒険者の登録は、他の町のギルドで済ませていたとばかり思っていた。よく見れば、身に着けている装具一式にしても、昨日今日買ひそろえたようなまつさらの新品と言う訳ではなく、日々の手入れを怠らない『ちようどいい』使い込みの風合いが見える。

この男は『失業中』と言った、では、やはり、どこかの軍人だったのかもしれない。しかし、それならそれで、なぜ冒険者を？と言う疑問が浮かぶ。しかし、彼女は敢えてそれを隅に押しやった。それは、これからのやりとりで扱う話だから。

「そうそう、だからね、ここはひとつ、私も冒険者として食い扶持を得ようと思っっている訳なんだよ」

「そうでしたか……はい、それでは、この冒険記録用紙に必要な事項を記入していただけますか？」

「了解了解、ええと、名前に性別、年齢、それから——」

受付嬢が差し出した冒険記録用紙を受け取り、いちいち声に出しながら紙面に筆を滑らせていくその様子は、威圧感十分なその姿に似つかわしくないほど滑稽というか劇軽。

「さあできたよ、これでどうかね」

「あ、はい。確認しますね」

「うん、よろしく頼むよ」

この頃になると、先ほどまでの緊張はどこへやら。やや和やかな雰囲気です。冒険記録用紙を受け取り、その内容を確認する。流麗、とまでいかないものの、相応の教育を受けたと思しき筆跡はなかなかどうして読みやすい。しかし、そこで受付嬢は、その記入された内容に、微かに唸る。

（王都の常備軍での勤務経歴あり、戦傷で一線を退いたとありますが、これは――）

退役軍人という、荒事という範疇で言えば決して素人とは言えない彼の経歴。かつての所属先まで事細かに書き込んだその文面を信じる限り、脱柵や不名誉除隊ではないのだろう。それらを全て踏まえた上で、受付嬢は表情を改めると申請の結果を告げる。

「申請書を確認しましたが、内容については問題はありません。ですので、冒険者登録については、規定で白磁等級から始めていただくこととなりますが、よろしいでしょうか？」

先ほど彼が述べた通り、王都での従軍経験とその年齢は、単なる駆け出しでないのは理解できた。しかし、見かけで人を判断するわけではないが、この事実には、彼自身がどうという反応を示すか。

もつと自分の実力にふさわしい階級から始めさせろ、と不平を並べる自称経験者がいないわけではなかっただけに、今の問いへの答え方で、彼の人となりが多少判断できる。「全く構わないよ。千里の道も一歩から。美麗な女神像も、まずはノミのひと打ちから生まれるわけだからね。過程をすつ飛ばしても何もいいことはないからねえ。是非とも、そちらの規定で進めてもらってくれたまえ」

樂しそうに、そして待ち遠しそうに答える男の返事に、受付嬢の表情が緩む。どうやら、ひととなりの問題はなさそうだ、今の所、は。

「ありがとうございます、それと、あと——」
「うん？他になにかあるのかな」

そう、最後に確認しなければならないこと。それは、黒塗りのサレットと面頬、そして紅い眼鏡の奥の彼の顔を覚えておかなければならなかった。

ギルドとして正式に冒険者登録をするにあたって、申請書類上の内容だけでなく、素顔も含めた本人の素性を把握するのは当然の必要事項。

「その、今一度、お顔を確認させていただけませんか——」
「ふむ」

受付嬢の言葉に、退役軍人は少し考えこむように首をかしげる。

「う〜ん……実のところあまり気味のいいものではないけど、構わないかな？」

先ほどとは打って変わり、僅かに拒否感を滲ませる退役軍人の言葉に、受付嬢は再び緊張の波が全身の肌を走るのを感じた。

ですが、本人確認は重要ですから。しかし、用意していた言葉は、思いがけず現れた援軍——らしきものに遮られてしまった。

「さつきから黙って聞いてりや偉そうに、なにお嬢さんを困らせてるんだコラ」

長槍を担いだ美丈夫が、割って入るように退役軍人を睨みつけている。その肩越しには、相手の魔女が、嘆息交じりに煙管をふかしながらも、詫びるようなしぐさで会釈を寄越していた。

「新人は新人らしく、お嬢さんの指示に従ってりやいいんだよ、つたく。なにカツコついてもつたいぶってんだこのヤロウ」

さすが銀等級冒険者というべきか、この威圧感の塊のような男にさえ、物怖じする気配もない。どうやら、途中から現れた槍使いはその場の会話だけ聞き、自分がこの黒ずくめの男にゴネられていると思って、助け舟を出しに来たのだろう。

確かに、この男がギルドに現れ、なおかつ自分のカウンターに向かつて歩いてきた時は、正直、無意識にとはいえこの男の姿を探したことは事実だ。しかし、今この場で横槍を入れられてもどうにもならないし、意味がない。

それとも、自分とこの黒ずくめの男との会話の中に割って入ろうとしているのか。ま

さか、さすがにそんな狭量なこととはしないとは思うが、なにしろ、ある冒険者相手に幾度か前例があるからわからない。

(まったく、そういうところですよ)

受付嬢は小さく嘆息し、この場をどうとりなそうかと思案を巡らせる。

「いやいや、すまなかつたね。そんなつもりじゃなかつたんだが、まあいい。立会人もいた方がこの場合、都合がいいだろうね」

「あん？」

槍使いのやや攻撃的な態度にも、いささかも気分を害した様子もなく、退役軍人は両手の平を揃えて相手に向けるおどけた仕草を交えつつ応えると、黒ずくめの男はサレットと面頬の留め金を外し始めた。

「すまないけれど、少し場所を借りるよ」

律儀にそう一言断つてから、カウンターを傷つけないよう丁寧にサレットを置き、続いて面頬と兜下を隣に並べた。それでも、決して軽くはない、重量感のある音に、槍使いの眉が一瞬動く。

そして、おもむろに紅い色眼鏡を外した素顔を受付嬢に向け、続いて槍使いの方を見やった。

「あ——」

目の当たりにした退役軍人の素顔に、受付嬢は、彼が顔を見せることをためらった理由を察し、そして、その明らかに新人とは言い難い経歴が刻まれた顔に、槍使いの目から攻撃的な色が消え、代わりに警戒の色が浮かぶ。

壮年、という言葉を表すように引き締まった顔。しかし、その顔中に火傷の痕と思しき引き攣れた皮膚がまだら模様のように張り付き、短く刈り込まれた白髪交じりの頭には、幾条かの創傷が刻まれている。そして、本来、人の眼の白くあるべき部分が真っ赤に染まっている。

「いやあ、お恥ずかしい話ではあるけれど、若いころヘマをしてしまったね。痕が残ってしまったんだけど、あまりにみつともないから、隠すのがつい癖になってしまったんだよ。いやいや、ふたりとも、気を悪くさせてしまったなら申し訳なかったね」

「いや……別にわかりやいんだけどよ」

「ほら、登録……の、邪魔、しない……の」

存外素直に素顔をさらしたことで、詫びの言葉に、やや釈然としない様子で言葉を続けようとした槍使いを、いつの間にか背後に歩み寄っていた魔女がその襟首を掴んだ。

「まだ、冒険の……場所。決めて、ないで……しょ?」

「なっ? おい! 話はまだ終わってねえぞ!」

「私たち……には、関係……ない話、でしょ」

そしてそのまま、槍使いは魔女に襟首を掴まれたまま、依頼掲示板まで引きずられていつてしまった。

「やれやれ、なんとも元気があつて愉快的な青年だ。それに、良い女房役もいて、うらやましい限りだねえ、うんうん」

傷だらけの顔に、心底楽しそうな笑顔を浮かべてうなずきながら、退役軍人はせわしく瞬きを繰り返しながら受付嬢に振り返つた。

「さて、そろそろ眼鏡だけでもかけさせてもらえるかな？ 御覧の通り、これがないと私の目には、昼間の光はまぶし過ぎてどうにもしようがなくてね、ハツハツハ」

「あ、す、すみません！ どうぞ——」

「いやいや、こちらこそ、手間をかけさせてしまつて申し訳ないね」

「いえ、こちらこそ——あ、もう兜を被つていただいてもよろしいですよ？ 今から認識票を作りますから、もう少しお待ちいただけますか？」

「いやいや、何から何まで申し訳ないね。こちらこそ、よろしくお願いするよ」

どこまでも人の好きそうな言葉に励まされながら、受付嬢は白磁の認識票に尖筆を走らせ、この退役軍人の個人情報を書き込んで彫り込んでいく。

そして、その頃には、彼の顔は再び黒塗りの装甲と紅い眼鏡に覆われていたが、それでもどことなくうきうきとした様子で、認識票が作られる様子を見守っている。

「どうぞ、こちらが貴方の冒険者認識票になります。大事なものですから、無くさないように気を付けてくださいね」

「もちろんもちろん。うんうん、これで私も今日から冒険者だよ！」

受け取った白磁の認識票を眼前にかざし、まるで成人したての若者がするような喜びように、受付嬢の頬が緩む。いや、さすがにいくら若くても、ここまで率直にはしゃいでみせる者はあまりいなかっただけに。

しかし、この大男が持つと、白い認識票が猶更小さく見える。白磁等級での出発となったが、この男の経歴が事実であれば、そう時間を置かずに実績を積み上げ、自身の力量にふさわしい等級に上がるのはそう長くはかからないだろう。

「それでは、早速ですが、依頼を受けてみますか？それとも、どこかの一党に加われるよう紹介をしましょうか？」

「いや、それよりも君、教えて欲しいことがあるんだよ」

退役軍人に依頼を勧めてみたところ、予想に反して意外な返事が返ってきた。

「このギルドには、初心者向けの訓練所があるという話を聞いたんだけどね。私も是非、そこに通いたいんだよ」

「訓練所、ですか？」

正規軍人の経験がある上に、先ほど見た彼の顔に刻まれた戦歴の跡。さすがにトロー

ルとまでは行かなくても、ヘルハウンドくらいなら蹴散らしてしまいそうにも思える、
が。

「いやいやいや、勘弁してくれたまえよ、君。こんな年寄りがあんなおつかない怪物に挑んだら、それこそ食べられてしまうよ」

退役軍人は、その言葉の割には楽しそうに笑いながら大きな体を揺する。にもかかわらず、相変わらず、鎧ずれの音ひとつ立てないのが奇妙といえは奇妙な印象。

先ほどの歩く動作ひとつにしても、極力物音を立てないようにしているのは、正規軍人としての訓練を受けた成果からなのか。

「戦友を頼りに数頼みの戦しかしたことがないものでね。冒険者としての作法や心構えは、恥ずかしながら何も知らないんだよ。だから、その訓練所で冒険者の作法を勉強を試してみたいんだよ。どうだろう、君？」

「ええ、そうですね、それもいいかと思えます」

「うんうん、そうだろう、そうだろう？ 無知を知る者は、知るを得る。年寄りの手習いかもしれないけど、備えるに越したことはないからねえ」

それでは、と受付嬢は、訓練所までの道のりを、事細かに退役軍人に説明する。

「ああ、地図は結構だよ。ちゃんと覚えられるし、もしどこかに落としたり大変だからね」

「……………ねえ？」

「なんですか？」

「あの人、なんだろう。いつからいたっけ」

「そういえば……………」

冒険者訓練所で、只人の聖女見習いと、圃人の少女巫術師は、お互いの相方が稽古に励んでいるのを見守るさなか、いつの間に見れたのか、ひっそりとたたずむ黒ずくめの戦士らしき姿に、微かに警戒の色を浮かべる。

「気づいたらあそこにはいたんだけど、ずっと稽古の様子を見てるのよね……………」

「それにしてもあの人、暑くないんでしょうか……………」

初夏の日差しが降り注ぎ、今の時期に合わせた服装でもやや汗ばむような天気。にもかかわらず、黒塗りのサレットに面頬、肩から羽織った黒いマントにくるまった姿は、どうみても辛そうにしか見えず、見ているこちらまで暑苦しくなってくる。

「新しい冒険者さん——でしようか？」

「そうかもしれないけど、何の用なのかな」

「もしかして、新しい指導役——でもなさそうですね」

圃人の目は、黒ずくめの来訪者の胸にことさら見せびらかすように下がっている、白

い認識票に気づく。

「あの格好で白磁等級……………」

「どうします、声をかけてみます——か？」

「ええ……………」

見習い聖女は、おもわず露骨に拒否反応を浮かべたが、少女巫術師の言うことももつともではある。それに、自分たちもいつまでも新人ではない。来訪者に対しての声かけくらいできないで、何が冒険者か。

「うん、そうだよ。それに、重戦士さんや他の人もいるから、いざとなったら大声出して……………」

見習い聖女が、行動の段取りを算段しながら、意を決して立ち上がったその時、
「そこのお前！そこをなにをしている!？」

凜とした誰何の声。白銀の鎧に身を固めた女騎士が、ここからでもよく聞こえるほど通る声をあげながら、躊躇なく黒衣の来訪者に近づいていく。

「ね、姐さん……………」

「さっすが銀等級、勇気あるわねえ……………」

用事から戻ってきたらしき女騎士が、ずかずかと黒衣の来訪者に向かって歩いていく様子を、見習い聖女と少女巫術師は固唾をのんで見守る。

さすがにこの頃には、重戦士と、彼に稽古をつけてもらっていた新米戦士と少年斥候も、異変を察して稽古の手が止まるが、すぐに、『また始まった』といった諦めの表情になる。

「さつきから何をしている、ここに何の用だ？」

「ああ、これはこれは。ここが冒険者の訓練場と教わって来てみたら、なかなか熱の入った稽古をしていたものでねえ、ついつい見入ってしまったんだよ」

なにしろ、私も冒険者になりたてなのでね、と言わんばかりに、退役軍人はその巨体を折り曲げ、胸元の真新しく光る白い認識票を、まるで少年が宝物を見せびらかすようなしぐさで女騎士に掲げて見せる。

「なるほど、新人冒険者、というわけか」

「もちろん、そのとおりだよ」

その歳と装備でか？と言いかける言葉を、女騎士はふいと飲み込む。別に冒険者になるのが、成人したてや歳をごまかした若者ばかりではない。いわゆる食い詰め浪人とされる、元兵士や出奔した騎士というのも珍しくはない。

だからこそ

この得体のしれない人間に対して、その素性はともかく技量だけでも確認しておかなくてはならない。得体のしれない冒険者といえば、知り合いにもひとりいることはいる

が、この目の前にいる黒ずくめは、それとはまた違った方向性の得体の知れなさだ。

「どれ、暇なら私が稽古をつけてやっても良いぞ？」

「君が？」

女騎士の問いかけに、退役軍人は興味深そうに身を乗り出すと、その威圧的な風体からは予想できない朗らかな声をあげた。

「おお、それなら是非ともお願いするよ、君！」

何がそんなに嬉しいのか。全く似合わないうきうきとした言葉に、女騎士は小さい嘆息をつく。

「それでは、用意ができたら言うがいい」

「うんうん、用意はもうできているよ。というか、いつでも動けるようにしていなくて、冒険者失格だからねえ。ハハハハハ！」

「おい、あれって、大丈夫なのか、ホントに………」

「兄ちゃん、あれ、どうする？」

新米戦士と少年斥候の言葉に、重戦士は『心配するな』と一言返し、女騎士と黒ずくめの動向を注意深く見守る。

二人に対する稽古について熱が入っていたとはいえ、先ほどからあの黒ずくめがこちらの様子をずっとうかがっていることは気づいていた。だから、向こうが動けば、即座に

対応するつもりだったのだが、

「さて、それでは始めようか」

そんな重戦士の思惑を知ってか知らずか、訓練場の真ん中に陣取った女騎士は、盾を構え剣を抜く。女騎士として、ただの面白半分で声をかけたわけではない。兜と面頬だけでなく、色眼鏡までかけて念入りに顔を隠すという、あからさまな怪しさというのが引つかかるが、手すきの自分が動くべきだ、そう思ったからだ。しかし、対する黒ずくめは、武器も見せず、構える様子もない。

「どうした、準備はできているのではないのか？」

「ああ、心配ご無用。分かりづらくて申し訳ないけれど、これが私のやり方なものでね。ハハハハハ」

こいつ、ふざけているのか。女騎士の柳眉が一瞬吊り上がるが、次の瞬間、鋭い打ち込みが飛んだ。

「おお？危ない危ない」

熾烈な丁丁発止が始まるかと思いきや、黒ずくめは大袈裟な動きで、女騎士が次々と繰り出す打ち込みから逃げるように身をかわす。それはまるで、反抗期の娘に逆襲され、どたばたと逃げ回る父親のように見えなくなかった。

「どうした！逃げてばかりでは稽古ならんぞ?!」

「いやいや、そうは言っても君、怖いものは怖いよ」

予想外というか、思いもしなかったその情けなくも滑稽極まる展開に、固唾をのんで見守っていた見習い聖女と少女巫術師だけでなく、重戦士たちも呆気にとられた表情で、その喜劇めいた大立ち回りの様子を見守る。

もしかしたら、本当に格好だけの見掛け倒し？

なら、どうしてあれだけ大げさに逃げ回っているのに、鎧ずれの音どころか、足音ひとつしない？重戦士は、ないまぜになる思考を無理やり隅に押しやり、それでも注意深く黒ずくめの挙動を目で追った。

「ええい、でかい凶体をしてちよこまかとー」

業を煮やした女騎士が小さく叫び、剣の柄を握りなおす。もう構うものか、鎧の上からならば、打撲か最悪骨にひびくくらいは入るかもしれないが、死ぬことはないだろう。

それに、自分からお願いしますと言っておいて、この体たらく。少し、この黒ずくめの性根を叩き直してやらねばならない。

瞬間、女騎士の剣先が鋭さを増し、今までとは比較にならない速度で繰り出されたのは、もはや打ち込みではなく、斬撃。

そして、閃光のような軌跡を描いた切っ先が、退役軍人の右肩に炸裂しようとしたその瞬間、素早く翻した黒マントの裾がまるで生き物のように翻り、手にした長剣ごと女

騎士の右腕に絡みついた。

「なっ!？」

とつさに振りほどこうとした瞬間、女騎士は予想外の剛力で振り回され、地面から足が浮くほどの勢いで体が流れ、視界が急速に横滑りする。

何とか体勢を立て直そうと勢いに抗うが、その度にさらに容赦ない怪力で軸を崩されるように右へ左へと振り回され、頭蓋ごと脳と眼球を揺さぶられるような衝撃が襲う。

急激に悪化する状況に、女騎士は必死に相手の姿をとらえようとしたその瞬間、一瞬正面に戻った視界に、太陽を背にした黒ずくめが、フランジメイスを逆光の中にかざし、引き絞るように振り上げた姿が目飛び込んだ。

そして、紅い眼鏡をことさら異様に光らせながら、自分の顔面目掛けて振り下ろしたフランジメイスの矛先と、数瞬後には西瓜のように碎かれる自分の頭の不吉なイメージ。だが、それでも咄嗟に左手の盾を引き上げたその瞬間、不意に右腕の拘束が解け、女騎士の体は、振り回された勢いそのままに地面の上に転がった。

「くそっ！なんだ!？」

聖騎士志望とは思えぬ悪態と共に、素早く立ち上がった女騎士は、訓練場の隅へどたばたと大慌てで駆けていく黒ずくめの背中を見つける。

そして、手元からすっぽ抜け、これ以上ないくらい引きつった顔をした見習い聖女と

少女巫術師の足元に突き刺さったフランジメイスを地面からやつとこき引き抜いた後、ふたりにペコペコと頭を下げて謝罪している姿であった。

「なんなんだ、あいつは」

さらに駆け付けた新米戦士と少年斥候、そして重戦士も加わり、謝罪する相手が増えた黒づくめは、まさに休む間もなく頭を下げ続けていた。

「莫迦々々しい、やる気も失せる」

その情けなくも滑稽な光景に、女騎士は剣を鞘に納めると、大きくため息を吐き出した。

「その様子だと、だいぶ絞られたようだな」

とぼとぼと訓練場を後にしようとする退役軍人の背中に、女騎士の声がかけられる。夕暮れ時のぼんやりとした空気に浮かぶそれは、まさにたそがれそのもの。

「ああ、君か。先ほどは本当に申し訳なかったね」

振り返ったその顔は、サレットと面頬、そして紅い眼鏡のせいで表情まではうかがい知れないが、どうやら相当気落ちしている様子だった。

無理もない、あれだけ嬉しそうに冒険者認識票を掲げ、冒険者となったことを喜んでいたので。それが、あんなどうにもみつともない結果に終わったのだから。

「そうしよげるな、怪我人はおらず、知り合いとうちの巫術師が土を被ったくらいで済ん

「だのだからな」

「あの二人には怖い思いをさせてしまって、本当に申し訳ないことをしてしまっただよ。私も、少し浮かれ過ぎていたようだ」

「謝罪は済んだのだろうか？もう過ぎたことだ、あまり引きずるな」

「本当に申し訳ない、そう言ってもらえると救われるよ」

素直に頭を下げる退役軍人に、女騎士は苦笑交じりにその姿をみやる。

「気が向いたらまたいつでもくるといい、ここは、そのための場所なのだからな」

鷹揚な女騎士の言葉に、退役軍人は謝礼の言葉と共に頭を下げると、また街へ向かって歩き出していた。

「そう言えば、ゴブリンスレイヤーさん、聞きましたか？」

「何をだ」

ゴブリン退治の依頼を受け。依頼先の村から聞き取りをした、ゴブリンの群れが潜む洞窟に向かう道すがら、女神官は傍らに行く冒険者に声をかける。

「最近、新しい冒険者さんがギルドに登録した話なんですけど」

「珍しくない」

ゴブリンスレイヤーと呼ばれた冒険者の返事は、良くも悪くも端的で素っ気ない。し

かし、これはいつものこと。長い付き合いでその言葉の機微を察することができるようになった今となっては、あまり気にならなくなった。

「それが、随分変わった人らしくて」

「そうか」

「見た目は歴戦の戦士そのものなのに、冒険者になってからずっと、下水道掃除ばかりしているって噂になっているんですよ」

「普通だ」

確かに、彼の言う通り、冒険者になりたてならば、町の地下にある下水道に赴き、大鼠や黒蟲相手に経験を積んでいくのは、なにも珍しいことではなかった。

「そうかもしれないけど——なんか、気になりませんか？」

「なぜだ」

「噂だと、もともと王都で軍人さんをしていたそうなんです。だから、体もとても大きくて、装備も整っているそうなんです。それに、訓練場で女騎士さんと模擬戦をした時は、結構健闘してて、もう少ししてとこまで行ったそうなんですよ」

「そうか」

女神官の話を聞きながら、彼なりに、頭の中で話をまとめる。

「——軍人は、基本的に集団で戦う。冒険者のように、両手で数えられる数ではない、

数百、数千、戦によっては、数万の部隊もあり得る」

「——は、はい」

「ひとりでは大したことがない——とは言わん、要するに、戦い方が違う」

「戦い方——ですか」

「そうだ」

ゴブリンスレイヤーは、女神官にそう答えると、この男にしては珍しく、続きを話し始めた。

「冒険者になったら、ひとりで状況を何とかしなければならぬ時もある。自分自身で考え、行動しなければならぬ。そして、その結果と責任は、自分に返ってくる」

「そう——ですね」

ゴブリンスレイヤーの言葉に、女神官は沈痛な面持ちでうなづく。あまり思い出した記憶ではないが、最初の一党が自分を残して全滅したあの時。ひとり残された自分は、恐怖に怯えるだけで、ほとんど何もできずにいた。

「第一、人間と怪物は違う」

ぼそりと吐き捨てるような一言。女神官自身にも、十分心当たりのある言葉。祈る者と祈らぬものとの間に存在する溝、それは単純に常識で推し量れるものではない。

愚かなものもいる、狡猾なものもいる、無邪気なまでに残忍なものもいる。ひとつ言

えるのは、自分たちの常識で推し量ることのできない存在が、自分達の生きる世界を同じくして跋扈しているという事実。単純に、討伐すべき邪悪なもの、で済ませてしまつていては、容易く足元を掬われてしまう。

「だからだろう」

鉄兜がゆつくりとこちらを向き、女神官をみやる。

「そいつは今、冒険者の流儀、とやらを学ぼうとしてるのかもしれん」

「そう——ですな」

「それより、奴らの巢に近い、油断するな」

そう言うと、ゴブリンスレイヤーは、すいと前に出ると、帯革に提げた中途半端な長さの短剣を引き抜いた。

半闇狩人

「ふうむ、ここは確かこうだったから、こうして——」

ギルドの酒場で、退役軍人はテーブルの上に書きかけの地図を広げ、記憶が新しいうちに清書する作業に没頭している。訓練所での騒動から数週間ほどして、退役軍人はギルドの依頼を受け、冒険者としての活動を始めていた。

ただ、今のところは町の地下の下水道に潜り、ひたすら大鼠と黒蟲を蹴散らし、時折、運命の骰子に見放された哀れな若者の亡骸を地上へと運び出す。そんな地味な仕事の繰り返し。しかし、退役軍人は、違う意義、というか楽しみを見つけたようでもあった。それが、今、チーズの塊と牛乳のジヨッキを傍らに置き、清書に没頭している。それは、地下下水道地図の描き直し。

「おはよう、先生。今日も地図作りですか？」

「やあ、君か。おはよう、これからお仕事かい？」

「まあ、そんなところです。その前に、朝飯でもと思つて」

若い戦士は、退役軍人の向かいに座ると、バターを乗せたライ麦パンをかじりながら、興味深そうに彼自作の方眼紙をのぞき込む。

「だいぶ出来上がってきたじゃないですか」

「ありがとう、それでも、これでまだ半分もできていないんだよ。なにしろ、思っていた以上に広くてね。でも、これはどうして、なかなか書きごたえがあるんだよ。それより君、若いのにずいぶん少食じゃあないか、よければ、このチーズも食べなさい」

「いいんですか、ありがとうございます」

まるで親戚のおじさんのような、温かい、そしてお節介な退役軍人の言葉に、若い戦士は思わず苦笑を浮かべながら、チーズの欠片をひとつ頂戴する。黒ずくめの鎧兜、黒塗りの面頬と紅い色眼鏡で顔を覆う、何も知らないものが見たら身の危険を感じかねない風体。にもかかわらず、中身は気のいいおじさんそのもの。

しかも、まだ誰も、この黒づくめの男が素顔を晒したところを見たことがない。話によれば、冒険者登録の時、受付嬢と銀等級の槍使いが、彼の顔を見たというが。

「他の依頼とか、受けたりしないんですか？どこかの一党に入るとか」

「私が？いやいやいや、私なんぞは、馬齢を重ねているだけでまだまだ勉強が必要だよ」
「でも、ゴ布林退治なら、いけるんじゃないですか」

「ゴ布林——ねえ、それも悪くはないと思うんだけどね。1匹2匹ならともかく、群れをなしているとなると、ひとりではちよつと怖いねえ。ただ、今やっている地図作りが丁度面白くなってきた所だから、一区切りついたら考えてみることにするよ」

「そうですか……あ、でも、もしその気があったら、声かけてくださいよ。先生ならいつでも歓迎しますし、手伝いますよ」

「そうかい？それは嬉しいねえ、それじゃあ、困ったら是非相談させてもらうよ」

「ええ、そうしてください」

「いろいろ有り難う、それじゃあ、気をつけて行ってきたまえ。武運を祈っているよ」

「こちらこそありがとうございます、先生」

朝食を食べ終わり、掲示板のあるロビーへ向かう若い戦士の背中を見送りながら、退役軍人はジョッキを手に取り、ちびりと口に流し込む。

「今時、気持ちのいいくらい、真つ直ぐな青年だねえ」

歳は若い、冒険者としては先輩格となる若い戦士。こちらが白磁等級の新米であるにもかかわらず、先生などと望外の呼びかけでいろいろ気にかけてくれる。あの分だと、これまで相当な苦勞を積み重ねてきたのだろう。

「さて、こんなものかな」

机上でまとめられる分を記し終えた地図をしまい、残りの牛乳を飲み干して立ち上るろうとしたその時、また、彼に声をかけてくるものがいた。

「よう、アンタ、まだ生きてたのか」

「やあ、おはよう。今日も元気そうで何よりだよ」

このギルドの中でも、最強の実力を持つとの誉れも高い銀等級の槍使い。彼は、長槍を肩に担ぎながら退役軍人の顔をのぞき込む。

「また下水道掃除かよ？ あんたなら、もちつとマシな依頼をこなせるだろうによ」

「ハハハ、さつきも同じことを聞かれたけど、私なんてまだまだだよ。それに君、下水道の探索も、これでなかなか面白いものだよ？」

「なんだよ、あんたも一つの仕事にこだわるクチか？ 見た目もそうだが、アイツみてえなことというのな」

「アイツ、とは誰のことだい？」

「聞いたことねえのか、ゴブリンスレイヤーって奴で、このギルドじゃちよつとした有名な人さ。あいつも、口を開きやあゴブリン、ゴブリンと、そればっかだ」

「ほおう？ なかなか面白い人がいるものだねえ」

「面白いつつうか、あそこまでいくとただの変人だぜ」

「なるほど、なるほど」

ゴブリンスレイヤー

槍使いが口にしたその名前に、退役軍人は興味深そうに紅い眼鏡を光らせる。話を聞くところによれば、ゴブリンを駆逐することだけにひたすら血道をあげる男。

そして、彼に救われた村や虜囚の話は、枚挙にいとまがないということ。そして、そ

の功績が評価され、在野の冒険者において最高評価ともいえる、銀等級に上り詰めたということ。

「あんた、まだあいつを見たことないのか？」

「まだそれらしき青年に会ったことはないねえ、行き違いなのか何なのか。しかし、そう聞くと、是非話をしてみたい気になってきたねえ」

「二度見てみるのをお勧めするぜ、なにせ、ぱつと見リビングメイルみてえな奴だからな。まあ、そういうあんたも、首を小脇に抱えてりや、デユラハンと勘違いされそうだけだよ」

「いくらなんでもそれは無理だねえ、首を外したら死んでしまうよ」

「だから冗談だつつの、真に受けんなよ」

「いやはや、これは失敬々々、ハハハハハ」

呆れたような槍使いの言葉に、退役軍人は楽しそうに笑い声を弾ませる。

「まあ、それはともかく、年寄りの手習いのようなものだから、大目に見てくれると嬉しいね」

「まあ、いいけどよ」

その威圧的な容貌にも関わらず、よくしゃべり、よく笑う。常に鉄兜と面頬、そして、本人は狂った視力を補助するためという紅玉色の色眼鏡で顔を覆う。

確かに、以前見せた素顔の有様から言えば、あまり衆目に晒したくないというのモわからなくもない。

「それにしてもアンタ、いつも楽しそうだよな」

「それはそうとも、まだまだ駆け出しだが、冒険は楽しいよ。君は、楽しくないのかい？」

「んなわけねえだろ、だいたい俺が——」

「ほら……先生、の、邪魔……しない、の」

「ぬあつっ!？」

退役軍人に詰め寄ろうとした槍使いは、不意に襟首を掴まれて驚きの声を上げる。

「別に邪魔してるわけじゃねえだろ、俺はな——!」

「ごめん……なさい、ね?先生、騒がしく……しちやつて」

「いやいや、とんでもない。賑やかで楽しかったよ、どうか気にしないでくれたまえ、ハハハハ」

ハハハハ

魔女に引きずられていく槍使いに手を振りながら見送った後、退役軍人は、依頼が張り出された掲示板の方を見やる。

「さて、まだ子供たちがまだ選びあぐねているようだし、もう少し様子を見てからにしようかな」

一応、冒険者に登録できるのは15歳を過ぎた成人とはいえ、退役軍人から見れば、ま

だまだ子供。そんな彼らに向いた仕事を、自分の都合で持つていく気はない。

(いざとなれば、無報酬でもかまわない、自主的に出かけるまでさ)

大方の依頼はベテランが持つて行ってしまった後の掲示板の前で、ああでもない、こうでもない騒がしく悩んでいる若い冒険者たちの姿を微笑ましく眺めながら、退役軍人は、のんびりと構えることにした。

「それにしても、なんで私は、『先生』と呼ばれるんだらうねえ？」

流石に悪い気はしないが、いつの間にか定着してしまった自分のあだ名に、いろいろ思いを巡らせながら、退役軍人は通りがかつた獣人給仕に食後のお茶を注文すると、朝の陽ざしにくるまるようにくつろぎ始めた。

投石紐から振り抜かれた礫が、大鼠の頭蓋に当たりその脳漿を飛び散らせる。しかし、それは下水道の通路を塞がんばかりに集まった内の一匹に過ぎない。そして、自分の腰に提げた帆布の袋に残った礫は、もう片手で数えられるほど。

地下下水道の区画の隅に追い詰められた新米冒険者は、目尻に涙を浮かべ、恐怖で引きつった表情で、それでも、帆布の袋から残り少ない礫を手に取り、投石紐に絡めるや自分に向かつて跳びかかるそぶりを見せた大鼠の眉間に礫を叩き込んだ。

もう、ここでお終いなのだろうか。

新米冒険者は、今すぐにも泣きわめきたい気分をどうにか飲み込み、暗闇の中から押し寄せる大鼠の群れをにらみつける。

食つて、寝て、生殖のことしか頭にないような、嫌悪しか感じない畜生共。それは、自分を追い出した村の連中の顔と重なって見えた。

また飛びかかろうとした奴に一発。そして、また一発。そして、袋の中の礫は尽きた。当然、投げた礫は大鼠の群れの中。拾いに行くなど到底無理な話。

「馬鹿にするな……馬鹿にするな……っ！」

新米冒険者は、覚悟を決めて帯革の鞘から小刀を抜き逆手に構える。その寸鉄が、この哀れな若い冒険者に残された最後の武器。

そして、もはや絶望しか感じられない大鼠の群れが上げる、嘲弄のようにも聞こえる鳴き声下水道の壁に反響し、たちの悪い耳鳴りのように頭の芯に響く。

どうして自分がこんな目に。自分は誰にも、何も迷惑なんてかけていなかったはずだ。ただ、あの山奥の村で、細々とではあつても、父の墓を守りながら、猟師として生活できればそれ以上何も望まなかったのに。

それが、村を追い出された後は、誰も雇つてなどくれず、見ず知らずの人間に体を売る勇気も無く、生きるための日銭を得るため、冒険者の登録をしたあとは、真つ暗な下水道の中で、異臭と汚物にまみれながら大鼠や黒蟲を殺し、僅かばかりの報酬を得ての

その日暮らし。

しかし、それももう、今日で終わりだろう。唯一の武器だった礫と共に、自分の命運も尽きてしまった。

「お父さん——」

絞りだすような声で、今は亡き父を呼ぶ。そして、それを嘲笑うかのように、大鼠の群れは、一斉に飛びかかり新米冒険者の全身に食らいついた。

必死に振り回す小刀で、飛びかかる大鼠を切りつけ払いのけようとするが、もはや哀れな獲物にしか過ぎない人間に対して、大鼠の群れはその数を頼りに押し寄せまわりつき、牙を突き立てた。

「畜生、畜生っ——!!」

無我夢中で小刀を振り回し、必死に抵抗する新米冒険者の血塗れの手から、最後の頼みの綱だった小刀が滑るように払い飛ばされる。

そして、一斉に群がり集る大鼠の爪や牙が全身を食いちぎろうとする激痛と、きいきいと耳障りな大鼠の鳴き声が、新米冒険者の感覚を塗りつぶしていった。

「うあつー！うあつー!!」

石床の上を汚物にまみれながら転げまわり、皮膚を裂かれ、手足の肉を喰い千切られながら、全身を苛む激痛に悲鳴を上げ、それでもなお、拳で、蹴りで、必死に悪足掻く。

しかし、武術の心得などないその抵抗は、新鮮な血肉を前にした大鼠たちにいささかの痛痒も与えられない。喉笛に食らいつこうとする大鼠の顎を両手で押さえつけ、血だるまになりながら必死にもがく新米冒険者の表情が、あるものを見つけ一気に凍り付く。

暗闇の中に浮かび上がる、二つの紅い目。

ああ、死神が来たんだ。新米冒険者は自分の最期を悟り、生まれて初めて見る『死神』の姿に、くしやりと表情をゆがませた。

もう、本当にお終いなんだ。

四方八方から大鼠に噛みつかれる激痛の中で、新米冒険者は涙を滲ませながら諦めの溜息をつく。そして、大鼠の牙を押しとどめていた両手から力が抜け、黴菌まみれの牙がその細い喉笛に届こうとしたその瞬間、鈍い打撃音と、鋭い鳴き声と共に降りかかる生暖かい血の匂いと同時に、大鼠を押し返していた両手の力が軽くなる。

弾みで石床の上に転げると、朦朧とする意識の中で、暗闇の中に紅い目を揺らめかせながら、手にしたフランジメイスで次々と大鼠を殴り飛ばしていく黒装束の死神の姿を目で追いかけた。

死神がメイスを一振りする度、只人の子供ほどもある大鼠は、文字通り弾き飛ばされ、石壁に激突し脳漿をまき散らすものや、致命傷を負ったまま水路に転落し、そのまま汚

水の中へ沈んでいく。

そして、ぐしやり、という中身の詰まった革袋を叩き潰すような音を最後に、あれだけうるさかった大鼠の鳴き声と気配が消える。

「君、生きているかい？」

あれだけいた大鼠すべてを塵殺した死神が、自分に向かって話しかけてきた。新米冒険者は朦朧とした意識の中、どこか夢うつつな気分になりながらその声に答える。

「はい……でも、もうすぐ死にます。お願いです……どうか、お父さんの所に連れて行ってください……お願いします」

新米冒険者の最後の願いに、死神は困ったように小首を傾げた。

「それは困ったねえ……ともあれ、話は後でゆっくり聞くとして、まずはこれを飲みなさい」

「は……」

素直に返事をした新米冒険者の口の中に広がる液体の感覚。しかし、すでに全身の感覚が麻痺し始めて味までわからない。なんだろう、これが死に水、というものなのだろうか。

「それと、これも」

再び、唇に冷たい硝子の感触があたり、これも、新米冒険者は素直に飲み込んだ。そ

して、一瞬じんわりと体が温かくなったような気がしたが、それ以上に、抗いきれない睡魔が沸き上がってきた。

「もう大丈夫だよ、さあ、帰ろう」

ふわりと抱きかかえられた感触、そして、音もなく闇の中を進んでいく気配。ああ、これでやっと、お父さんに会えるんだ。緊張の糸がぶつぷりと途切れた新米冒険者は、奇妙な安心感と共に、意識を失った。

新米冒険者が目を覚ました時、見覚えのない天井が目映る。柔らかい枕、洗濯したての香りがするシーツと毛布の匂い。

まだぼんやりとする意識で、ここは天国なのだろうかと考えた。もともと、自分が、天国に行けるような人間かどうかは知らないけれど。

あの地下下水道での乱戦が夢か何かであったかのように、全身の痛みは消えている。毛布の中から持ち上げた腕には、あれだけ手酷く大鼠に肌や肉を食いちぎられたはずなのに、傷らしい傷は残っていない。

誰かが助けてくれたんだ。

そう理解した新米冒険者の頭の中で、安堵の気持ちと同時に、父の元へ行きそびれてしまった心残りがないまぜになる。そんな彼女の思いに割り込むように、扉をノックす

る音が響いた。

現実を引き戻された気持ちと共に、落ち着かない返事をする、鈴を転がすような声と共に、地母神の神官装束に身を包んだ、まだ少女ともいえるような若い神官が入ってきた。

「お休み中失礼します、お加減はいかがですか?」

「あ……はい」

透けるような白い肌、きらきらと輝く金色の髪、磨き上げた碧玉のような青い瞳。そして、小さく可愛らしい丸い耳。どれもが羨ましく、そして、美しい姿。それにひきかえ、自分ときたら。

泥炭を擦り付けたような黒い肌、蜘蛛の糸のような鉛色の髪、雨ざらしの真鍮のような黄褐色の目、そして、中途半端に尖ったいびつな自分の耳に比べれば、なんと美しく、溜息が出そうになることか。半閻人の新米冒険者は、羨ましさと情けなさがなく、なぜになつて、女神官の姿から目をそらす。

「あの、お見舞いのお客様が来ているんですけど、ご案内してもよろしいですか?」
女神官の遠慮がちながらも丁寧な呼びかけに、半閻狩人はやや戸惑いながらも、なんとか小さくうなずいて、了解の意思を示した。

「そうですか、良かった。あの、どうぞお入りになつてください」

『うん、ありがとう』

扉の外から聞こえてくる、聞き覚えのある声。まさか、死神が自分の見舞いに？いや、そんな馬鹿なことがあるはずはない。自分は、他の冒険者に助けられ、そして、地母神を奉る神殿に運び込まれたのだろう。

そんなことを考えながら、柔らかな笑みを浮かべている女神官が、身だしなみの仕上げにと顔に浮かんだ寝汗を手ぬぐいで拭い、櫛で髪の毛を整えてもらっている自分が、どうにも分不相応な気がして、少し居心地が悪くなる。そして、声の主が、音もなくのっそりと部屋に入ってきた。

「やあ、おはよう。具合の方はどうかかな？」

黒い兜と鉄仮面、そして、念入りに顔を隠すかのような紅い色眼鏡。鎧を着こんだ上から羽織ったマント。とにかく、身に着けているものすべてが黒い。

その一目見たら忘れられないような姿は、間違いなく、地下水道で見たあの黒ずくめの死神だった。

「あの、それでは、私はこれで失礼します」

「ああ、君、ちよつと待って」

空気を読んで退出しようとする女神官を、黒ずくめの死神が呼び止め、その手の平に金貨の詰まった小袋を手渡した。

「あ、あの、御布施についてはもう十分頂いておりますので……！」

「いと慈悲深き地母神様の御加護が、これからもこの子にありますように。是非とも、君からも祈ってやってはくれないかい？」

「は……はい、わかりました」

「ありがとう、君。それじゃあ、引き留めてしまつて申し訳なかつたね」

丁寧に一礼して退室する女神官を見送つた後、黒づくめの死神は、傍らにある椅子を引き寄せるとそれに腰掛ける。しかし、想定外の重量に抗議の悲鳴を上げる椅子の様子に、一瞬間困つた様に小首をかしげた後、残念そうな様子で立ち上がった。

「やれやれ、やはり、軽装で来るべきだったかな。お嬢さんの目の前で、壊れた椅子ごと床に転げては、どうにも格好が悪いからねえ。申し訳ないけれど、君、このままで勘弁してもらえないかな」

「は、はい。あの……もしかして、あなたが助けてくれたんですか……？」

「うん、そういうことになるのかな。ともあれ、今回は間に合うことができて良かったよ。如何に冒険者の宿命とはいえ、前途ある若者の御遺体をお送りしなければならぬというのは、どうにもやるせないものだからねえ」

しみじみと呟く黒づくめの死神は、その紅色眼鏡の奥からじつと視線を向ける。

「傷も目立たないようでは何よりだ、私のように、焼きそこなつたソテーのような顔になつ

てしまったら残念だからねえ」

面頬の奥で、ひとり可笑しそうに笑った後、黒ずくめの死神は、やはり立ったままでは具合が悪いと見たのか、静かに半闇人の少女の枕元に目線を合わせるように、膝をついて身をかがめた。

「だからと言つては何だけれどね、申し訳ないけれど、同じ冒険者のよしみで兜はつけたままで勘弁してくれないかい？」

「でも……少し、怖い……です」

その、どこか気さくな雰囲気には引きずられてしまい、つい口をついて出てしまった正直かつ不用意な感想を前に、黒ずくめの死神は、不意を突かれたような視線を紅い色眼鏡越しに向ける。そして、そんな彼の様子に、半闇狩人は調子に乗り過ぎたと身を固くする。

「ハハハハハ、これは一本取られてしまったねえ。でも、元気が戻ってきたのなら嬉しいよ、うんうん」

しかし、半闇狩人の素直すぎる感想に黒ずくめの死神は楽しそうに笑い、面頬越しに嬉しそうな声を向けると、何度もうなずいた。

「いいよいいよ、君の言う通りなんだから」

見た目によらず気さくで温厚な言葉に、半闇人の少女は心の中でほっと胸をなでおろ

す。

「ところで、不躰なことを聞くようだけれど、君は闇人なのかい？」

黒ずくめの死神の率直な問いかけに、半闇人の少女は、ぎくりと表情をこわばらせる。「いやいや、誤解のないよう言うけれど、君の生い立ちをどうこう言うつもりはないよ。私も何人か闇人にあつたことはあるけど、こんな可愛らしい闇人は初めて見るものだからねえ。いうなれば、黒檀の姫君、と言つたところかな？ハハハハハ」

黒ずくめの死神からかけられた思いもしない言葉に、半闇狩人は頬に熱がさすのを感じ、つい顔をそむけてしまう。そして、雰囲気の流れされてしまいかけたものの、半闇狩人は、この冒険者に言わなければならぬことを思い出した。

「ああ、御免、御免。年寄りになると、つい思つたことが口に出てしまつていけないねえ。気を悪くしたなら、謝るよ」

「いえ……わたしは大丈夫です、それと……助けてくれて、ありがとうございます」
「やあ、どういたしまして。それと、君に伝えておきたいことがあつてね、それで今日はお邪魔したんだよ」

「な………なんで、しょうか………？」

もしかして、神殿に寄進した立て替え代の請求だろうか。もしそうだとしたら、そんなお金なんて、持っているわけがない。半闇狩人は、毛布の下で、全身をぎゅうと固く

する。

「お父さんの所に連れて行つて欲しいということなんだけどね、君にもいろいろ事情があるのだろうけれど、私には少し荷が重い。

でもね、ここで知り合ったのも何かの縁だ、元気になったら、冒険者ギルドの酒場にくるといいよ。朝と夕方はだいたいそこにいるからね、及ばずながらだけど、私もできる限り力を貸すからね」

「え……………」

「事情が分かれば何か力になれるかもしれないが、今、私からあれこれ聞くのもあまりいいことじゃないからね。君が私に話してもいいと思つてくれたら、その時に相談してくれたらいいよ。ああ、それから、神殿への寄進のことは心配しなくていいから、しばらくゆっくり休んでいきなさい。慈悲深き地母神の奇跡でも、さすがに体の芯に根を張つた疲れまでは癒すことはできないからね」

思いがけない言葉に、呆気にとられている半闇人の少女に、黒ずくめの死神は鷹揚にうなずきながら、静かに立ち上がった。

「ともあれ、君とまた話ができてよかつたよ。さて、これ以上休養の邪魔をしては体に障るし、私はこれで失礼させてもらうよ」

「は……………はい、本当にありがとうございます」

「どういたしました、では、また会えるのを楽しみにしていからね」

すうと立ち上がり、現れた時と同様、靴音ひとつ立てず部屋を去っていくその姿を見送りながら、半闇人の少女は、もしあれが本物の死神でも構わない、と思った。

いつしかぶりに感じる、安堵の感情。それに身を任せるように、彼女はもう一度柔らかい枕に頬をゆだねる。そして、全身をじんわりと伝わってくる微かに痺れるような感覚に、毛布の下で子犬のようにきゅつと体を丸くした。

「でも、びつくりしちゃいました」

いつもの酒場で、いつもの面子と夕食を囲む席で、薄めた葡萄酒を口にしながら、女神官は小さく息をつきながら戸惑ったような笑みを浮かべた。

「地下で拾った瀕死の新米冒険者のために、金貨一袋をポンと寄進。しかも、お互い白磁等級ときた、つちゆうんはの」

「ふむ、なかなか出来ることではありませんな」

女神官の話に、鉦人道士と蜥蜴僧侶は、それぞれ呆れ半分驚き半分といった表情でうなずいている。

「そして、見舞いついでに、心づけの追加ときたつてか」

「あつ、い、いえつ、それはちゃんと神殿にお納めしましたよっ!?!」

「冗句じゃ、冗句。ちゃんとわかっるとるよ」

「まったく、これだから鉦人は品がないのよね。この子がネコババなんてするわけないでしょ」

「かあつ！だから冗句と言うとるだろがい！いちいち揚げ足とらんと気が済まんのか、耳長のー！」

妖精弓手に言葉尻をつつかれ、面倒くさそうに、しかし、どこか楽しそうに言い返す鉦人道士の様子を眺めながら、蜥蜴僧侶は蕩けたチーズをたつぷり乗せたローストミートを口一杯に頬張りながら、至福の表情を浮かべる。

「いずれにしても、慈悲深き御仁ではありませんようや。祈る者として、冒険者として、かくありたいものですなあ」

「まあ、そうなんだろうけど・・・ね」

「おや？野伏殿は、まだなにかおありかな？」

「別にそういうんじゃないんだけど」

妖精弓手は、サラダの小エビをフォークで突きながら、視線を宙に向ける。

「一党の面子でもない、通りすがりの冒険者が、ピンチになった赤の他人を助けるつてのは、まあ、わかるとして……………」

「わかるとして？」

「金貨一袋を惜しげもなく寄進って、ちよつとそれってどうなんだろうな、って」

「ふむ」

「つまり、そいつに何か下心があったといたいんか？耳長は」

「ちよつと、言い方。でも、まあ……そうかも」

「なんともまあ、お前さんも、大概只人社会の空気に毒されてきとるようだよ」

とは言え、妖精弓手の言い分もいちいちもつともなこと。これが銅等級や銀等級の冒険者がしたことなら、それは率直に、そしてよくある美談として一時の話題にはなるだろう。しかし、白磁等級の冒険者の場合、世間からの受け取られ方は、どう鼻屑目に見ても良いものとは言い難い。

「まあ、確かに、人となりに問題のある御仁もおりますが故、白磁等級の冒険者に対する目は、おのずと厳しくもなるでしょうなあ」

蜥蜴僧侶は、妖精弓手の意見に一定の理解を示す。

「されど、かの御仁、噂に聞けば王都で軍人をしておられたのこと。恐らく、退役した後
の転職先に冒険者を選んだ、ということも考えられますなあ」

「はい、確かに、そんな感じの雰囲気でした」

「然り、出自が農家の三男坊であれ、精強なる近衛兵であれ、ひとたび冒険者を志した以上、白磁からの出発は不変の理。人格能力の差はあれど、出発点は皆一緒。とはいえ、か

の御仁の今後の活躍を見ないことには、流石になんとも言えませぬなあ」

「なんじゃ、結局そこに落ち着くんかい」

「然り、然り、なにせ、かの御仁の与り知らぬ場で、かような話題で盛り上がること自体、当人からしてみればいらぬ御世話、益体なき余興でありますれば」

「まあ、それもそうよね……つて、そんなことより、オルクボルクはどうしたのよ、今日は夕食一緒に食べるつて約束したじゃない！」

「まあそういきりたつでないわい、耳長の。かみきり丸にだつて都合があるんじゃ、いつものことじやろうが」

「それはそうだけど………」

まるで子供のような不貞腐れ方をする妖精弓手に、鉱人道士はあきれたように鼻を鳴らしながらも、妖精弓手のジョツキに薄めた葡萄酒を注いでやる。

「明日は休みだからつて、飛ばし過ぎじやい、耳長娘。かみきり丸が約束したなら、必ず来る。わしらはそれを待つ、それでええんじやい」

鉱人道士になだめられ、妖精弓手はなにやらぶつぶつこぼしながら、ちびちびとジョツキを傾ける。

「遅くなつた」

ぶつきらばうな言葉と共にあらわれた、安つぽく、古びた鎧に身を包んだ冒険者。彼

は、いつの間にか、彼ら一党が陣取るテーブルの傍らに現れる。

「おーそーいつ！オルクボルグ！駆け付け三杯だからね！」

「そうなのか」

「そうよ！覚悟しなさい！！」

待ち人来る。勢いを取り戻す妖精弓手の声、鉦人道士の笑い声、好物のチーズ料理を頬張る蜥蜴僧侶。そして、女神官の苦笑交じりの溜息。一党の頭目を迎えた冒険者たちの宴席は、騒々しくも、温かい喧騒に包まれた。

白磁の師弟

「やあ、おはよう、お嬢さん」

早朝の冒険者ギルド、始業時間きつちりに現れた退役軍人は、何重にも重ねて嚴重に梱包した麻袋を片手に、カウンターの向こうの受付嬢と朝の挨拶をかわす。

「先日の依頼の報告をしたくてね、今は大丈夫かな?」

「はい、どうぞ!それで、今回はどこまで進みましたか?」

「そうそう、これが一番新しい分の地図になるね。それと、これは誰か男の人を呼んでもらっていいかな」

そう言うのと、退役軍人は、手にしていた麻袋を遠慮がちに見せる。二重三重にした上に、石灰を詰めて臭いや汚物が漏れないようにしているとはいえ、大鼠の尻尾や黒蟲の牙が入った袋を、これぞ首級でござい、と、うら若き女性に手渡すのはどうにも気が引ける。

「いつもすまないね、君。申し訳ないけれど、よろしくお願いするよ。ああ、石灰が入っているからね、吸い込まないよう気を付けて」

ギルドの男性職員に麻袋を渡した退役軍人は、彼に丁寧な礼を述べた後、気を取り直

すように油紙に包んだ地図をカウンターの上に広げた。

「これは……だいたい範囲が広がりましたね」

「そうだろうか？ しかも、大鼠や黒蟲の群れが大きくなっている。現に、若い子がこの辺りで大変なことになっていたし、かなり古い御遺体もいくつかあつたんだよ。おせっかいかもしれないけれど、もし子供たちがこの辺りまで行くつもりなら、一応注意喚起はしておいた方がいいかもしれないねえ。一応、これから清書してから提出しようと思つているんだけどね」

「わかりました、でも……本当によろしいんですか？」

「うん？なにがだい？」

「こういうことを言うのもいまさらですけど、先生が苦勞して作った地図を、無償で配布させてもらつてることですよ」

受付嬢は、まだ清書前だという地下下水道の地図に目を落としながら、遠慮がちに尋ねる。その地図にしても、ただ通路が描かれているだけでなく、様々な注意書きが丁寧に記されている。

当然、字の読めない者が見ても理解できるように、命に係わるであろう危険を感じさせる絵柄を書き加えることも忘れていない。なんならこのまま受理してもいいくらい、この男の人柄が伝わってくるような版面。

地下下水道の構造に関しては、当然、ギルドでも把握している範囲での地図は用意している。しかし、大抵の冒険者は、大鼠や黒蟲の退治で手一杯。詳細な更新情報を書き留めて提出してくれる冒険者は、いないことはないが、あまり多くない。そも、そんな余裕がある冒険者は、わざわざ実入りの少ない下水道などに潜りなどしない。

「ああ、そのことかい？ いやいや、まったくかまわないよ。私が好きでやっていることなんだからね。却って、こうして受理してくれるだけでもありがたいよ」

「そ、そうですか？」

「そうとも、それにね、自分の足元がどうなっているか、それを常に知っておくことは大事なことだと私は思うんだよ」

「え……………」

「ギルド職員に対して、今更言うことではないかもしれないけれどね」

退役軍人は、断りを入れるかのように言葉を一区切りさせた後、受付嬢の目を真っ直ぐに見ながら問いかけた。

「日が差さぬ場所、暗闇に満ちた場所は、祈らぬもの達の絶好の隠れ家だよ。そんな場所をいくつも見てきたものだからね、ついいらぬお節介をしてしまう」

「は、はい……………」

退役軍人の、彼自身の経験に基づいているのであろういつになく真剣な言葉に、受付

嬢は少し気圧されたようにならず。

「まあ、なにもなければそれが一番いいんだけれどね。年寄りの気苦労ですめば、それに越したことはないんだからねえ、ハハハハ……あつ」

何かに気が付いたのか、退役軍人は急にそわそわと慌てだすと、受付嬢を急かすように話しかけた。

「どうやら、のんびりし過ぎてしまったようだよ。君、申し訳ないけれど、報告内容の確認をお願いできるかい」

「え？あ、はい。それでは、大鼠1匹、黒蟲9匹を退治、重傷を負った冒険者を救出。特記事項は別紙参照……はい、これで問題ありませんね。それでは、こちらが報酬になりますね」

同じ下水道掃除でも、他の白磁等級の倍の仕事量と精度。それでも、彼は、それが当たり前のように仕事をこなし、そして、他の新人の仕事を圧迫しない気配りを忘れない。それでも、未だ下水道探索にこだわるのは、余程慎重な性分なのか、それとも、他に理由があるのか。しかし、それは本人の口から語られない以上は、無意味な憶測でしかない。

「先生、お疲れさまでした」

「うん、ありがとう。ではまたお世話になるよ」

報酬の金貨一枚を丁寧に押し頂くように受け取り、感謝の意を示した後で、珍しく急いた様子でカウンターを離れようとした退役軍人の前に現れたのは、槍使いの冒険者。

「よお、あんた、まだ下水道探検を続けてんのか?」

「やあ、おはよう。それと、君。申し訳ないけれど、その話はまた後でいいかな」

「はあ? アンタ、何慌ててんだよ」

「いやいや、そう言うわけではないのだけどね」

この槍使いの青年も、悪い人間でないことは十分理解している。しかし、たまにやや面倒臭い時がある。特に、今回のように、特定の人物と会話を交わした後は特に。

だが、今だけはどうか勘弁してほしいとつくづく思う。退役軍人は、先ほど見えた、見覚えのある姿を探そうとして、いつの間にかそれが間近に来ていたことに気が付いた。しかし、

「あん、誰だお前?」

敵意に満ち満ちた表情で、槍使いの青年を無言で睨みつける半闇人の少女。その金色の瞳は、獐猛な狼を思わせる眼力で真っ直ぐ槍使いを射抜くが、当然、そんなことでひるむような槍使いでもない。

「俺になんか用かい、お嬢ちゃん」

「お前に——！」

そう言われる筋合いなんか無い、そう叫びかけた半閹狩人の氣勢は、ことさら陽気に向けられた退役軍人の言葉で遮られた。

「やあ、君か！もう起きてきて大丈夫なのか？いや、もつと休んでいた方がいいんじゃないかと思っていたんだよ」

「お、お師匠様、でも、こいつは——！」

「こらこら、人様に対してそんな言葉遣いはいけないなあ。大丈夫、彼は私の知り合いなんだから、ちゃんと行儀よくしないとイケないよ？」

「は、はい……ご、ごめんなさい、お師匠様」

「ということなんだよ、君。見てのとおり先約があるものだからね、申し訳ないけれど、これで失礼させてもらうよ？」

予想外の光景に鼻白みながらも、槍使いは面倒くさそうな表情でふたりに視線を向ける。

「ああそうかよ、邪魔して悪かったな、お師匠様」

ようやく状況を理解した槍使いは、やや皮肉交じりの言葉を退役軍人に向けるが、その瞬間、再び半閹狩人から親の仇の如き物凄い形相で睨まれた。

「だから駄目だっていつているのに、君はもう。それじゃあ、また今度」

これ以上状況を悪化させないよう、半闇狩人の手を引いてそそくさと酒場へ向かう退役軍人の背中をいぶかしげに見送っていた槍使いは、いつもよりかなり強く、魔女の杖で頭を小突かれた。

「いやあ、さつきは驚いたよ。君、さつそく来てくれたんだね」

「はい……あの、ご迷惑じゃなかったですか……?」

「何を言っているんだい、またこうして会えて嬉しいよ、本当に良く来てくれたね」

また会えて嬉しい。そんな退役軍人の言葉に、半闇狩人は全身が熱くなるのを感じ、もじもじと体を揺する。そんな彼女を丁寧にエスコートして、いつもの酒場の片隅に席を取り、向かい合うように腰を下ろした退役軍人は、数日ぶりに再会する若い半闇人の冒険者を改めて出迎える。

そして、目の前の彼女の姿に、自分が望んだとおり、寺院はこの半闇人の少女に対して、きめ細かく身の回りの世話をしてくれたことに感謝する。

無残に引き裂かれた衣服は可能な限り繕われていたし、髪や肌も清められ、年相応の艶を取り戻し始めている。

しかし、それでも褐色の肌を通してでさえ容易に見て取れる、目の下に濃く浮かぶくまや、ひび割れて荒れた唇、痩せこけた頬の様子から、これまで相当過酷な生活を送っ

てきたのであろうことは容易に想像がついた。

まだ若そうにみえるけれど、これは、相当苦勞してきたようだねえ。

退役軍人は、ため息交じりに心の中で呟きながら、自分の向かいでおどおどとした様子で座っている半閨人の少女をみやる。

彼女は今、いくつくらいなのだろう？

ふと、頭の中をよぎる考え。只人とは違い、森人や閨人の年齢は見た目では及びもつかないことはままある。さつきから感情豊かに動く、控えめに尖った可愛らしい三角形の耳は、純粋な閨人ではなく、いくらか只人の血が流れているからだろう。

あどけなさで端麗さが同居する彼女の容姿は、成人したての只人の少女そのもののだが、いずれにしても女性としての気遣いは必要とするところだろう。

しかし、なによりも優先させなければならぬことを思い出した退役軍人は、半閨人の少女の顔を覗き込みながら尋ねた。

「それより、君、朝ご飯はもう食べたのかい？」

「あの……すみません、起きてすぐここに来たので……」

「ううん、それはちよつと良くないなあ。朝食は一日の基本だからね、でも丁度良かった。私もこれから朝食をとろうと思っていたからね、一緒に食べようじゃないか」

退役軍人の言葉に、半閨人はきまり悪そうにもじもじとうつむくと、もごもごと口

の中で呟いた。

「あの……その……ごめんなさい、お師匠様。わたしは、大丈夫ですから……」

世話になった寺院にいとまを告げた後、さつそく冒険者ギルドを訪れたまでは良かった。しかし、今まで食うや食わずの生活をしてきた自分に、酒場で朝食を頼めるほどの持ち合わせなど、持っているはずもなく。

「ねえ、君？あの時、何も心配いらなと言ったじゃないか。ともあれ、私に任せておきなさい。だいたい、年寄りの使い道はそれくらいしかないんだから」

「あの……でも……」

「ところで、良ければ教えて欲しいんだけど、私を師匠と呼んでくれるということは、これから私と一緒に冒険をしてくれると思っただけなんだね？」

期待がこもった退役軍人の言葉に、半闇人の少女はうつむきながら遠慮がちにうなずく。そして、その三角形の耳は、褐色の皮膚を塗り替えるかのように赤く染まっていた。「じゃあ、決まりだね。弟子にひもじい思いをさせないのは、師匠の務めだからね。本当になにも心配はいらないから、私に任せておきなさい」

そういうと、退役軍人は獣人女給を呼び止めると、二人分の朝食を注文する。それにしてこの女給、この酒場全体によく気を配っている。こうして、タイミングを見計らうように、それとなく注文をしやすい位置に来ていてくれるのだから。

「あいあい、それじゃ、ミルク2杯にゆで卵2個、パスタ盛り合わせに、ササミのサラダ盛り合わせですね!」

「うん、よろしくお願いするよ」

「毎度!」

そして、獣人女給は、にしし、と笑みを浮かべる。

「それにしても先生、いつの間にかこんなかわいい子とお知り合いになったんで?」

「ふふふ、そうだろう、そうだろう? いやいや、実に若返る思いだよ」

「はいはい、ごちそうさまですよ。それじゃ、少々お待ちを!」

ぱたぱたと厨房へ向かう獣人女給に小さく手を振って見送りながら、退役軍人は楽しそうな声で半闇狩人に話しかける。

「このギルドの人たちは、みんな楽しい人たちばかりだよ。おかげで私もずいぶん助けてもらっているよ。君も今まで辛いこともたくさんあっただろうけれど、これから一緒にがんばってみようじゃないか」

「は……はい! わたしの方こそ、よろしくお願いします、お師匠様!」

今度こそ、気持ち溢れんばかりの声と共に、深々と頭を下げる半闇狩人と、嬉しそうになぜか退役軍人の様子を、厨房のカウンターの前で、獣人女給もなぜか一緒になつてうんうんとうなずいていた。

「ところで、君。これから一緒に冒険をしていくわけなんだから、君のことを教えて欲しいと思うんだよ。ああ、もちろん、私のことも何でも聞いていいよ。なんといつても、私たちはもう仲間なんだからね」

オリーブオイルと岩塩の粉末、そして細かく刻んだ香草を絡めただけの、質素だが量は存分にあるパスタを大皿からとりわけ、もりもりと頬張りながら話しかける退役軍人に、半闇狩人は戸惑うような表情を浮かべる。

面頬や兜をつけたままで、食べづらくないのかな。そんなことを考えながらも、彼女は、ちみちみと咀嚼していた口の中の物を飲み込む。

おいしい

寺院で供された食事でも悪くはなかった。それでも、久しぶりに食べる、塩気のきいた卵や鶏肉の味。なによりも、誰かと一緒に食べる食事。そう意識した瞬間、亡き父と一緒に生活していた思い出がよみがえり、彼女の目の端に、じわり、と涙が浮かぶ。

「ああ、いや、話しづらかったらいいんだよ。すまなかつたね、少し調子にのつてしまつたようだよ」

慌てた退役軍人の様子に、半闇狩人は、なんとか精一杯笑顔を浮かべながら応える。

「ごめんなさい、ちがうんです……あの、わたしは大丈夫です、お師匠様。それで……え

えと、何からお話すればいいですか？」

「そ、そうかい？」

健気な半闇狩人の言葉に、退役軍人は気を取り直すようにジョッキのミルクを一口飲むと、もう一度彼女に話しかけた。

「そうだねえ……うん、君は、冒険者になってからどれくらいなのかな？」

そう、まずは気になっていたこの半闇人の少女の年齢。純粹な森人や闇人ほどではないにしろ、半森人や半闇人も只人にくらべれば長命であり、見た目以上の年齢である場合もよくある話。

もしかしたら、見た目は幼くても自分と同年代、さては年上である可能性も否定できない。今後の接し方を考えると、年齢とまでは言わずとも、おおよその年代の把握だけはしておきたいところ。

かつて現役だったころ、新たに配属された新しい軍団員が、てつきり年下の部下かと思っていたら、実は自分よりはるかに年上の半森人だったことがあり、それまでの接し方を顧みて相当泡を喰った記憶があるだけに。

それに、冒険者は基本、成人してからの登録が原則であるから、そこから大体の年齢は計算できる寸法。率直に尋ねれば、話は早いのだろうが。

女性に対して年齢の話は失礼だからねえ、うん、我ながら冴えているじゃあないか。

などと、頭の中で自画自賛している退役軍人に、半闇狩人は、おずおずと答え始めた。「その……去年、成人になったので、その時に登録しました」

ということは、自分よりはるかに年下であることは確定。退役軍人は、ひとまず安心するように肩の力を抜いた。もつとも、自分より年上であつたとしても、それはそれで、いろいろ気を遣わずにすんだわけだが。

しかし、彼女がぽつぽつと語る身の上話に、退役軍人はその紅眼鏡の奥で眉をひそめていく。最初からある程度想定していたこととはいえ、実際に耳にして心情的に平気でいられるかと言えば、また別の話。

この街からさらに離れた山岳地方の、とある山奥の村で生まれた半闇狩人。彼女の父親は、その山村の出身で、猟師として生計を立てていたが、魔神王との戦争が始まると同時に徴兵された。

その後、運よく戦争を生き延びた彼の父親は、戦地で結ばれた身重の妻を伴い、村へ帰ってきた。と、そこまではよくある話。しかし、他と少し違ったことは、彼の妻は闇人だつたということ。

だが、弓兵として戦功を挙げ、戦場から帰還した青年の妻に対して、村としても表立つた拒否感とは表さなかつた。しかし、彼の妻は、子を産んで間もなく病に倒れ、闘病むなしく息を引き取つた。それでも、残された父子は、猟師として山野を駆け続け、日々の

糧を村にもたらし続けた。

しかし、ある日遭遇した赤毛の大熊。娘をかばいながら奮闘した父は重傷を負い、どうにか村まで帰り着いたものの、娘の必死の看病の甲斐なく、妻の元へと旅立つてしまった。

そこからは、退役軍人の想像した通りの話。未だ迷信深く、他種族に対する知識も理解も欠けていた村人達からの、畏怖と嫌悪の目に耐えきれず、身一つで村を出奔した彼女は、日々の糧を得るため冒険者となり、今に至る。

半闇狩人の身の上話に、退役軍人は、その色眼鏡を外し思わず目元をおさえる。今の場でもしも、を論じても仕方のないこと。しかし、もし、彼女の父が都の住人であれば、こうはならなかったであろう。そんなことを今更論じようと考えようと、もはやどうにもならないことなのはわかっていいるのだが。

「君……今まで、ひとりで良く頑張ったね」

退役軍人は、色眼鏡をかけなおしながら、声の震えをなんとか隠しつつ、半闇狩人に言葉をかける。

「でも、大丈夫。これからは私がいるよ。だから、もう何も心配はいらないよ」

小さく鼻をすすり上げながら、まっすぐに自分を見る退役軍人に、半闇狩人は、思いもしなかった師の様子に戸惑いながらも、はにかむような笑顔でうなずき返していた。

ギルドの冒険者訓練所。その敷地の一角にある射的場で、短弓から放たれた矢が小気味よい音を立てて正鵠に突き刺さる。続いてその指一本隣り、そして、その少し斜め上。一度放った矢に当てないように、位置をずらして命中させていくその様子に、退役軍人はその腕前に素直に感心する。

「これは凄い、投石紐の扱いもそうだけれど、さすが獵師だけあつて見事な腕前だねえ」
「あ、ありがとうございます、お師匠様」

相変わらず、常に一步引くような彼女の反応に、退役軍人は面頬の奥で苦笑する。彼女はそう言うが、あの時、回収しておいた彼女の装備。特に、その短弓は、見かけのわりに弦や弓柄の予想外の強さに驚いたことを思い出す。

彼女は謙遜しているが、質実剛健を形にしたようなその弓を、自在に使いこなしているだけでも大したものだ。

「いやいや、これじゃ、私が教えることなんて何も無いんじゃないかな」
「そつ……そんなことないです、お師匠様」

村にいた頃は、獵師だった父と野山を駆け巡り、獣や野鳥を仕留め、生計を立てていた。投石紐の礫一個、弓から放つ矢一本が、自分の命と生活をつなぐもの。外れても仕方ないなどと、いい加減に放つたことは一度もない。

弓にしても投石にしても、絶対の自信を持つていた。しかし、そこに慢心がなかったとは言えない。現に、それで命を落としかけたのだから。久しぶりに握る短弓を胸にかき抱きながら、半闇狩人は師の称賛にもじもじとうつむいた。

あの時、地下水道で落としたと思つていた弓も小刀も、師が回収してくれていた。その上で、新しい装備を勧められもしたが、彼女は修理を選んだ。

確かに、師が言う通り、射程も威力も数段上の弓は、ギルドの武器屋にまぶしい姿をみせて並んでいた。しかし、彼女の中には、亡き父の教えが今でも強く息づいている。遠くからの当てをしたければ、バリスタで象でも撃て。

はるか遠くから神経をすり減らし、苦勞して目的を狙い当てる技術よりも、相手に悟られず、必中の間合いまで接近し、確実に急所を射抜け。そんな狩人としての父の教え。

そしてそれ以上に、この弓は幼い頃、父と共に仕立てた弓。弓柄についた傷ひとつ、しみひとつに至るまで、どんなに金貨を積まれても代えられない思い出がつまっている。「か、狩りと冒険は違います……それを教えてくれたのは、お師匠様です」

「そうかもしれないね、それでも、君の技は本物だよ。戦だって、二度目、三度目があつてこそ、次につなげることができるとだからね。私はね、その手伝いができればと思つてゐるよ」

「はい、よろしくお願いします、お師匠様！」

だから、そんな柄じゃあ無いんだけどねえ。退役軍人は、このどこまでもひたむきな半闇人の少女を前に、マントの下で困ったように身を揺する。

その生まれにかかわらず、御両親に愛されて育てられたのだな。退役軍人は、このまっすぐな心持ちの半闇人の少女を感慨深く見つめる。

「ともあれ、飛び道具の方は、問題はまったくくないね。しいて言うなら、取っ組み合いの喧嘩の仕方かな」

「はい、お願いしますー!」

半闇狩人は、腰に下げた小刀を取り出す。後でよく聞けば、この小刀、狩人の装備として伝わるもので、山刀として振るうだけでなく、柄が管状になっているため、手ごろな棒切れを差し込むだけで短槍としても使える機能的なものだった。

しかし、退役軍人は、やっぱりとそれを制して鞘にしまわせた。

「そうだね、でも、その前に受け身の練習をしなければいけないねえ」

「受け身……ですか?」

「そうとも、殴る蹴るを覚えるよりも大事なことだよ。酔っ払い同士が喧嘩をして、たまに酷いことになるだろう?素人の喧嘩ほど、命に係わる危険なものはないんだよ。それはどうしてだと思ふかな?」

「力加減がわからないから……ですか?」

「それもあるけどね、他にも何かあるんじゃないかな？」

更なる退役軍人の問いかけに、半闇狩人は形のいい小さな顎に手を当てながら、うんうんとしてしばし考えを巡らせる。そして、退役軍人も、急かすことなく辛抱強く彼女の答えを待つ。

思考を巡らせる半闇狩人の記憶の中に、村であった酔っ払い同士のいざこざの一部始終を思い出した。あの時は、父が止めに入ったが、その時は――

「……転んで、頭を打つから……だと思えます」

「そう、そのとおりだよ」

半闇狩人の答えに、退役軍人は満足そうにうなずき、彼女も、そんな師の反応に表情が明るくなり、三角形の耳が躍るように揺れる。

「相手の攻撃を受けた時、運悪く足を滑らせた時、そんな時は、無理して踏みとどまるより、場合によっては素直に転んだ方がいい時もあるんだ。

でも、転び方を知らないし、自分の体重と同じ衝撃がともに伝わる。それだけじゃないよ、転んだ先に石や堅いものがあつたとしたら、そりやあもう、頭や背骨がどうなるか、言うまでもないだろうねえ」

退役軍人の答え合わせを、半闇狩人は真剣な面持ちで耳を傾ける。その様子に、退役軍人は安心したように言葉をつづけた。

「素手の取っ組み合いにしろ、武器を使った大立ち回りにしろ、まずはきちんとした基礎あつてのものだからね。大樹は、なぜ大樹たり得るか、わかるかい？」

謎かけじみた師の問いかけに、半闇狩人は、今度も真剣になつて考える。師は、自分が全く知らないことは、まず、聞かない。答えはおそらく、自分の記憶の中にある。さつきの問いもそうだったように。探そう、素早く、そして、正確に。

大樹、なぜ、大樹が大樹たり得るか。

父と共に、村人総出での開墾に参加した時のこと。幹を切り倒されてなお、深く、広く根を張り、その場から動かすことすらできなかつた切り株。

「根っこが……大きいからだ、思います」

「そう、そのとおりだよ。大樹を大樹たらしめるのは、幹の太さでも枝葉の広がりでもないんだよ。根の浅い大木は風雪の前に容易く打ち倒されてしまう。でも、太く強く根を張った木は、いかなる困難にも耐えて、さらに枝葉を茂らせるんだ。

大事なのは土台だよ、それを疎かにしていたら、いくら技や体を鍛えても何かの拍子で簡単に打ち倒されてしまう。地味で目立たないものにこそ、大事なことがたくさん詰まっているものなのさ。

「というわけで、しばらくは受け身の練習をして、文字通り体が覚えてくれるようにしようじゃないか」

「はいー」

「じゃあ、お手本を見せるから、ちよつとこれを持ってもらえるかい」

退役軍人は、羽織っていたマントを外して適当に丸めると、半闇狩人に手渡した。しかし、予想に反してずしりと重いそれに、半闇狩人は一瞬目を丸くする。

「なにせ、マントをつけたままじゃ体の動きが分からない。それじゃ、意味ないからね」
そう言つて、退役軍人は、しゃがんだ姿勢から地面に転がる動作を数回繰り返す。はた目から見れば、ただ地面を転げまわっているようにしか見えない滑稽な動作に、周囲で彼らの様子を興味半分でうかがっていた新人冒険者たちの中には、思わず吹き出すものも現れる。

『プツ……なにあれ』

『おっさん、どうかしちまったのかな』

純粹な森人ほどではないにしろ、半闇狩人の耳はその失笑を聞き逃す筈もなく、彼女は眉を吊り上げて憤怒の形相で振り向くと、声の主に向かって威嚇的な視線を撃ち放つた。

「君、君、よそ見なんかしちゃあダメだよ、ちゃんと見て覚えなきゃね」

地面の上を転がりながら呼びかけてくる師の声に、半闇狩人は、今朝も槍使いの冒険者に対して敵意をむき出しにした態度をたしなめられたことを思い出し、不承不承なが

らにも怒りを呑み込むと、再び真剣な表情で師の動きを目で追う。

「さて、お手本はこのくらいでいいかな」

やはり、装備を着装したままだと、腰にくるねえ。などと呟きつつ、退役軍人は、よつこらしよ、と呑気な掛け声と一緒に、寝転んだ姿勢からばね仕掛けの玩具のように跳ね起きると、その装備に似合わぬ身軽さで立ち上がった。

「さ、それじゃあ、君もやってごらん？」

「はい、お師匠様！」

半闇狩人は、退役軍人がして見せたように、しゃがみこんだ姿勢から地面に転がった。しかし、慣れていない、という事を差し引いてもぎこちなく危なっかしい動き。一旦中断し、もう一度説明とお手本を、と退役軍人が思った次の瞬間、

「うあっ!!」

「ちよ!?!大丈夫かい!!」

「うああああああああっつ……………!」

地面に紛れるように埋まっていた小石で後頭部を痛打し、声にならない悲鳴を上げて悶絶する半闇狩人は、先ほどの師の言葉の意味を、身をもって理解することになった。

夕方、というには少し早い時間。ギルドに戻った退役軍人と半闇狩人のふたりは、酒

場の端にあるいつもの席に落ち着くと、一日の疲れを吐き出すように一息つく。

半闇狩人が後頭部に小さなこぶを作ってしまった、大丈夫という彼女の言葉を却下した退役軍人は、大事をとって今日の稽古をとりやめた。

「じゃあ、食事の前に湿布を取り換えようか」

「お、お師匠様、もう大丈夫ですから……」

「いけないよ、女の子なんだから、ハゲができたら大変じゃあないか」

「は、はい……」

髪を伸ばしているとはいえ、銅貨ハゲはいやだな、と思いつつながら、半闇狩人は、退役軍人の隣に席を移すと、後ろを向いて銀灰色の髪をすき上げる。

「ちよつと痛むかもしれないけれど、我慢しておくれ」

退役軍人は、半闇狩人の頭に巻いた包帯を丁寧にはどくと、髪を染み込ませた小さな布切れを慎重な手つきで取り除く。

「いいかい？吐き気がしたりとかあくびが止まらないようなら、すぐに私に言うんだよ？必ずだからね？」

「はい……」

退役軍人の言葉に、半闇狩人は、恥ずかしさと申し訳なさでぎゅつと肩をすくませる。自分の失敗のせいで、貴重な治療の水薬を使わしてしまった。水薬一本とは言え、それ

がどれだけ高価なものかは知っている。

冒険のさなか、怪物に噛まれたとかならともかく、こんなみつともない失敗で、余計な負担を師にかけてしまった自分が情けない。朝には弓や礮の腕前を師に披露して、得意げになっていた自分を張り倒したい気持ちで一杯だった。

「やはり、革の防具一式くらいは必要だねえ。君は、着たことがないからいいとはいうけれど、万一の備えを考えるとやっぱりあつたほうがいいね」

新しい湿布のひやりとした感触と、優しく、しかし、丁寧に巻かれていく包帯の感触に、半闇狩人の目からじわりと涙があふれ出す。

「ああ、ごめんよ？ 痛かったかい……？」

気配を察した退役軍人の声に、半闇狩人は力なく顔を振る。子供ではないのだから、このくらい痛い痛みは我慢できる。けれども、今はただ、心が痛くて仕方なかった。恩人に対して、なにも報いることができない情けない自分。

そんな、塩を振りかけた青菜のように力なくしおれる彼女の姿に、退役軍人は小さく、優しい溜息をついた。

「私はね、若い頃から、数え切れないくらい失敗して、恥をかいて、いつも隠れて泣いていたものさ」

肩越しに聞こえる、退役軍人の穏やかな声。半闇狩人は、その言葉の意味をはかりか

ね、思わず目を泳がせる。

「たくさんの人に迷惑をかけて、たくさんの人に笑われて、そりやあもう、どこかへ逃げ出したいなんてもんじゃなかったよ。実際、本当に一度逃げ出したからね」

かつてを懐かしむかのような退役軍人の声を聞きながら、半闇狩人は膝の上に落ちた涙を固く握った拳で払う。

「それでも、逃げたからと言って、その先でも上手くいく筈はなかったんだけどね。でも、こんな私にも、手を差し伸べてくれた人がいたんだよ。相変わらず、迷惑のかけっぱなしだったけどね」

自分を思いやってくれているのであろう師の言葉、しかし、その優しさが、今はとても辛く、痛い。

「だから、私が今、こうしてここに居るのは、自分の力だけではないんだよ。そりやもちろん、自分なりに何とかしようとする努力もしたよ。でも、運もあつたかもしれないけれど、やはり、たくさんの人に助けてもらって、ここまでこれたんだ」

退役軍人の言葉がいったん途切れ、代わりに、きゅつと包帯を止める微かな感触。
「だからかなあ」

退役軍人の両手の平が、固くすくめられた半闇狩人の、痩せた両肩をゆつくりと解きほぐすかのように添えられる。

「私もね、そういう人たちみたいになりたいんだよ。まあ、説教臭い話はこの辺にして、ちよつと早いけれどご飯にしようじゃないか。お腹がすくから、考え方が悲観的になつてしまふんだよ」

ぽんぽんと穏やかに両肩をたたく師の言葉、これ以上この優しい師に心配をかけたくない。しかし、それ以上に、師が自分を励まそうとしていることがよくわかつたし、それがとても嬉しかった。

「……はいーありがとうございます、お師匠様ー」

振り返り、ようやく笑顔を見せてくれた彼女に、退役軍人もようやく安堵するかのように、穏やかにうなずいた。

「それで、さっきの話なんだけどね。やはり、いろいろ足りないかなと思つているんだよ」

「装備とか……ですか？」

「そうだね、さつきも話したけど、君にも最低限の備えはあつた方がいい。これからのことを考えると、やはり、防具は必要だよ。特に、頭はね。後は、出来れば治癒の術や奇跡が使える仲間が欲しい所だけど、それはこれから次第といったところだねえ」

「そう………ですよね」

新しい面子が欲しい、そんな師の言葉に、半闇狩人の胸がちくりと痛む。味方が増えれば、冒険や依頼が成功する確率は上がるし、生き残れる確率も上がる。それはもちろん理解できたし、望むべきことだった。

それなのに、なぜこんな気持ちになるのか。そんなとりとめのない感情に、食事の手が止まる。

「ただ、お互い白磁だからねえ。信用なんてあつて無きがごとし、当分は私達ふたりで地道にやつていくしかないねえ。君さえかまわなければ、また地下下水道に行きたいんだよ。実は、まだやり残していることもあるんだ」

「わ……わたしは、どこだつてお師匠様のお供をします！いえ、させてください！」

ひたむきな半闇狩人の言葉に、退役軍人はやや驚いたように食事の手を止めるが、すぐに嬉しそうな声を彼女に向けた。

「ありがとう、そう言ってくれると嬉しいよ。それに、ちよつと気になる噂をきいたものだからねえ」

「噂——ですか？」

「うん、そうなんだ。なんでも、ここ最近、地下下水道掃除の依頼なんだけど、未達成が多いんじゃないか、つてことなんだよ」

「——そんなことが？」

「そうなんだ、大怪我をしてやつとの思いで帰ってきたりは良い方で、未だに消息が分かっていない若い子たちもちらほらいるらしいんだ」

「でも、それが騒ぎになっているという話は、聞いたことなかったです」

「そりゃあならないよ、君。こう言っちゃ乱暴だけど、大鼠や黒蟲を甘く見た新米冒険者が運命の骰子に見放された、ただそれだけの話なんだからね」

退役軍人の言葉に、半闇狩人はまさに自分自身がそうであったことを思い出し、ぞくりと肩を震わせる。

「一匹二匹程度の大鼠なら、新人の手慣らしに丁度いいかもしれないよ。でも、これが一〇匹近くの群れに一齐にたかられたら、素人に毛が生えた程度の腕前じゃお手上げだ。けど、問題はそこじゃない。

地下下水道のそこかしこで、そういつた群れにぶつかりやすくなっている。これじゃ、新人が経験を積むどころじゃないよ」

退役軍人は、ずらした面頬の隙間から器用に牛肉入りシチューをすすりながらぼやく。

「あの……そう言えば、お師匠様は、地下下水道の地図を描き直してると言ってましたよね」

「うん、そうだね」

「お師匠様が、今まで誰もいかなかったような場所まで足を延ばしたから、大きな群れを見つけたということはないですか……?」

「それも考えたよ、でも聞いていた話と違う気がしたから、余計気になるんだよ」

「初心者向けの場所……なのにはですか?」

「そうだね、確かに、冒険者がよく通る場所の大鼠が狩りつくされて場所が空き、そこへ奥からあぶれ出した群れが代わりに居つき始めた、とも思っただけけどねえ……」

退役軍人は、牛乳のジョッキをぐびりとやりながらため息をつく。

「あれじゃ、まるで番犬かなにかみたいだよ」

半闇狩人は、師がこうも悩むのを目の当たりにして、自分が思っていたよりも深刻な事態が起こっているのではないかと思いはじめ。

「少なくとも、初めて師と会ったあの日。ひとりで10匹以上もいた大鼠の群れを、文字通り鎧袖一触の勢いで塵殺したあの戦いぶりに、苦境を感じさせるような様子はどこにも見当たらなかった。」

その師が、状況を憂いている。だからこそ、一党に戦力を追加する必要があるのだ。そして、未熟な自分のなんと不甲斐ないことか。半闇狩人は、次々と頭の中に浮かぶ思考に引きずられ、食事の手が止まる。

「ねえ、君。また、自分を責めるようなことを考えているね?よくないなあ、それは、よ

くないよ?」

退役軍人の明るい口調に、半闇狩人はおずおずと顔を上げて、やや上目遣い気味に師を見る。およそ、闇人の血を引いているとは思えない、その只人の村娘のようなその仕草に、退役軍人は肩を揺すりながら笑う。

「君の猟師としての腕は本物だよ、これは自信をもっていいからね。私が、保証するよ。君はね、言ってみれば、冒険者という宝石の原石なんだよ。」

宝石っていうのはね、石くれ同然の原石を、時間をかけてやすりで丹念に削り磨いて、光り輝く宝物に仕上げるんだ。やすりが何本駄目になったっていいじゃないか、最後に君が輝くなら、それはとても素敵なことだよ」

退役軍人は、そういつて楽しそうに笑いながら、通りかかった獣人女給に、牛肉シチューのおかわりを注文した。

「君も、遠慮しないでたくさん食べなさい。ここのシチューは、本当に美味しいねえ」

地下水道

一切の光が届かない地下水道、その暗闇に滲み浮かぶような微かな蠟燭の光に揺れるふたつの人影が、息の詰まるような異臭と激んだ水音の中を音もなく進んでいく。

「この辺りは一度毒気が漂っていたことがあるんだ、あの標本の匂いは覚えてるね？それが少しでもしたら、すぐ引き返すよ」

「はい、お師匠様」

「それと、防毒面はちゃんと持っているね？もし私が蠟燭を消したらそれが合図だから、落ちていて打ち合わせ通りにやろう」

「はい、お師匠様」

退役軍人の言葉に、半闇狩人は腰の後ろに提げた円筒状の雑嚢を確認する。その中に入っている鴉の嘴のような防毒面は正直不気味ではあったが、今着ている革の防具と同様に、師からの大切な贈り物。粗末にするはずがない。

闇人の血が半分流れる自分にとって、完全な闇の中も薄暮程度には見渡せる。しかし、只人である師はどうだろうか。地下水道に潜ることになったその日、師が用意した明かりらしい明かりと言えば、細い蠟燭を仕込んだカンテラひとつ。

「私は大丈夫だよ、若い頃、訓練したからね」

自分の危惧を読んだ察したかのような師の言葉、そういえば、初めて会ったあの時も師は松明を灯してはいなかった。

「危ないから、本当は蠟燭も使いたくないんだけどねえ」

「え、どうして……ですか？」

明かり、というか、視界はあるに越したことはない。いくら、訓練を積んで、暗闇の中を見通せることができるとしても。

「うん、こういった不潔な場所にこもる毒気の中には、窒息してしまうものだけじゃなくて、火をつけたら爆発するものもあるんだよ」

「えっ……!?!」

「それが、あの時覚えてもらった標本の匂いさ。ともあれ、今のところ、毒気は無し。大鼠や黒蟲の群れもどこへやら。こんな感じなら、ずっと続けばいいのにねえ」

靴音ひとつ立てずに歩く退役軍人の周囲を警戒するように、短弓を油断なく構えた半闇狩人が続く。今のところ、数匹程度で徘徊する大鼠や黒蟲はいたが、こちらに気づかれる前に、ことごとく半闇狩人の短弓で仕留められた。

「やっぱり、君がいてくれると助かるねえ、仕事がかどるよ」

「ありがとうございます、お師匠様」

退役軍人の言葉に、半闇狩人の耳が躍るように動く。しかし、その手は、つがえた矢をいつでも引き絞れるよう備えている。そして、時折、蠟燭のかすかな光を反射して、金色の瞳がおろしたての金貨のように光る。

「こちらこそどういたしまして、ああ、そこは石積みが崩れて横穴になっっているから気を付けて」

退役軍人が注意を促す声に、半闇狩人はぎよつとして壁から距離をとる。師の言うとおり、横穴から不意打ちを受け、耳をかじられて青ざめた大狸のようになるのは御免だった。

一方で、ほぼ順路を記憶しているのか、時折こちらに注意を呼びかけながらよどみなく進んでいた退役軍人の歩みが止まる。

「お師匠様……?」

「さて、ここから先は、まだ行ったことのない区画だ。何かあるかわからないから、慎重に行くよ」

「はい、お師匠様」

退役軍人は、暗闇の中も意に介さない様子で書きかけの地図を広げると、細く削った木炭で何かを書き込んだ後、未知の領域に向かって歩き出した。

「今でこそ当たり前のように使っているけれど、これでも一応昔の遺跡だからね。この

町ができた時に調査はしているだろうけれど、なにぶん昔の話だ。昔そうだったからと言って、今日もそうだとは限らないからね」

確かに、こんな不潔な場所、一度作ってしまったら、わざわざまた入りたとは思わないだろう。人が手を加えるのは、決まって何かが起こってから。これは、どんなことにも言えること。

「——お師匠様」

半闇狩人の緊張を含んだ押し殺すような声に、退役軍人は歩調を緩めながら、フランジメイスの柄を確かめる。

「今、微かだけど、人の声が聞こえました」

「本當かい、まさかオバケじゃないだろうね」

「そこまでは……でも、確かに、あっちの方から聞こえました」

「他に何かわかるかい？」

「ごめんなさい……それ以上は、わかりません……」

「うん、でも、誰か迷っているのかもしれない、注意しながら探しに行こう」

「はい、お師匠様」

退役軍人は、カンテラを左に持ち直し、右手にフランジメイスを構える。そして、左腕に固定した小盾をカンテラごと隙なく掲げ、音もなくマントを翻しながら歩みを早め

る。

初めて見る、戦闘に備えた師の姿に、半闇狩人は、感動でじんと全身が痺れるのを感じながらも、油断なく師の後に続いた。

「GURURU………」

「GYUGYU………」

20歩ほど先に蠢く無数の塊。死骸か何かにかかる大鼠と、おこぼれを狙う黒蟲が周囲の様子を窺っている。そして、実に面倒なことに、それが一杯になつて通路を塞いでいた。

“——撃つていいですか？”

“——頼んだよ”

事前に入念に打ち合わせをした、指先と手元の動きだけで意思を伝える合図をかわした後、半闇狩人は文字通り矢継ぎ早に矢を射かけ、放たれた矢は大鼠の心臓や耳穴を直撃し、たちまち数匹が短い悲鳴と共に石床に転がる。

「GYUGYUGYU!!」

食事の邪魔をされた怒りにまかせ、生き残った大鼠数匹が突進してくる。それらを前に、退役軍人は、喉笛めがけて飛びかかってきた最初の一匹の頭蓋をフランジメイスの一撃で粉砕し、返す勢いで続くもう一匹の横つ面に振り抜いたメイスの一撃をお見舞い

した。

「GYAGGYAGYA!」

仲間の死骸を踏み台にして飛びかかる大鼠を小盾の縁で殴りつけて叩き落とし、足元に噛り付こうとした大鼠の鼻面に鉄板を仕込んだブーツの爪先がめり込む。

そして、悲鳴を上げて石床の上に転がった大鼠の耳や目に、すかさず半闇狩人の放った矢が突き刺さり、奥まで達した矢じりは大鼠の脳漿をかき回した。

あつという間に大鼠の群れが全滅し、不利を悟ったのか。それとも、慌てなくても餌は手に入ると思ったのか、黒蟲達はその場から離れ、様子をうかがうように動きを止める。

「ただの共食いか、良かった良かった」

大鼠たちがたかっていたのは、今しがた蹴散らしたものより倍近い大きな個体。老衰か、怪我をして動きが鈍ったところを狙われたのか。その時、仕留めた大鼠から手早く耳や尻尾を切り落としていた半闇狩人が、それこそ子牛ほどもある大鼠の死骸をみて、思うところあるような表情を浮かべた。

「お師匠様、中を調べてもいいですか？」

「うん?じゃあ、お願いするでしょうか」

半闇狩人は、一言告げて師に了承を得たあと、食い荒らされた大鼠の腹を手にした小

刀で素早く割り広げ、臓腑の中身を確認する。そして、猟師らしく手慣れた様子で腑分けして、犠牲者の遺留物がなか確認する半闇狩人の手際に感心しつつも、退役軍人は油断なく周囲を警戒しながら尋ねた。

「確かに、これだけ大きいのは珍しいけれど、何か気になることがあったのかい？」

「昔、父と狩りをしていた時、仕留めた獣から人の骨や遺品が出てきたことが何度かありました。さつき聞いた声もそうだけど……念のためにと思っただんです」

「なるほど、確かに、言われてみればそうだね」

退役軍人は、猟師としての経験に基づく半闇狩人の着眼点にうなずきながら、周囲の地形や状況を記憶し、一息ついたらここも書き加えねば、と呟く。

「よし、それじゃあ、先に進もうか。いずれにしても、君の聞いた声というのが気になるからね」

「はい、お師匠様……あつ」

「どうかしたかい？」

「ごめんなさい……見落としがありました、これです」

「ふうむ……」

半闇狩人が差し出した、大鼠の歯の間に挟まっていた紐につながっていた、黒い板切れのような何か。歯形で多少削れていたが、それは紛れもなく黒曜の冒険者認識票。

「これはこれは……なんと気の毒な……」

「お師匠様、やはり、この先に何かあるかもしれませんね……」

「そうだね、でも、残念だけど、今日はここまでだよ」

「……えっ？」

どうして、と尋ねる前に、半闇狩人の耳は、その理由を察知した。

「お……お師匠様、すごい数です……!」

「やはり、今の騒ぎを聞きつけられたようだね。私たちにしろ、そこに転がる死骸にしろ、ここじゃあまたとない御馳走だ。さあ、帰るよ!」

「は、はい!」

暗闇の奥から、山津波のように押し寄せてくる足音と不快な鳴き声。退役軍人と半闇狩人は、弾かれたように元来た道を駆け出した。

「いやあ、今日は大活躍だったじゃないか。おかげで本当に助かったよ」

町外れの小川の洗い場で、装備や衣服を洗濯しながら、退役軍人は上機嫌な声で隣の半闇狩人に話しかける。

「あ、ありがとうございます、でも……」

それでも、自分が足手まといにならなければ、師ならば、あの大群を蹴散らして先に

進むことができたのではないだろうか。

「夢を壊して申し訳ないけれどね、私だってあんな大群の相手は荷が重いよ。というより、今までだって、ああいった手合いからは逃げるのが一番だったからね」

「そう……ですか」

もしかして、師は人の心が読めるのだろうか。半闇狩人は、自分が後ろ向きな考え方をするたびに、師にたしなめられつつも、励まされていることを思い出す。自分なりに、もつと自信をもつて、前向きになろうと努力しているつもりなのに、やはり、うまくいつているとは言い難い。

「一番大事なのはね、逃げ道を確保しておくことなんだよ。強い軍隊というのはね、前に進むだけじゃなくて、後ろに進むのも上手いんだ」

師の言葉に、半闇狩人は目を瞬かせる。それは、自分が小さい頃、父から聞かされた戦の話や街角で唄う吟遊詩人の英雄譚からは、決して出てこなかった話。

「木登りと一緒だよ、登り方だけ上手でも、降り方を知らないで大変なことになるからねえ。子猫ちゃんが高い所から降りられず、困って泣いているのを見たことないかい？ あれは、降り方を知らなかったから起こった悲劇なんだよ」

退役軍人は、洗い終えた装備やマントに顔を近づけて臭いを確かめると、ある程度妥協したような表情を浮かべる。それにしても、紅玉色の色眼鏡だけをかけて、いつもの

黒塗りのサレットと面頬がない師は、当然のことだが印象が違って見える。

別に、秘密にして格好をつけようとしているわけじゃあないからねえ。と、照れるように笑っていた師の顔は、かつて受けたという火傷の痕が痛ましくもあり、師の顔に消えない傷を与えた相手に、ふつふつと怒りの情動が沸き起こる。

しかし、それはきつと、師は望まぬこと。と、どうにか気持ちの整理をつけながら、もう一度師の横顔を見やる。その引き締まった首筋や顎周りは、相当鍛えられたのだろうと想像できる。そして、若くはないが老けてもいない。要するに、年齢が読めない。

(お父さんと、いっしょくらくらいなのかな……)

そんなことを考えながら、半闇狩人は、純度の高い酒精を含ませた布切れで装備を拭っている退役軍人の横顔を見つめていた、とその時、

「君も、これで装備を拭いておきなさい。弓や革の防具は水で洗えないからね、他の装備も、まだ黴菌が残っているから念を入れて消毒しておきなさい」

「は、はい、お父さん」

そう返事をした瞬間、半闇狩人の顔は炎が噴き上がったかのように熱くなる。やっってしまった。

思わず息をのみ、半闇狩人は両手で顔を覆い、背中を丸くしてその場にしゃがみこむ。そんな、彼女の熱く火照る小さな三角形の耳に、師の楽しそうな笑い声が聞こえてきた。

「いやいや、そう言つて貰えると嬉しいよ。私も、君のお父上に恥じないよう頑張らないといけないねえ」

「あ、あの……その、ごめんなさい、お師匠様……」

「謝ることなんてないよ、私だつて子供のころ、たまに先生をお母さんと呼んでしまったことがあるからねえ。とても優しく聡明な先生だったよ、懐かしいなあ」

昔を懐かしむ師の言葉に、半闇狩人は、師の子供時代を想像する。どんな子だったのだろう、やつぱり、いつも明るく笑っている、楽しい男の子だったんだろうか。

「さて、それじゃ、洗濯物を干したら報告に行こうか。あの認識票はちゃんと持っているね？」

「はい、お師匠様」

君が見つけたものは、君が責任をもつて保管するように。という師の言葉を忠実に守り、帯革にくくりつけた雑囊の中に収めておいた認識票をもう一度確認し、半闇狩人は気を引き締めるようにうなずき返した。

ギルドに戻り、今回の結果を報告し終えたふたりは、酒場の片隅に席を構えると、軽食と飲み物を交えながら、今日あったことのおさらいをする。しかし、その表情はどうにも晴れない。

「まさか、昇級したばかりの冒険者だったとはねえ……しかも、白磁等級の冒険者ふたりを引率していたとは」

「だとすると、残りも……」

「とても残念だけど、可能性はあるね」

はつきりとは言わないものの、師の言葉に半闇狩人は微かに表情を曇らせる。あの認識票の持ち主の一派が、あれだけの大群に遭遇していたとしたら、生還はまず絶望的だろう。

たかが大鼠、たかが黒蟲というが、それが山津波のような勢いで襲い掛かって来たらどうなるか、それは、自分自身が身をもって思い知らされている。

「これは、少し本腰を入れて作戦を練らないといけないようだねえ」

ため息交じりに呟いた退役軍人は、腕組みをしながら、紅眼鏡の奥で何かを組み立てるように思考を巡らせている。そして、半闇狩人も、思案する師の妨げにならないよう、極力物音を立てないように努めつつ、その言葉の続きを辛抱強く待つ。

そして、ややあつてから、退役軍人は腕組みを解くと、いつもの調子で半闇狩人に声をかけた。

「こうなると、ばあやのお知恵を拝借するしかないねえ」

「ばあや……ですか」

「うん、まずは試し、ちよつと買い物に行こうか」

「お買い物……ですか？」

「うん、ちよつと必要なものがあるからね。君も、何か欲しいものがあつたらいいなさい」

思いがけない師の言葉に、半闇狩人は慌てた様子で首を振る。

「あ、いえ！わ、わたしは大丈夫です！防具も買つてもらつたばかりだし……！」

「そうかい？ともあれ、まだ日も高い。散歩がてら、行つてみようじゃないか」

「は、はい、お師匠様！」

「そこをなんとかお願いできないだろうか、次の仕事に、どうしても必要なんだよ」

「あんたの言いたいことはわかるけどね、何度も言うように申し訳ないが、こつちも信用で取引をしているんだ。申し訳ないが、融通するわけにはいかないよ」

店の主人は、巨体を折り曲げながら粘り強く頼み込んでくる、この黒ずくめの大男と、その傍らに控える闇人の少女に視線を向けながら、胡散臭いものを見るような表情を浮かべる。

入店の際の礼儀に従い、兜は外し顔を見せてはいるものの、顔中に生々しい戦傷が刻まれている黒騎士。そして、それに忠実に付き従っているのは、闇人の狙撃弓兵か。

そんな彼らが所望してきたのは、よりにもよって黄燐。こんな辺境の地では希少な物資ということもあるが、それ以前に、猛烈な劇物でもあるそれを一斤ほど買いたいという。

無礼を承知で言えば、この二人組、噂や伝聞で伝え聞くような、祈らぬものに与する邪教の軍団員そのものにしか見えない。もつとも、人を見かけで判断するのは、長い商売歴において御法度ではあることはわかっているし、一応、冒険者であることは、認識票で確認できた。しかし、白磁等級などその辺にいる一山いくらの無頼の輩同然であり、担保なしで信用するにはあまりにも危険すぎる。

「だから、何度も言うようだけどね、白磁等級の冒険者には売れないんだ。どうしても、というなら、あんたたちの身元を保証してくれる人間を連れてくるんだね」

店主の無慈悲な正論が、退役軍人と半闇狩人に向けられる。こうなると、もう彼らにしてみれば、返す言葉がみつからない。

「……仕方ないね、ご主人、手間を取らせてしまって申し訳なかった。さあ、君、帰ろうか」

「……はい、お師匠様」

もはやこれ以上粘つても、状況は改善しないどころか、店主の疑念をより強くするだけ。退役軍人は、この場は諦めると、店主に礼儀正しく一礼してから、半闇狩人を促し

てその場を立ち去る。

こうして、退役軍人と半闇狩人のふたりは、街の薬屋や錬金術師を訪ねて回り続け、交渉に交渉を重ねた。しかし、日が暮れるまで歩き続けた彼らの努力は、現実の前に虚しく崩れ去ることとなった。

「やはり、簡単には手に入らないねえ……しかも、ものだけ見れば劇薬だし、白磁等級の冒険者には、そうそう売るわけにはいかないだろうねえ」

行く先々で、取り扱っていないと誤魔化されるのはまだいい方で、中には露骨に売買を断られたりもした。信用という白磁等級の限界と現実を前に、早々に計画が頓挫しそうな状況に、退役軍人は牛乳を満たしたジヨツキ片手に大きなため息をつく。

「申し訳ありません、お師匠様。もしかして、わたしが……」

闇人だから、そう言わんとした半闇狩人の言葉を、退役軍人は優しく遮る。

「なんでも自分のせいにするのはよくないよ？それを言ってしまうえば、私の顔なんて、醜いことこの上ない。槍使いの彼のような美丈夫なら、まだ望みもあつたかもしれないよ」

苦笑しつつも寂しそうにつぶやく師の様子に、半闇狩人は、どう言葉をかけていいのか、まったく見当もつかず唇をかみしめる。

師の素顔を醜いなど思ったことは一度もない。しかし、師という人間を知らない者から見れば、どのように見えるか。その程度もわからないほど、彼女は世間知らずではないつもりだったが、半端な慰めは却って師を侮辱するのではと思うと、それこそ良い言葉が探し当てられなかった。

「白板の誉れ無き身の哀しさよ、だねえ……」

そんな師を前に、半闇狩人は何か力になれないか、再び懸命に思考を巡らせる。しかし、自分の持つ限りの知識では、どれも代案になり得るか確信が持てない。いずれにせよ、罨や狩りに使ったことのある毒草を、必要な量を求めて野山を巡るなどは、あまりにも時間がかかり過ぎて現実的とは言えるものではない。

「なにつまんねえことで悩んでんだよ、アンタ」

「やあ、君か。おかえり、首尾よくいったみたいだね」

冒険から帰ってきたと思しき槍使いと魔女のふたりに、退役軍人は気持ちを切り替えるように明るく挨拶を返す。半闇狩人も、さんざん師にたしなめられてきたおかげで、内心はともかくとしても、礼儀正しく頭を下げた。

「んなことより、必要なモンが手に入らねえんだろ」

「え？ ああ、実はそうなんだよ。やはり、白磁等級では、使い道を説明しても信じてもらえなくてねえ」

含むような笑みを浮かべる魔女の言葉に、槍使いはことさら大きさに槍を担ぎなおしながら、素っ気ない言葉を返す。

「んな簡単なことに気づかねえから、いい歳こいて白磁なんだよ」

巡礼尼僧

ギルドの裏庭のその一角に、敷いた麻布の上に並べられ天日で干されている大量の白い団子。そして、その傍らに立つ、やり遂げたという様子の防毒面の大小二人組。その、鴉人間の親子のような姿は、傍目から見れば、相当怪しく異様な絵面。

「まずはこのくらいで試してみよう、しかし、こうも事がうまく運んだのも、彼のおかげだねえ」

退役軍人が作り上げたのは、槍使いの青年が入手してくれた黄燐を用い、雑穀の粉や干し雑魚を練り上げた一撃必殺の猫いらす。しかし、それは人の握り拳ほどの大ききがある。

「後は、誰かが触ったり鳥に持つていかれてしまわないよう、乾くまで見張つていようか。黄燐が入っているから素手で触るのは危ないし、鳥や野良猫が食べてしまったら、その死骸も危ないからね」

ギルドの受付嬢と相談し、今日一日は裏庭を借り切らせてもらえるよう頼み込んだ。もちろん、理由は口頭だけでなく、文書に起こして起案文の署名と共に提出もしてある。「一時はどうなることかと思っただけで、彼だけじゃなく、受付のお嬢さんにも感謝だ

よ。おかげで、準備の方も上手くできたしね」

前回のような大規模な群れに遭遇した時、ただ撤退するのではなく、置き土産を残してやろうという退役軍人の作戦。一度二度程度ではともかくも、地下水道に赴くたびに繰り返せば、そこに跋扈する群れに多少なりと痛痒を与えられるだろうという考え。

彼が幼少時、屋敷の女中長が鼠や害虫除けに作っていた毒餌を、記憶を頼りに再現したものの。しかし、大ききだけは、大鼠や黒蟲に合わせてそれなりの量にした。

「さて、それじゃあ一休みしよう。あと、念のため解毒剤も飲んでおこうか」

ここでまた貴重な水薬が出てきたことに、半闇狩人の目が戸惑うように泳ぐ。

「これは必要経費だよ、なにしろ劇薬を使ったんだ、万一のことがあつたら大変だからねえ。いいから、飲んでおきなさい」

「は、はい、お師匠様」

なにしろ、物が物だけに念を入れておくに越したことはない。ようやく息苦しい防毒面から解放された退役軍人と半闇狩人のふたりは、汗だくの顔を拭いながら水薬の小瓶をあおる。

「いやはや、今すぐ川にでも飛び込みたい気分だよ」

「わたしもです、お師匠様」

そう答えて、自分が師とふたりで川で水遊びをしている光景を思い描く。川で泳いだ

り、釣りをしたり、魚の串焼きをしたり、それから、それから――

とめどなく頭の中にあふれる楽しい光景に、思わず耳が躍る。そして我に返った半闇狩人は、真つ赤になった顔と自分の妄想を振り払うように激しく顔を左右に振る。

「大丈夫かい？もう作業は終わったから、涼しい所で休むといいよ」

「は、はいっ！」

やや声を裏返らせながら応えた半闇狩人は、そそくさと木陰に逃げるように座り込むと、ちよんと膝を抱える。

「いやいや、こんな暑い中、一緒に頑張ってもらってありがとう。本当に助かったよ」

感謝の言葉を述べながら、同じ木陰に腰を下ろした師の気配に、半闇狩人は再び耳まで赤くなる。これじゃ、木陰に隠れた意味がない。でも、ここしか日陰がないからしよ
うがないけれど。

「まあ、今日一日はこれでおしまいのようなものだし、君が聞いた声というのが気になるけれど、準備が整わないうちは、闇雲に突っ込んで行っても自殺行為だからねえ」

しかし、そんな彼女の感情も、師の言葉で現実を引き戻される。そうだった、浮かれている場合じゃ、なかったのに。

「はい……」

「本当に申し訳ないとは思うけど、祈るしかできないなんてねえ」

まったく、人ひとりの力なんて、無力なものだよ。退役軍人は、そんな呟きを飲み込む。見栄を張るつもりはないが、こんな自分を師匠と呼び、慕ってくれる少女の前で、あまり愚痴をもらすような所は見せたくはない。

「ああ、そうだ。危険な作業は終わったからと、受付のお嬢さんに伝えてきてくれないかい。ついでに、手を洗ってから、追加の飲み水を買ってきてくれると助かるよ」

「わかりました、お師匠様」

渡りに舟とばかりに立ち上がり、師からいくらかの銅貨を預かった後、小走りでギルドの庁舎へ入っていった。それから程なくして、大きな水差しを抱えて戻ってきた半闇狩人は、ひとりの女性を伴っていた。

「おや、そちらの方は？」

「はい、お師匠様にご用件があると言ってるのですが……」

「私に？」

兜や面頬を着装し直し、すでにいつもの格好に戻っていた退役軍人は、来客の女性に向かつて丁寧に一礼する。そして、照りつけるような日差しの下にもかかわらず、黒ずくめの鎧兜とその下に光る紅い眼鏡という姿を見て、女性は一瞬ぎよつとした表情を浮かべるが、気を取り直すような合掌と共に一礼する。

「お忙しい所、大変恐れ入ります。是非ともお話をさせて頂ければと思います、お伺いいたし

ました」

その身なりと立ち居振る舞いから見て、巡礼の神官か僧侶か。退役軍人は居住まいを正すと、その思いがけない来客を出迎えた。

「これはこれは、でも、せつかくご足労いただきまして申し訳ないけれど、ご覧の通り、訳あつてここを離れるわけにはいかないものだからね。それでもよろしいかな?」

「はい、お仕事の準備をされているとお聞きしております。こちらが無理を言つてお時間をいただいているのですから、どうかお気になさらないでくださいませ」

巡礼尼僧は、礼儀正しく退役軍人と半闇狩人に一礼すると、若草のような緑色の瞳に柔らかな笑みを浮かべる。

「それじゃあ、立ち話もなんだから、涼しい所で座つて話そうじゃないか」

「はい、よろしくお願いいたします」

退役軍人にすすめられ、尼僧は木陰の芝の上へ落ち着いた仕草で腰を下ろす。そして、向かい合うように、退役軍人と半闇狩人もそれぞれ腰を下ろした。そして、改めてお互いの紹介を済ませた後、退役軍人から話を切り出した。

「それで? ご用件を聞かせてもらつても、よろしいかな?」

「はい、実は、この街の噂で地下下水道の探索が続けられているという、冒険者様のお話をお伺いしました。こちらのギルドにいらつしやるこのことで、是非ともお会いした上

で、ご相談をさせていただけなかいと思ひ、お伺ひした次第でございます」

「うん、確かに私と彼女のふたりで、地下下水道の掃除の依頼を受けていたのは確かだけどね。ただ、こう言つては何だけど、特にお話できるようなことがあるとも思えないんだけどねえ」

「そのことなのですが．．．いえ、単刀直入に申し上げます。私めを、黒騎士様の一党に加えていただけないでしょうか」

「思ひもよらない申し出に戸惑いながらも、退役軍人は巡礼尼僧に水を勧めながら聞き返した。

「貴女を？．．．しかし、理由を聞いてもいいかな。見ての通り、私たちふたりは白磁等級の駆け出しなんだよ。そして、見たところ貴女は銅等級。私たちが貴女のご期待に沿えるかどうかは、なんとも言えないところだというのが、正直なところだよ」

「おつしやりたいことは、ご理解いたします、ですが、お二方ほど、地下下水道に詳しい一党はいないと、ギルドの方よりお聞き及びした次第なのでございます」

「うーん．．．まあ、詳しいと言えなくもないけれど．．．いや、それはいいとして、立ち入ったことを聞くようで失礼だけど、貴女にも、何か事情がおりるのうだね？」

「はい．．．．．実は、冒険者をしていた私めの弟が、この町の地下下水道で行方が分

からなくなっているのです。最後の便りから、もう、ふた月ほどになりましたよか……」

巡礼尼僧の言葉に、半闇狩人は小さく息をのみ、退役軍人は、その言葉の先を待つように静かにその先を待つ。

「もちろん、もうこの世の者でなくなっているであろうことは覚悟いたしております。ですが、せめて骨のひとかけらだけでも見つけて、故郷の土に帰してやりたいと思っております。」

しかし、銅等級を拝命しているとはいえ、そのほとんどは僧侶としての務めによるもの。見ての通り、かような女の細腕では出来ることにも限りがございます。ですから、お二方のお噂を耳にしたとき、まことに勝手ながら、お力添えをたまわれないかと考えた次第なのでございます」

切々と訴える巡礼尼僧の言葉に、退役軍人は、ふうむ、と小さく息をつきながら、腕組みつつ考えをまとめ始める。銅等級といえは、在野の冒険者としてはそれなりに完成された技量を持っていると聞く。そんな彼女が、何ゆえ自分達のような、一山いくらの白磁等級に声などかけたのか。

ただ、案内役が欲しいというだけの話なら、それはそれで事は単純だから特に問題はない。ともあれ、荒事の実績だけではなく人格的面や社会に対する貢献も合わせて評

価、審査された上での身分であるのだから、信用はしていいのだろう。

そも、彼女は、僧侶という神職を生業にしているわけであり、気を揉み過ぎだと自分を納得させる。いやはや、何事も疑ってかかる悪い癖は、軍を辞めても治らないねえ。そんな自分に苦笑しながら、退役軍人は巡礼尼僧の話に耳を傾ける。

「なにぶん、急なお話です。無理にお願いできる立場でないのは、重々承知しております。ですので、依頼の指名と言う形でお願いさせて頂ければと……」

「うーん……そうだねえ、事情はだいたい理解したよ」

退役軍人は、腕組みをとくと、紅眼鏡の位置を整えながら答えた。

「とはいえ、私たちふたりは白磁等級、それよりはるかに等級の高い冒険者から依頼の指名を受けるというのも、あまりいい流れとは言えないと思うんだよ」

至極もつともな退役軍人の言葉に、巡礼尼僧は微かに目を伏せ、半闇狩人は何か言いたそうな表情を浮かべ、その耳が気遣わしげに揺れている。

「けれども、貴女は弟さんを探したい、私たちは地下を調べたい。行き先も目的も、ほぼ同じというわけだからね。そのことについては、特に問題はないと考えているよ」

そう言うと、退役軍人は傍らの半闇狩人に顔を向ける。そして、彼女も、師の意図を理解したようにうなずき返した。

「私たちがよければ、そのお話、お受けしようと思っただけだね。こちらとして

も、銅等級の方に仲間になってもらえるのは、正直心強いからねえ」

「どうだろう、と振り返る退役軍人に、改めて了解の意思を示してうなずき返す半闇狩人の耳が、その真つ直ぐな意思を示すようにぴつと立ち上がる。

「ということだよ、それじゃあ君、是非ともお願いするよ」

「ああ………感謝いたします、黒騎士様………！」

「黒騎士なんて御大層なものじゃないんだけどねえ、私は………まあ、いいか」

感謝と歓喜の表情が入り混じる合掌を向けてくる巡礼尼僧を前に、退役軍人は再び腕を組みながら、困った様に首をかしげて見せた。

一度支度を整えるため宿坊に戻るといふ巡礼尼僧を見送った後、退役軍人と半闇狩人は裏庭の片づけを済ませると、ギルドの酒場で一日の疲れを癒さんと、それぞれがひいきの飲み物を注いだジョッキ片手にくつろいでいた。

「でも、良かったですね、お師匠様。銅等級の冒険者様が仲間になってくれれば、怖いものなしです、とても心強いです」

「確かにそうだねえ、ただ、彼女の事情を考えると、そうそう浮かれてもいられないんだけどねえ」

地下下水道で行方不明になった弟を探したい、その生死に拘わらず。退役軍人は、冒

険者となつてからの数か月、自分が手ずから骨を拾い、地上に連れ帰つた冒険者だつたものを思い出し、小さくため息をついた。

「そう．．．．．ですよね、でも、わたしもつとお師匠様のお役に立てるよう、頑張りますから！」

「君は、十分私を助けてくれているよ。だから、慌てることはないさ。スープだつて、とろ火で時間をかけて煮込んだ方が美味しいんだからね」

いつもの、いまひとつわかりづらい例え話を出した退役軍人は、ジヨツキになみなみ注いだ牛乳を口にしながら、この見た目によらず健気な半闇人の少女を見る。

気性も言葉遣いも至つて純朴そのもの。口数自体はそう多くはないが、それでも一緒にいて落ち着くし、なによりも心が安らぐ。それに、衣食住がある程度確保された今、彼女の健康状態はだいぶ改善に向かつていると実感できる。

褐色の肌は磨き上げた黒檀のようだし、金色の瞳は角度によつては黄玉のように多彩な輝きを放つ。銀色の髪も、最近は本来の艶を取り戻してきたのか、おろしたての銀糸のように深く艶やかに光る。三角に尖つた耳も、主の感情のまま豊かに動くさまは、なかなか愛嬌があつて微笑ましい。

確かに、初めて会つた時は、生傷だらけの上、垢や埃ですすけきつた肌や髪はすっかり脂が抜け落ちてしまつたような有様だったが、これが彼女の本来の姿なのだろう。

しかし、祈らぬものの側とされる閻人の血を引くが故に、これまでいろいろと辛い思いをしてきたであろうことは想像がついたし、それは彼女が話してくれたことから十分に理解しているつもりだった。

だからと言つて、ことさらに同情や哀れみを向ける理由もない。これまでの人生の中で、様々な理由で孤児になった子供たちは幾らでも見てきた。それらに全てに対して手を差し伸べ続けていれば、いずれ自分の腕がもげ落ちるだろう。

不思議なものだねえ

退役軍人は、今まで自分のしてきたことを思い返ししながら、自嘲するようなほろ苦い笑いを漏らす。

いままで散々奪ってきたじゃないか

なら、その逆をしたっていいはずだ。それでも、いつか自分は、間違いなく過去の報いを受ける日がくるだろう。ならば、せめてその時が来るまでは、自分が為すべきだと思ふ心に従つて生きてみたい。そう思いながら、退役軍人は様々な思いと一緒にジョッキの牛乳を飲みこんだ。

「黒騎士様、狩人様、遅くなつてしまい申し訳ございません」

酒場の喧騒の中でも、その涼やかさを失わない声にふと振り返ると、宿坊から戻ってきた巡礼尼僧がテーブルの傍に立ち、こちらに丁寧な一札を向けていた。

「やあ、君か！よく来てくれたね、待っていたよ」

防具を兼ねた、簡素かつ厚めの法衣を羽織り、自分の身の丈ほどもある錫杖を手にしている姿は、昼間に会った時の線の細さは薄れ、世界中にある聖地を訪ね旅する巡礼僧にふさわしいたたずまいを漂わせる。

「さすが、熟練者の風格だね。その様子だと、いろいろな所を旅してきたようだね」

「はい、ですが、修行中の身ゆえ未だ道半ば。まだ、未熟者もいいところでございます」
「それは私達ふたりも同じだよ、尼僧殿には、これから先達として色々教えてもらえると嬉しいねえ」

「もちろん、私めでお役に立てることでしたら、なんなりと」

「ともあれ、立ち話もなんだから、みんながそろったところで食事にしようじゃないか」
「はい、では、ご一緒させていただきます」

巡礼尼僧は、退役軍人の言葉にうなずき、半闇狩人の隣に静かに腰を下ろす。そして、頭にかけて頭巾を下ろした時、ふわりと明るい栗色の髪が零れ落ちる。特に香油で装っているわけでもないが、それでもごく自然に漂う柔らかい香りに、半闇狩人は思わず心を引き寄せられるように、そのやや波を打つような柔らかかで豊かな髪を見つめる。

故郷の山村、秋を迎えた穀物畑を、色づき始めた山々を、狩りの帰り道に父と共に眺めた光景が臉の裏に蘇る。そんな秋の夕暮れのように、懐かしい、そしてどこか寂しげ

な空気の匂い。

半闇狩人は、思わず、ほうとため息をつきながら、隣に腰掛ける巡礼尼僧の姿に見惚れていたが、そんな彼女に気付いた巡礼尼僧に穏やかな表情で微笑まれ、ばつが悪そうに耳と顔を伏せる。

「もし」

「あ、は……はい」

無作法を咎められる、そう思いさらにうつむく半闇狩人の耳に、鈴が転がるような優しい声が届く。

「狩人様、これから共に行くもの同士、どうかよろしくお願いいたしますね」

「わ、わたしこそ……よろしく、お願いします……」

他人からの友好的な対応に未だ慣れていない半闇狩人は、思いがけない言葉に、やや緊張気味に肩をすくめて視線を泳がせるが、それでもきちんと向き直って丁寧な一礼を返し、巡礼尼僧を微笑ませた。

「お昼にお会いした時もそうでしたが、まことに良き眼をお持ちのお弟子様でございますね」

「そうだろう、そうだろうか？ 私の自慢の仲間だよ」

「そうでございますよね、彼女の眼は、実に曇りひとつなき眼をしておられます」

巡礼尼僧の穏やかな言葉に、人から褒められることに慣れていない半闇狩人は、再びもじもじと肩をすくめる。そんな彼女の様子に、退役軍人は紅眼鏡の奥で目を細める。「さて、一通り顔合わせも済んだところだしね、ああ、君、君、すまないけど注文を頼みたいのだけどね」

「あいあい、どうぞー!」

臨時とは言え、新たに巡礼尼僧が一党に加わり、無事顔合わせも済んだことで、退役軍人は安堵したようにうなずきながら、獣人女給を呼び止めた。

「それで、私は思ったんだけれどね、この中で一番高い等級は貴女なのだから、頭目は貴女に引き受けてもらった方がいいのかなと思っっているのだけどね」

「望外のお言葉でございますが、私めは黒騎士様にお力添えを請う身でございます。ですから、頭目は黒騎士様のままでおられた方がよろしいかと存じあげます」

「そうかい?しかし、白磁等級では信用やらなにやら、いろいろと不便が多いものだからね。それに、よその目もあるわけだからねえ」

退役軍人の言葉に、巡礼尼僧は豆入りの麦粥を口に運ぶ手を止め、居住まいを正しながら答えた。

「それは、この際お気になさらずともよろしいかと存じます。信用ということであれば、

必要な時はいつでも私めにお申し付けくださいませ」

「いやいや、いくらなんでも、ちよつとそれはやりづらいよ」

巡礼尼僧の思いがけない提案に、退役軍人は慌てたように手を振るが、そんな彼を前に、巡礼尼僧は丁寧な合掌と共に応える。

「黒騎士様、今や私めも一党のひとりでございます。助け合い補い合うのは当然と思ひこそすれ、迷惑などは決して考えたりなどいたしません。それに、私めのような者でも、こうして銅等級を拝命出来ているのですから、黒騎士様もいずれば銅、いえ、銀等級をお授かりになる日も遠くはないかと存じあげます」

「どうだろう、そのあたりについては、少し見当がつかないけどねえ」

照れくさそうに謙遜する退役軍人に、巡礼尼僧は苦笑交じりにうなずき返す。立ち居振る舞いを見ればわかる、単に日が浅く、衆目の知らぬところであるだけで、その黒い鎧兜の下に隠されたものは。

「ですが、私めも、拙いなれど奇跡を授かった身でございます。荒事でお役に立てぬ以上、おふたりの手助けをすることが本分と考えておりますゆえ、この銅の板切れも含めて、うまく使っていただければと存じます」

「そうなのかい？ そう言われてしまうと恐縮してしまうねえ……ところで、その奇跡というのは、どういったことができるのかな？」

「なにぶん、神にお仕えする身ゆえ、荒事に向いたものはございませませんが、治癒や解毒などを、日に5度ほどでございましょうか」

「いやいや、それでも大したものだよ、君」

「お師匠様、その……奇跡というのは、どんなものなんですか？」

感心するようにうなずく退役軍人に、半闇狩人はその聞き慣れない言葉に首と耳を傾げる。

「うん、奇跡というのは、神職にある方が神様にその信心を認められて授かる力……というか、信仰の証、とでもいうのかなあ」

「魔法……とは違うんですか？」

「そうだねえ、魔法は自身の研鑽や、然るべき魔導具によって使えるようになるけれど、奇跡に関しては、信仰心と功德の積み重ねによるものだから、魔法とは違うものと言つていいんじゃないかな……と解釈しているんだけどね、どうかな」

「はい、黒騎士様のおっしゃる通りでございます」

「まだ見たことがなかったものなので、知りませんでした……」

きまり悪そうにうつむく半闇狩人に気付き、巡礼尼僧は穏やかな笑みを向ける。

「それについては、見ずに済めばそれに越したことはありませんよ、狩人様。誰かが傷ついたり、病に倒れたりしているということでもありませんからね」

「そ、そう……ですよね……」

巡礼尼僧の言葉に、半闇狩人は興味本位で不用意なことを言ってしまったかと、さらに表情を曇らせる。そんな彼女の様子を前にして、巡礼尼僧は、この純朴な少女を励ますように柔和な笑顔と言葉をかけた。

「狩人様、未だ見ぬものに対する興味を持つことは、とても大切な心掛けでございますよ。それが、学びというものなのですから。ですから、なんでもお尋ねくださいませ。私めの知る限りではございますが、狩人様の学びのお役に立てれば幸いですでございます」

ふわりと包み込まれるような優しく温かい言葉に、半闇狩人の表情が、ぼわりと明るくなる。

「確かに、怪我や病に苛まれること、真に遺憾の極みにございます。ですが、奇跡とは、その苦しみを救い和らげるためのものでもございます。ですから、どうか頼りにしていただければ幸いですよ、狩人様」

「は……はい！」

まだぎこちないけれど、こんなものかな。

退役軍人は、もともと少ない口数がさらに目減りする半闇狩人の様子に、小さく息をつく。その出自ゆえ、あまり人と関わることなく生きてきたことは、これまで彼女と接

してきて十分察しているつもりではある。そして、新たに迎えた仲間との距離感を測り兼ねているようにも見える。

話の行きがかり上、臨時とは言え、巡礼尼僧を一党に迎えることになったが、半闇狩人の意見を十分に聞いたとは言いがたい。急な話の動きは、彼女にしてもさぞかし驚いたことだろう。さりとして、巡礼尼僧の事情を聞いた上で、それを無碍にすることなどできようはずもなく。

半闇狩人自身の猟師としての腕前や技術は申し分なし、身体能力にしても、半闇人とはいえそれでも只人にくらべれば十分敏捷かつ健脚であるし、暗闇をものともしない視力はこの上なく頼もしい。そして、どんな雑用であつても骨惜しみをせず取り組む姿は、村でも相当の働き者であつたことの証左。しかし、その容姿や能力はともかく、その人となりは純朴な村娘そのものと言つてもいい。

ついこの間まで、山村の片隅に居を構え、野山を駆け巡り狩猟を生業としていた彼女。父親が健在であつた頃は、まだ他の村人との関係性は、危ういながらも均衡を保つてたという。

しかし、父親が亡くなり、彼女を守れる存在がいなくなつてしまつたことで、さらに孤立を深め村を出ていかざるを得ない状況を生み出してしまつた。

都のように、ありとあらゆる種族が生活している場所ならともかく、とかく迷信深い

山奥の村では、もともと祈らぬものの眷族とされている闇人に対して、本能的な忌避感があるのはやむを得ないにしても。

理不尽な扱いを受けた挙句に、身一つで村を出て行けと言われれば、こうもなろう。

他人に対する不信任感。あまりに低すぎる自己評価。これについては、もはや想像の必要すらない。しかし、地下下水道で消息不明となっている肉親を捜しているという、巡礼尼僧の境遇について何かしら思うところが見られること、そして、彼女に対して心を開きつつある様子が見受けられることが、安心材料といえるべきか。

「ところで、黒騎士様、失礼ではございますが、いくつかお伺いしてもよろしいでしょうか？」

「え？ うん、いいとも。なんでも聞いてくれたまえよ」

「その……何故に、お食事中でも、そのように鎧兜をお召しになられているのでしょうか？」

他愛もない、と言ってしまえばそれまでだが、以前、半闇狩人にも尋ねられた事を聞かれ、退役軍人は、やはりあの時と同じように、自信満々で答えた。

「だって、この方が冒険者らしくていいじゃないか」

「そうなのですか……？」

黒ずくめの厳つい風体からは考えもつかない、子供じみた答えに、巡礼尼僧は戸惑い

の表情を浮かべながら、つい周囲を見渡しつしまう。

確かに、革鎧、鎖帷子、板金鎧に板冊鎧等、冒険者たちがめいめいの装備を着装したままで飲食している酒場の光景は、まあ、当たり前ともいえる風景だったが、さすがに、鉄兜と面頬で顔を覆ったままで食事をしている冒険者は、今のところさすがに見当たらない。

いや、居るにはいた。巡礼尼僧の記憶に浮かんだ、とある冒険者の姿。しかし、彼のその一党は、依頼をこなしに出かけているのか、今はその姿は見当たらない。

「その……申し上げにくいのですが、ご不便ではございませんか？」

「そりゃあ食べにくいよ？でも、それが楽しいんじゃないか」

「あ……そ、そうでございましたか」

「そうとも、なにしろここでは、行儀が悪いからと叱られることはないからねえ」

（いえ、流石に場所をわきまえていただく必要はございますが）

そんな言葉を飲み下して、巡礼尼僧は小さく苦笑する。そも、心底楽しそうに答える退役軍人の言葉に、一切の裏表は感じられない。それに、そういった遊び心は嫌いだはない。

「とまあ、そう言えれば格好いいかとも思っただけだねえ」

しかし、不意に影を落とすような退役軍人の言葉に、巡礼尼僧だけでなく、半闇狩人

の食事の手が止まった。

「正直言うかね、怖いんだよ」

「お、お師匠様……?」

「仲間に隠し事をするのは良くないからねえ、まあ、いい機会でもあるし、年寄りの繰り言と思つて聞いてもらつてかまわないよ」

退役軍人は、ジョッキの牛乳を一口飲んでから、軽く息を吐く。

「私が今まででかしてきたことを思うかね、軍人を辞めた今でも、鎧兜を脱いで中身を晒すのが怖いのだ。まあ、自業自得、と言つてしまえばそれまでなんだけどねえ」

怖い。

おおよそ、この男には似つかわしくない言葉に、半闇狩人と巡礼尼僧はしばし言葉を失う。しかし、軍を辞したとはいえ、見えない不安に駆られる彼の言葉は理解できなくもない。明日をも知れぬ状況で任期を勤め上げ、望み通り退役したにもかかわらず、無条件の平穩に心を切り替えきれず、その葛藤に悩む者はごまんという。

価値観の歯車が狂い、平凡な市井の生活に疎外感を抱く者。過去の所業と復讐者の影に怯える者。闘争の世界に心を置いてきてしまった者。馬車置場の下男の仕事すら得られず困窮にあえぐ者。そんな、心に影や闇を抱えた者が、傭兵や冒険者となつて、再び修羅の世界に還っていく。

では、彼は？

「お、お師匠様……！」

「ん、なんだい？」

意を決したように声を上げた半闇狩人に、退役軍人は穏やかに応える。

「お師匠様を狙う奴がいても、わたしが命にかえても近づけさせません、絶対に！」

半闇狩人の脳裏に、洗濯の時に見た師匠の顔の傷が思い浮かぶ。そして、その傷を刻んだものに対する、激しい怒りも。そんな、幼いが、純真な覚悟を秘めた言葉。退役軍人は、紅眼鏡の奥の目を優しく細めながら、穏やかにうなづく。

「ありがとう。でも、私の背中は、とつくに君に預けているんだよ。だけど、そう言ってもらえると、本当に嬉しいよ」

「は……はい！」

思いがけない退役軍人の言葉に、半闇狩人は赤みがさした三角形の耳を揺らしながら、先ほどの気迫はなりをひそめ、もじもじとうつぶむいて顔を隠す。

「でもね、私は君の命を対価にしてまで生き延びるつもりはないよ。私だって、君や尼僧殿に何かあれば、いつだってこの命を張るつもりだからね」

大きな体を揺すりながら明るく笑う退役軍人と、恋する村娘の如く純真な半闇狩人のふたりを前に、巡礼尼僧は、実直で、暖かな血の通った信頼で結ばれた彼らに、慈愛に

満ちた瞳を向ける。

「そうでございますね、人の生き様はそれこそ千差万別、容易く整理できないからこそ、補い合つて積み重ねていくものなのでございましょう。だからこそ、今生を生きる意味であるのかと存じます」

「いやあ、尼僧殿にそう言つてもらえると有り難いねえ。まあ、そういうわけだから、これからみんなと一緒に頑張つていけたらと、そう思っているんだよ」

退役軍人の言葉に、巡礼尼僧は彼女の神に捧げる合掌を組み、祈念するように優しく微笑んだ。

「感謝を、黒騎士様、狩人様。此度の良き出会い、私めにとつても、至上の喜びでござい
ます」

地下に潜むもの

「ですが、これは少しおかしいと思います」

始業前のカウンターの奥で、受付嬢は先輩職員に納得しかねるような表情と言葉を向ける。ここ最近では鳴りを潜めていた意見の衝突、とでも言うのだろうか。そして、その横では、同僚の監督官が、久しぶりに始まった、といった表情で推移を見守っている。

「貴女の言いたいこともわかるけどね、経験の足りない新人冒険者が未帰還になるのはそう珍しいことじゃないわ、少なくとも、世間的にはね」

彼女とて、後輩の言いたいことはわかる。初心者向けであるはずの依頼が、ここ最近では初心者殺しになりかねない勢いで依頼未達成の件数が増えている。大怪我をして帰ってきたというのは、まだいい方。音信不通になっているのは、途中で諦めて投げ出したか、それとも――。

前者であれば、それはそれでいい。一言、無理だ。と伝えてくれれば言うことはないが、命を懸けてやり遂げろ、なんてことはとてもじゃないけれど言えない。なにしろ、最近冒険者登録をした、あの黒ずくめの大男からは、

“こここの下水道には、沼竜でもいるのかい？”

と、冗談じみた苦言を呈される始末。いや、そう言われても仕方ない。実際、彼には地下下水道で命を落とした冒険者達の遺骸を、一体どのくらい運び上げてもらったのか。

「未帰還者の搜索と、大規模な調査及び討伐。確かに、そういう依頼内容を起案した前例はあるわ。でも、そういつたのは大体、翠玉や紅玉階級の冒険者に未帰還事案が続いた場合よ。白磁階級に未帰還が続発したとしても、それは、資質の問題と言われてお終いね」

「それは、そう——ですけど」

先輩職員の言うことはわかる、事実、以前にも似たような問題で意見を衝突させたことがある。

「ゴブリン禍は、状況次第によつては想定される被害が無視できない場合もある。でも、それよりさらに難易度が低いとされている下水道掃除で、どれだけ上を納得させられる根拠があるのか、それが示せない以上はどうにもならないわ」

正論、まさに、正論。地下下水道で遭遇する怪物と言えば、大鼠や黒蟲が相場、そして、限度。そして、その対処に失敗するという事は、害獣に毛が生えた程度の相手に不覚を取る程度の技量と判断力しか持っていなかったのだ。と、言われてしまえば、もうそれ以上の議論の余地は無くなる。

しかし、それでも。

「自分の足元を常に知っておかなければならない、日の差さぬ場所は祈らぬものの絶好の隠れ家、故にいつ何時その足元を掬われるかわからない」

受付嬢の記憶の中に、いつかの退役軍人の言葉が浮かび上がり、そしてそれは、なかなか消えてくれない。それに、最近、町の中で流れ始めた噂。地下下水道で、何か起こり始めているのではないか。そして、いつか大鼠や黒蟲が町に溢れ出すのではないか。

今は、そんな冗談交じりの与太話で済んでいる。しかし、いつそれが、深刻さを増していくかわからない。そして、そう言った話は、往々にして益体もない尾ひれがついて異形化する。だから、そうなる前に手を打ちたい。だが、それには上を納得させる根拠が必要。

「冒険者ギルドは、慈善事業でも恤救事業でもないわ。その本分は、一歩間違えれば、ならず者や風来坊になりかねない荒くれもの達を取りまとめ、最低限の社会的地位を保証すること。彼らの身の安全や救済まで請け負う必要はないし、そもそも業務の管轄外よ」

いつになく辛辣な先輩職員の言葉に、受付嬢は、小さく唇をかむ。そんなことはわかっていて、わかっているけれど、でも——
「そんなことより、先生が来たみたいよ」

「えっ?」

「相変わらず、あの人が歩いてくると、軍楽隊の演奏が聞こえてきそうよね」

苦笑交じりの視線の先には、いつも通りに悠然と、貸し部屋のある二階から階段を下りてくる退役軍人の姿。黒塗りのサレットヘルムに面頬、黒染めの革で鋼板を覆ったブリガンダイン・アーマー。そして、肩から羽織った、裏地すらも漆黒に染めたマント。

そんな、つま先から頭の天辺まで黒で統一された中、ひときわ目立つ、紅い色眼鏡と白磁の認識票。そして、媚びず、奢らず、へつらわず、自然体にして威風堂々とした歩みを刻むその姿は、白磁等級のそれからはおよそかけ離れたもの。そして、

「やあ!おはよう、みんな!今日もいい天気だねえ」

気さくで、陽気ないつもの朝の挨拶。

「はい、おはようございます!今日はどうされますか?」

「え?ああ、いやいや、まだ始業前じゃないか。私は大丈夫だよ。みんなと朝ご飯を食べながら、また改めて来ることにするよ」

「はい!わかりました」

この、まるで気のいい親戚のおじさんと話しているような、肩肘張らないやりとりは、先ほどまでの鬱々とした気分が吹き消されていくよう。と、その時、先輩職員がそれとなく目配せをしていることに気付く。

「——あ」

彼女の意図に気付いた受付嬢は、酒場に向かおうとする退役軍人を呼び止めた。

「あ、あの！少しだけ、お時間、よろしいでしょうか？」

「うん？いいとも、何か連絡事項かな？」

「はい、その、実は——」

「ふうむ、なるほどねえ……」

カウンター横の待合席で、受付嬢が淹れてくれたお茶を味わいながら、退役軍人は彼女が持ちかけた相談の内容を吟味するように唸る。

「地下下水道における依頼未達成案件の増加、そしてその原因の調査。ふむふむ、なるほどねえ」

退役軍人は、受付嬢がもちかけた相談の内容に、興味深そうに何度もうなずく。一般的には、町機能の維持管理の範疇に入る地下下水道の掃除。額面通りの意味ではなく、地下下水道に棲息する大鼠や黒蟲が、町の中を徘徊し始める前に駆除する、衛生管理と害獣対策を兼ねたもの。

およそ、冒険とは程遠い仕事だけに、これらを引き受けるのは駆け出しの冒険者が、自身の手慣らしを兼ねて行う程度。もちろん、完璧に安全が保障されているわけではな

い。装備が足りない、技量が足りない、そして、構内で迷う。

それらの理由で、不幸にして命を落とした駆け出し冒険者の存在は珍しくはない。しかし、そのことを問題視する者も殆どいないと言っている。だがそれは、至極当然の話。その程度の仕事もこなせないようなら、それ以上の仕事など到底無理な話。

だから、下水道掃除で命を落としても、それはそもそも冒険者に向いていなかった、の一言で片づけられてお終いになる話。だが、にもかかわらず、一職員の案とは言え、当のギルド側からこのような形で問題提起されたことが、退役軍人の興味を引いた。

「実は、この件が町の住民の間でも、噂になり始めているんです」

「ふむ、満足に管理もできていない下水道から、いつか大鼠や黒蟲が町に溢れ出てくるんじゃないか、といったところかな」

退役軍人の言葉に、受付嬢は肯定するようにならず。

「それで、君は地下下水道の再調査の立案を考えている、と」

「はい、それでこの案件について、先生のご協力をお願いできないかと思っ

「そうだねえ、君の心配もよくわかるよ。報告にも上げた通り、地下下水道の状況は、どこか少し変だからねえ」

「はい……」

「現に、あの子ども、危うく食べられかけていたわけだしねえ。あの状況は、おそらく黒曜や鋼鉄階級でもちよつと危ないんじゃないかと思うよ」

退役軍人は、面頬の下から器用に茶をすすりながら、初めて半闇狩人と邂逅した時の状況を思い出しながら小さく唸る。そして、ふと思いついたように、受付嬢に先日の報告について尋ねる。

「先日、うちの子が提出した、黒曜階級の冒険者の遺品。あの件について、上の方はなんと?」

退役軍人の問いかけに、受付嬢は気まずそうな表情を浮かべながら答えた。

「はい……それが、一般的な事故、ということ、通常処理されました」

「そうだろうねえ、いや、それが当然の対応だと、私も思うよ」

退役軍人は、落胆も憤慨もせず、予想通りとでもいうかのように何度もうなずく。黒曜等級の冒険者と言えば、白磁に比べればある程度の経験と評価を認められた存在とは言え、それでも、全体的に見れば、決してその実力は高いものとはみなされていない。

つまり、地下下水道掃除程度の依頼でも、状況次第によつては失敗してもなんら不思議ではないと判断されても不自然な話ではない。

しかし、彼女はそうは思わなかった。蟻の小さな巣穴が、いつか堤防を崩壊させることがあるように。ほんの小さな違和感を見逃さず、あらゆる事態を想定して、その対策

について知恵を絞っている。

(なんとも頼もしい話じゃあないか、こんな田舎の片隅にいるのがもつたないくらいだよ)

退役軍人は、何故か嬉しそうにうなずきながら、ティーカップに残った茶を飲み干した。

「うん、君の考えはよくわかったよ。私でよければ、いつでも協力させてもらおうよ」

明朗な返答に、隣に座る退役軍人を思わず見上げた受付嬢の表情が明るくなる。

「私もこのギルド、そして君にもいろいろ助けられているからね。方針が固まったら、いつでも声をかけてくれたまえ。私も、実際に見てきたものの立場として、一党の意見をもう一度報告書に起こして意見具申を試してみるよ」

「えっ……その、本当によろしいんですか、先生？」

「もちろんだよ、むしろ、私からもお願いするよ」

「……と、言う訳なんだけれどね、どうだろう」

早朝の自主稽古から帰ってきた半闇狩人と、寺院の宿坊から登庁した巡礼尼僧がそろった朝食の席で、経緯を説明し終えた退役軍人は、なぜかどこか遠慮がちに彼女らにお伺いを立てる。

そして、そんな退役軍人を前に、半闇狩人と巡礼尼僧はその思いがけない話の内容と、なぜか低姿勢なその様子に思わずお互いの顔を見合わせる。

退役軍人にしても、一応この一党の頭目を任されているとはいえ、彼女たちに何の相談もなく話を進めてしまったことは、どうにも引け目を感じてしまう。なにしろ、ひとりで気ままに行動していた時ならともかく、今は一党の仲間たちがいるし責任もある。

この辺りは、若い頃、所帯を持った時の感じに似ているなどは思いつつも、きちんと彼女たちにも説明をしておかなければなるまい。そう思ったからこそ、退役軍人は、その一部始終を説明し、その上での彼女たちの考えや意見を求めることにしたわけなのだが。

「そうでございしましたか……ギルドの方で、そのような動きが……」

退役軍人の言葉を咀嚼するように、小さくうなずく巡礼尼僧。そんな彼女の様子に、半闇狩人は、彼女が次の言葉を発する前に声をあげた。

「わ……わたしは、お師匠様と一緒にいきますー!」

まるで、他の機先を制するかのような半闇狩人の言葉。そして、彼女は、隣に座る巡礼尼僧の反応をうかがうようにおずおずと視線をめぐらせる。そんな彼女の様子に、巡礼尼僧も穏やかに微笑みながら、退役軍人に自分の考えを伝える。

「もちろん、私めも狩人様と同じ意見でございます。それに、黒騎士様が地下水道の詳

細な調査をギルドから依頼されたこと、真に名誉なことと存じ上げますし、私めといたしましても、地下下水道の念入りの探索は、正に渡りに舟でございますから」

「そ、そうかい？それじゃふたりとも、この話、お受けして本当にいいんだね？」

ふたりの顔をかわるがわる覗き込みながら、なおも彼女たちの了解を確認しようとするその様子は、まるで、どうしても欲しい自分の趣味の物を購入するため、妻子に許しを請う父親のそれ。

「もちろんでございませよ、それよりも、そろそろ朝餉にいたしませんか？私めはともかく、狩人様がお辛そうでございませよ？」

「そ、そうだね！うん、そうしよう、そうしよう！」

そんな巡礼尼僧の言葉に励まされるように、退役軍人は手を振りながら、もはや顔馴染みとなった獣人女給を呼び止めた。

「これは……黒騎士様がお作りになられたのですか？」

朝食を取り終え、各々が落ち着いた頃合いを見計らい、作戦会議に必要なだから、見て欲しいものがある。と、いったん居室に戻った退役軍人が、両手で抱えるように慎重に運んできたもの。

それは、大きな板の上に作られた、地下下水道を模した情景模型。控えめに言っても、

力作といつて差し支えないそれを前に、巡礼尼僧は驚きの表情を浮かべ、半闇狩人もその精巧な造形に目を輝かせる。

「わあ……すごく細かいですね……あつ、ここつて、お師匠様に助けてもらった場所ですか?」

模型の一面を指さしながら尋ねてくる半闇狩人に、退役軍人は彼女の記憶力に内心で感心しつつうなずき返す。

「うん? ああ、そうだねえ。いやいや、よくわかったね」

「はい、この壁や水路の配置には覚えがあります。あ、大鼠や黒蟲もちゃんと作つてあるんですね」

「うんうん、そうだろう、そうだろう? ちょっとした自信作だよ」

彼女たちの、特に半闇狩人の悪くない反応に気を良くした退役軍人は、嬉しそうに声を弾ませながら、年甲斐もなくどこか得意げな様子で、地図と合わせた地下下水道の説明をし始めた。

退役軍人が、自分の足と目で確認し記録した地図を元に、切り出した木片とにかかわでこつこつと作り上げた地下下水道の模型。しかし、板全体に対して、建造物の形になっているのは、全体の半分弱。まだ彼自身が足を運んでいない場所は、板の目地のまま。

それでも、今まで娯楽らしい娯楽に触れる機会もなかった半闇狩人は、その精巧な模

型を前に、小さく尖った三角の耳を動かしながら食い入るように覗き込み、小さな木片で組み上げた石積み、塗り固めた泥で表した水路、そして、粘土で作られた大鼠や黒蟲たち地下の住人を楽しそうに眺めている。あの時は、本当に死を覚悟したが、こうして見る分には、楽しいし可愛らしいとさえ思えてしまう。

「地図だけじゃ味気ないし、構造を知っておいた方がいいだろう？ 私が軍にいた時は、斥候の報告を元に敵陣や合戦場の地形を模型にして、部隊の配置や進攻の段取りを確認したんだよ」

「なるほど、軍人様ならではの手法といったところでございますね」

巡礼尼僧は、退役軍人の説明と地下水道の模型を前に、緑色の目がすつと細くなる。「ですが、失礼を承知の上で申し上げれば、まだ未到達の場所が多いようでございますが」

「そうだねえ、というのも、ここから先は、大鼠や黒蟲の大群が凄くてね。それなりの備えをしなければ危険なんだ、それで私たちも何度追い返されたことか」

「なるほど、そうでございましたか……」

「この子にも話したことはあるんだけどね、まるで番犬のように、この先に行くことを阻んでいるようにも思えるんだよ。それにこの印、あまりいいものではないんだけど……ああ、そう言ったら失礼だね。ともあれ、ここは御遺体を見つけた場所なんだ」

さきほどまでの饒舌さが不意に途切れ、退役軍人は盤上に記した墓標めいた印の数々を指で示す。それも、発見した時の状態で色を変えている念の入りよう。

「尼僧殿が言った未到達の領域付近で、特に多くなっている。この先に、何かあるんじゃないか、それは間違いないと私は思うんだよ」

「そう……で、ごさいますね」

地図と模型を見比べながら、何かを思案するような表情で、巡礼尼僧はしばし押し黙る。退役軍人が、自らの目と足で確認し描き直した地図と言い、この精巧な模型と言い、なまなかな情熱では作れない。

本人は、趣味でやっているというが、ここまでのものを作り上げるといふ事自体、趣味の範疇を越えているように思える。この男は、何かを掴んでいるのではないだろうか、何かを追っているのではないだろうか。そんな思考が、彼女の中で小さく頭を持ち上げる。

「黒騎士様、これだけ精巧な地図や模型をご用意されているという事は、地下下水道の奥に、何かがあるとお考えなのでございませうか？」

「え？ ああ、いやいや、そう言う訳じゃあないよ。なにか冒険者らしいことをしようとして動かしていたら、これが出来上がっていたってわけさ。まあ、地図にしても模型にしても、昔取った杵柄のようなものだからね、こういうのは得意なのさ」

「なるほど、そういうことでございしたか」

「それにね」

退役軍人は、その紅眼鏡越しの視線を巡礼尼僧に向けながら、独り言めいた言葉を放つ。

「根拠のない憶測は、いらぬ混乱の元だからねえ。そういったものは、聞くだけ無駄どころか、有害だよ」

「え———？」

退役軍人の、静かだが鋭い言葉に、巡礼尼僧は不意を突かれたように言葉を詰まらせる。

「うん、まあ、そういうことだから。みんなと共有する情報は、裏の取れた精度の高いものだけにしたいんだよ。ともあれ、これで段取りの確認をしようじゃないか。いきなり突っ込んでいくよりも、多少は足しになるはずだからねえ」

そんな退役軍人の言葉で、一同はその場を仕切り直すように、今後の方針についての話し合いを始めていた。

「お疲れ様です、先生！」

「やあ、君か。今日も、無事に戻ってきてくれてなによりだよ」

一党の方針を文書にまとめ、意見具申と言う形で受付嬢に提出をし終えた退役軍人は、事務所の扉を出たその時、すっかり顔見知りになった若い戦士に声をかけられ、声を弾ませながら挨拶を返す。好青年、という呼び方が本当にしつくりくる彼とは、話していて本当に楽しい。

「いや、まあ、遺跡調査の簡単な依頼だったんで、それほどでもなかったんですよ」

「いやいや、どんな任務であれ、ちゃんと帰ってきて状況を報告する、これに勝る功績はないんだよ。それに、君の持ち帰った報告が次につながるんだからね。まあ、偉そうなことを言ってしまったけれど、年寄のお節介と思ってくれたまえよ、ハハハ」

元軍人らしい言葉に苦笑しながらも、若い戦士はその言葉にうなずいた。

「それより先生、お弟子さんの子に見せてもらいましたよ。あれ、地下下水道ですよね？ 本当に良くできてるって、話題になってますよ」

「え、そうかい？ いやあ、なんだか嬉しいねえ、ハハハハハ」

「ええ、それより先生、地下下水道の討伐に行かれるんですか？」

「うん？ いやいや、討伐と言うほど大袈裟なものじゃないだけねえ。最近、地下下水道の様子がおかしいということで、坑内の状況を確認する必要があるんじゃないかって話なんだよ」

「それって、最近、依頼未達成が増えてきているって話ですか？」

「そうなんだよ、そりゃあ、私のように冒険者の流儀に明るくない者が下手を踏んだところで、それは別に不思議な話じゃない。でも、前と違って、今は初心者向けの訓練所があるわけじゃないか。そこで、技術だけじゃなく冒険者として仕事をする上での基本的な知識も学べるわけだよな」

そう言いながら、退役軍人は、自分と同じ白磁等級の、しかし、はるかに年若い冒険者の初々しい一党に視線を向ける。彼らは、自分達が達成した仕事の余韻のまま、あれやこれやと言葉を交わしている。そんな彼らにしても、この若い戦士が上手く手綱を握ってくれたからこそ、今この瞬間があるのだろう。

「それだけ条件がそろっているのに、単に新規登録者の質の不作続きだと片付けてしまつては、せっかく興じた事業の否定になつてしまふ。となれば、実際に状況を確認した方がいいんじゃないかと、そういう流れなんだよ」

「なるほど……それで、先生に指名が入つたつてわけですか？」

「まあ、そんなところかな。私みたいな駆け出しが、なんとも恐れ多いことだとは思うけどねえ」

「だけど、先生。これって、昇格のチャンスじゃないかつて思うんですよ。ギルドから、直接相談を受けたわけなんでしょう？ それだけ、先生が評価され始めてることですよ」

「そうかい？いやはや、だとしたら、嬉しいんだけどねえ」

そんな若い戦士の望外の言葉に、退役軍人は率直な言葉と共に、大きな肩を揺らしながら楽しそうに笑った。

「しかし、夢中になって作ってみたのはいいんだけど、これは結構な量だねえ」

「お師匠様……これ、本当に全部持っていくんですか？」

「そうだねえ……一応、地図で確認した範囲にいる大鼠や黒蟲の数を見積もった上で試算した訳なんだけどねえ」

「ですが黒騎士様？これをおひとりで背負われるのは、いささかご無理が過ぎるのではないでしょうか」

毒団子を詰め込んだ大籠の前に、3人はそれぞれ微妙な表情を浮かべる。その大籠は小柄な半闇狩人が中に隠れて昼寝ができるほど大きく、そして、その縁からはみ出すほどに毒団子が詰め込まれている。

昨日、半闇狩人や巡礼尼僧と共に地図と模型を囲み、練りに練った段取り。侵入経路、毒餌の設置、そして退路。当然、突発事案に備え、何重もの案を議論し最適解ともいえる方針も共有した。

許された時間と装備資器材の範囲内で、可能な限りの方策を組み上げた。しかし、い

ざ出発という段になって、事は実に単純で、そして現実的な問題を提示して見せた。

余りにも過大に過ぎる資材、その運搬をどうするのか。半闇狩人にしても、巡礼尼僧にしても、退役軍人の力量は信頼しているとはいえ、さすがに懸念の表情を隠さない。「そうはいうけどねえ、君に余計な荷物を持たせては、弓や投石紐の扱いの邪魔になるし、尼僧殿だつてそうだよ。大丈夫、こう見えてもまだ馬力には自信があるんだ。任せてくれたまえよ」

いつもの調子でそういうと、まだ、なにか言いたげに呟く巡礼尼僧に笑顔を返し、退役軍人は大籠の背負い紐を体を通して立ち上がろうとしたその瞬間、想定外の重量と、電撃のような激痛が退役軍人の腰を打ち据えた。

「ぬあ、っ!?!」

魔女の一撃。

声にならない悲鳴を上げて、退役軍人は、糸の切れた操り人形のように膝から崩れ落ちる。しかし、最後の気力を振り絞り、大籠の中身を辺りにぶちまけることだけはどうか回避した。

「お師匠様っ!?!」

「だから申し上げましたのに!」

「あいたたた……め、面目ない……」

血相を変えて駆け寄った半闇狩人と巡礼尼僧によつて、背負い紐をほどかれた退役軍人は、ゆっくりと横向きの姿勢で寝かされる。しかし、上半身と下半身を切り離してしまふような激痛に、退役軍人は情けないうめき声をあげる。

「ここ何年かは発作もなかったから、すっかり油断してしまつたよ……痛たたたつ！」

「黒騎士様、今はお静かになさつていてください。今、お手当てをいたします。それと狩人様、申し訳ございませんが、受付で担架をお借りして来ていただけますか」

「は、はいっ！」

駆け出していく後ろ姿に一礼しながら、巡礼尼僧は治癒の奇跡を詠唱し、退役軍人を苛む激烈な腰痛を打ち消していく。

「本当に申し訳ない、こんなことで奇跡を使わせてしまつて……」

「何をおっしゃられますか黒騎士様、これは、こういう時のためのものでございます」

「返す返すも面目ない……」

心地よい暖かさをともなつた奇跡の光で患部を癒されながらも、退役軍人は意気消沈した様子で巡礼尼僧に詫げる。

「担架借りてきました、お師匠様！」

「先生！大丈夫ですか!？」

そして、担架を抱えて戻つてきた半闇狩人と、退役軍人の容態を案ずる冒険者たちの

声が、慌ただしく駆け寄ってきた。

「やはり、あの量は無理でございます。せめて、数を減らすか、私共に分散していただくしかない、そう容易くは持ち運べるような量ではございません、黒騎士様」

「だけどねえ……中途半端な量をばらまいたところで、駆除できる数ははれているし、何より罫を覚えられてしまいかもしれないよ。そうなつたら、今までの苦労が水の泡になつてしまうよ……いたたたつ」

担架で自室まで運ばれた退役軍人は、鎧兜を外す暇もそこそこに、ベッドの上に寝かされる。そして、この中で唯一、彼の鎧の構造に明るい半闇狩人が、余計な痛みを与えないように、兜や籠手から慎重に解いて外し、胴鎧や足鎧の止め紐やベルトを緩めていく。

なにしろ、一個一個が冗談のように重い。半闇狩人は、師匠はいつもこんなものをつけて、あれだけ動き回っていたのかと驚きつつも、慎重な手つきでそれらを扱う。

「それは重々理解いたします、ですが、それでお身体を痛めてしまつては、元も子もないではございませんか」

「お師匠様、わたしは大丈夫です。わたしにも、分けて持たせてください」

「狩人様のおっしゃる通りでございます、私とて、体力には多少自信がございます。それ

と……毒団子ですが、やはりもう少し乾燥させてからの方がよろしいのではないでしょうか。それだけでも、十分目方が軽くなると思われませんが……」

「だけどねえ……材料に大麦の粉を使っているから、半生の方が食いつきがいいんだよ。昔、ばあやが作っていたのも、そうだったんだからねえ」

よほど、その「ばあや」なる女性を信頼していたのか。低姿勢ながらもこだわりを譲らない、妙な頑固さを見せる退役軍人を前に、巡礼尼僧は呆れたように、それでも、そんな実直さを慈しむような目で苦笑を浮かべる。

「そこは、質より量で補うしかないかと存じます。お屋敷のお庭にまくのと、地下下水道の要所にまくのでは、手間が違い過ぎでございますよ」

「そうですよ、お師匠様。お坊様の言うとおりです、わたしたちにも手伝わせてくださ
い」

「うーん……」

真剣な表情の半闇狩人と巡礼尼僧の説得を前に、退役軍人は困ったように唸る。なにも、彼女たちをあてにしていけないわけではない。だが、半闇狩人にしても、巡礼尼僧にしても、その役割を考えた上で、身軽でいて欲しい理由があるからだ。

それでも、あの荷物の重量は想定外だったのみならず、こうして怪我を誘発したのは、詰めが甘いとのそしりを受けても言い訳のしようがない。

「あの……横からすみません」

その時、今まで黙ってその場のやりとりを聞いていた若い戦士が、遠慮がちに会話に入ってくる。彼は、他の冒険者たちと協力して退役軍人を居室まで運んだ後も、ひとりその場に残って手当ての手伝いをしていた。

「それって、俺にも手伝わせてもらえませんか、先生」

「いいのかい？ そうしてもらえると有り難いけど……多分、君にとって何のうまみもない仕事だよ？」

「この間言ったじゃないですか、なんかあつたら声をかけてくださいって」

「そ、そうだったね……しかし……」

若い戦士の真つ直ぐな目に、退役軍人は迷うように言葉をくぐもらせる。

「それに、一度初心に帰ってみるのも、悪くはないですからね。やらせてください、先生」
「そ、そうかい？……ありがとう、君。そう言ってもらえると、本当に嬉しいよ」

「ええ、こちらこそ、よろしくお願いします」

若い戦士の熱意と厚意に、退役軍人も根負けしたようにうなづく。臨時に一党に加入した、若い戦士。退役軍人は、半闇狩人と巡礼尼僧の顔にかわるがわる視線を向けながら、彼女たちの同意を求める。

「そういうわけなんだけれどね、構わないかな……」

そんな、相変わらずと言えば相変わらずな退役軍人の様子に、半闇狩人と巡礼尼僧は、思わずお互いの顔を見合わせて苦笑いを交換していた。

暗闇の向こう側

「はい、じゃあこれ、先生の朝ご飯ね」

「いつもありがとうございます」

「こちらこそ、どういたしまして」

早朝の酒場、そのカウンターで、半闇狩人は退役軍人の朝食を受け取る。魔女の一撃で腰を痛めた退役軍人は、巡礼尼僧による治療の奇跡を施されてもなお芳しくなく、療養を余儀なくされる状態となった。当然、地下下水道の探索も延期となった。

「それじゃ、お大事になって、伝えておいてね？」

「はい、いつも、ありがとうございます」

獣人女給に一礼して、朝食を乗せたトレイを両手に持つて歩きだした半闇狩人の前に、背の高い人影が現れる。それが誰かを認識する前に、半闇狩人の金色の目が鋭く切れ上がった。

「……なにか、御用ですか」

銀等級の槍使い、半闇狩人は、初対面の経緯上、心情的に折り合いのつかない相手の前に、表情も言葉も最低限の礼儀をわきまえはするが硬く、冷たくなる。

「随分嫌われちまったもんだな」

槍使いは、自分に対する警戒心を剥き出しにして隠そうともしない半闇狩人の様子に苦笑いを浮かべながら、手にしていた小袋を彼女に差し出す。

「……なんですか、これ」

「うちの相方から預かってきたんだよ、痛み止めによく効く薬草だとき。アイツに渡してくれって、預かってきたんだよ」

「……そうですか」

半闇狩人は、毒餌を差し向けられた狼の仔のような表情で、槍使いの顔と薬草の小袋を警戒するようにその金色の瞳を動かす。と、その時、視界の隅に、槍使いの背後、少し離れた場所で優雅に煙管をくゆらせている魔女と目が合った。

「……………」

半闇狩人の視線に気づき、たおやかな笑顔を返す魔女の姿に、半闇狩人はおおよその事情を察したように、小さなため息をついた。

「わかりました」

半闇狩人は、トレイをいったん傍のテーブルに置くと、槍使いから小袋を受け取り、小さく一礼する。

「どうもありがとうございます、お師匠様に伝えます」

「ああ、よろしく頼むぜ」

朝食と小袋を載せたトレイを持ち上げ、半闇狩人は槍使いにもう一度小さく頭を下げ、慎重な足取りで歩き出す。そして、魔女の前で丁寧に頭を下げた後、退役軍人の居室がある二階への階段を登っていった。

「あん……まり、人……を、ダシ……に、しない……でね？」

口にした煙管から唇を放し、美味そうに紫煙を吹きつつからかうような魔女の言葉と表情に、槍使いは、諦めたような溜息まじりにそっぽを向いた。

「お師匠様、朝ごはん持ってきました！」

「やあ、ありがとう」

半闇狩人の声に、退役軍人は、あいたたた、とぼやきつつ、苦勞しながらベッドの上で身を起こす。こういう時だけは、自分の無駄に大きな図体が恨めしい。

「だいじょうぶですか、起きれますか？」

半闇狩人にかいがいしく支え起こされながら、退役軍人はほろ苦く笑いつつ感謝の言葉を彼女に向ける。こうして、朝も夜もなく、世話を焼いてくれる彼女には、本当に感謝しかない。

「いつもすまないねえ、君」

「それは言わない約束ですよ、お師匠様」

仕方ない状況とは言え、弱気な退役軍人の言葉に、半闇狩人は慈愛に満ちた表情を浮かべつつ、洗いたての手ぬぐいで退役軍人の額に残る寝汗を拭きとった後、朝食を載せたトレイを注意深くその膝の上に置いた。

「どうぞ、お師匠様」

まずはジョッキの牛乳を一口、師匠のとする食事の流れが頭に入っている半闇狩人は、新鮮な牛乳で満たされたジョッキを退役軍人に慎重に手渡す。

「うん、ありがとう」

「お師匠様、まだ痛みますか？」

「いや、だいぶ楽にはなったよ。ただ、まだ装具の着装は厳しそうだねえ」

「お坊様の奇跡でも治せないなんて……」

「いやいや、そうじゃないよ。単純な外傷ならともかく、私の場合は、背骨の軟骨が歪んで、背中の筋肉や神経が捻挫してしまっただけだからねえ。これで痛みがなくなるまで治療させてしまつたら、最悪、背骨が歪んだままになってしまいかねないよ」

「え……そう……なんですか？」

「うん、それで、経験の少ない術者が骨や筋の怪我を慌てて直そうとして、形が歪んだまま傷を完全にふさいでしまつてね、後々不自由なことになってしまうことがあるんだ

よ」

また、知らずに余計な事を言ってしまった。そう表情を曇らせる半闇狩人に、退役軍人は努めて明るく話しかけながら、大盛りのパスタを口に運ぶ。

「尼僧殿も、それをわかっているから、痛みを和らげる程度で加減してくれたんだよ。さすが、銅等級といったところだね。それに、君が看病してくれるのが、私には一番のお薬だよ」

半闇狩人が剥いてくれたゆで卵を受け取りながら、退役軍人は彼女を安心させるように笑いながら話しかける。

「私は本当に幸せものだよ。こうして、看病してくれる人が傍にいてくれるんだから」
「あ……ありがとうございます……」

思いもしなかった師匠の感謝の言葉に、半闇狩人はもじもじとうつぶさながら、熱くなった頬の中でもごもごこと応える。それでも、その耳はまるでステップのように踊り動く。

「……あ、そういうえば、お師匠様。銀等級の魔女様から、お薬を頂いたんですよ」
「彼女が？　そうか、それはありがたいことだねえ」

食事を中断し、半闇狩人から受け取った小袋の中身を改めた退役軍人は、かすかに驚きの声を漏らす。

「これはこれは、こんな貴重なものをどうして……」

「え、そうなんですか？」

「そうとも、この薬草ひと袋で、馬が1頭買えてしまうよ」

「そうだったんですか……」

思いがけない師匠の説明に、半闇狩人は興味深そうに乾燥させた薬草を観察する。そして、退役軍人も、この小袋の中にある、乾燥させた茶葉のような薬草を見る。本当に、どこで手に入れてきたのか。現役時代、邪教徒の制圧任務でたびたび目にしたそれ。とはいえ、成分を精製、調合していない素材のままであるから、まあ、過剰な心配はいらないだろう。

「あんまり、見たことない薬草ですね……」

「それはそうかもしれないねえ、なかなか人の足では踏み込みづらい所にあるものだからねえ」

退役軍人は、苦笑交じりに紅眼鏡をかけ直しながら、押し頂くように小袋を両手で持ち上げ、槍使いの青年に感謝を捧げる。

「もつとも、猟師として活動する場所とはあまり関係ない場所にあつたりするものだからね。目にする機会がなかったのも無理はないよ、ともあれ、君も私も、珍しい物が見れてよかつたじゃないか」

退役軍人は、丁寧に袋の口紐を結わえ直し、ベッド脇の小卓の上に置く。そして、あの若さ故の見栄と自信の奥に隠された、自身が振るう槍の如く真つ直ぐな心持ちの青年の顔を思い出し、ふつと淡い笑みを浮かべる。

「後で、煎じて飲むことにしよう。そうすれば、だいぶ動けるようにはなるはずだよ」「そんなに効き目があるんですか?」

「うん、まあ、強い薬草だから、あまり常用は出来ないけどねえ。ともあれ、これを食べたら、彼らにお礼を言いに行こう」

「はい、お師匠様」

「あつ、先生、おはようございます!」

「やあ、おはよう。遅くなって申し訳ない、ちよつと準備に手間取ったものでね」

半闇狩人に付き添われて階段を下りてきた退役軍人に、さつそく若い戦士が駆け寄ってくる。さすがに、いつもの黒い鎧兜ではなく、黒染めのアーミングジャケットに乗馬ズボン、そして革長靴といった軽装。あの紅い眼鏡と、まるで実の娘か幼な妻のようにかいがいしく付き添っている半闇狩人が横にいなければ、あの鎧兜の印象が強すぎて気付かない所だった。

「ところで、君。すまないけど、槍使いの彼を見なかったかい?」

「え？ああ、彼なら、相方の魔女と一緒に依頼の仕事にでかけましたよ」
「そうだったのかい……ちよつとのんびりし過ぎたねえ」

残念そうな退役軍人の様子に、若い戦士は氣遣うように声をかける。

「どうしたんです、なにかあつたんですか？」

「ああ、いやね、彼から、薬草の差し入れをもらったものだから、ひとことお礼を言いたかつたんだよ。でも、仕方ないね。彼らが帰つて来たら、改めて挨拶に伺うとするよ」
気持ちを切り替えるような表情の退役軍人の言葉、そして、若い戦士は、初めて見る退役軍人の素顔に納得するような表情を浮かべる。

これは、白磁の顔なんかじゃない。

普段の立ち居振る舞いもさることながら、およそ初心者や駆け出しと言う言葉から縁遠い雰囲気。それは、その顔に刻まれた歴戦の痕を前に、確信めいたものを感じ取る。

にもかかわらず、未だに地下下水道での仕事にこだわる理由。それは恐らく、何か無視できないものの存在を感じ取っているからではないか。

「ん？どうしたんだい」

「あつ、いえ、すみません。先生の顔、こんなに早く見れると思わなかつたもんですから……」

「ハハハハハ、いやいや、別に秘密にして格好をつけようとしている訳じゃないから

ねえ。傷だらけでみつともないけど、そこは大目に見てくれるとありがたいよ」

「そんなことないですよ、今までだって、それだけ頑張ってきたんでしょ」

「ハハハ、そう言ってくれると嬉しいよ」

「それよりも先生、怪我の方は大丈夫なんですか？」

「うん、それが、槍使いの彼がくれた薬草を煎じて飲んでみたんだよ。お陰で、あまり無理は出来ないけど、こうして動き回る分には大丈夫だよ」

「そうなんですか、けど、くれぐれも大事にしてくださいよ？」

「ありがとう、あ、そうだ。少なくとも申し訳ないけど、君にも少しおすそ分けしておこう。何かあった時、きつと役に立つと思うからね」

「い、いえ！そんな、悪いですよ」

「いいからいいから、君だってもう大事な仲間なんだからね」

そう言つて楽しそうに笑いながら、退役軍人は若い戦士の手に小さな包みを置いた。

「本当にこの量を、ひとりで持つていこうとしてたんですね……」

若い戦士は、それぞれに分担された量の毒団子に、呆れた表情を浮かべながらも、大きな麻袋に分けられた荷物の重量を確認するように、実際に背負った背負子を揺する。

「いや、まあ、なんとというか、行けると思っただけだねえ」

毒団子の運搬について一党の4人で再度話し合い、最終的に、1回で配置する量を麻袋に分け、それぞれの役割に応じて分担することになった。

「でも、ひとり分知恵が増えるだけでも変わるものだね。やはり、みんなで相談するのはいいことだよ。これで、本当になんとかなりそうだな」

最初よりもさらに効率的になった探索計画に、退役軍人も背負子の重さを確認しながら、満足そうにうなずく。鼠の習性を利用して、事前に検討した場所にひとまとめにして配置するという、作戦内容の修正。一個ずつ散らばせてまくよりも、一か所にまとめた大きな餌の方により集まりやすいという習性は、大鼠にも言えること。

そのため、配置を簡単にするため、一か所分の量を麻袋に詰め、袋ごと置いていくという方法に変えた。ある程度怪我が回復した退役軍人と、協力のため一時的に一党に参加した若い戦士で半分ずつ請け負い、半闇狩人は言うに及ばず、巡礼尼僧にしても、

「この程度なら、問題はございませんですよ」

と、快く分担を申し出た女性陣の意見を確認し、行動に無理の出ない範囲での運搬を任せることになった。これで、最初のように負担が退役軍人に集中することもなくなった。

「いやあ、みんな本当にありがとう、ありがとう」

かなり目方の軽くなった背負子を担ぎながら、退役軍人は言葉弾ませる。

「なんだか、楽しそうでございますね、黒騎士様」

「え？ああ、そうだね、みんなとこうしていると、昔家族で出かけた時のことを思い出すからね」

「ご家族……でございますか？」

そんな退役軍人と巡礼尼僧の会話を耳にして、半闇狩人の顔色は雨雲に覆われた空のように重く曇り始める。それはそうだろう、師ほどの人間なら、妻や子がいてもおかしくない。どうしてそんなこと、今まで考え付かなかったのか。

どうしてか、大事なものを取り上げられたような、そんな思いが全身を鉛のように重くし、砂利の味じみたため息を吐きかけたその時、懐かしむような師の言葉に、吐き出しかけたため息が肺に逆流する。

「あの頃は、妻も元気だったし、子供達もまだ小さかったから、かわいい盛りだったよ」
「あ……も、申し訳ございませぬ、黒騎士様……！」

退役軍人の言葉の裏側の意味を察し、巡礼尼僧は自分の失言を慌てて詫びる。しかし、退役軍人は穏やかな言葉でそれを受け止めた。

「いいよいよ、もうだいたい昔のことだからねえ。とつくの昔に、折り合いはつけているさ。それに、子供達も今じゃ立派に私の跡をついでくれている。なにも問題なんてないよ」

穏やかな退役軍人の言葉を聞きながら、若い戦士は、彼の過去に想いを馳せる。彼に、どんな生活があり、苦難があり、幸せがあったのか。

そして、かつて共に冒険をしていた——ごく短い時間ではあったが、それでも、心を通わせていた半森人の少女を思い出していた。が、しかし、視界の隅に映った半闇狩人の悲壮な気配に気づき、両手でその両頬をぎりぎりとなり上げて、手を慌てておさえにかかると。

「ちよ、何やってるんだいっ!？」

「う……うう……」

若い戦士に止められ、半闇狩人は涙目でうつむく。師の妻である女性に対し、嫉妬の炎を燃やした自分が情けない。そんな良心の呵責が、自分自身の頬をひねり上げていた。半闇狩人は、まだひりひりと痛む両頬の熱を感じながら、心の中で師とその妻に詫びる。そして、それを知ってか知らずか、穏やかな退役軍人の言葉が向けられる。

「でも、昔は昔。いくら懐かしがったって、それは綺麗な絵のようなものだからねえ。大切なものには違いないけど、今こうしてみんなといるこの時間が、今の私にとって一番大事だよ」

そして、退役軍人は集まった一同に向き直ると、改めて一礼する。

「みんな、力を貸してくれて、本当にありがとう」

「黒騎士様、お礼を申し上げるのは、むしろ私めの方でございます。一党に加えて欲しいという不躰なお願いを、こうして聞き入れてくださったのですから」

巡礼尼僧は、退役軍人に対し恭しく合掌する。しかし、打って変わり、真剣な表情で提案を持ちかけた。

「ですが、あと一週間ほどは大事をとって静養なされた方がよろしいかと存じます。言うまでもなく、この一党の要は黒騎士様でございます。ですから、黒騎士様の体調を、出来る限り万全に整えていただいた方がよろしいかと」

「そうですね……俺も、お坊さんの意見に賛成です」

「狩人様は、どう思われますか？」

「え、わたし……ですか？」

意見を振られ、半闇狩人は戸惑うように目を泳がせる。

「わ、わたしも……お怪我を治してからの方が、いいと……思います」

一党の面々から静養の意見を挙げられ、退役軍人はどこか名残惜しそうにしながらも、諦めた様子でうなずいた。

「そうだねえ……また、みんなに迷惑をかけるわけにもいかないし。ここは、みんなの言う通りにするよ」

「はい、どうか、そのようにしていただければ幸いです」

「そうだね、それじゃあ、ギルドにも報告と説明をしなければならぬし、今日はこれで解散しようか。みんな、お疲れ様」

一党の面々に解散を告げた退役軍人は、それぞれ酒場を後にする仲間を見送る。その時、ひとりその場に残っている半闇狩人に気付き、穏やかにうなずく。

「君も、いい機会だから町でも散歩してきなさい。私は、大丈夫だから」

「はい……」

小さく、しかし、素直にうなずいた半闇狩人は、退役軍人にぺこりと一礼すると、とぼとぼとその場を立ち去って行った。

「ふうむ……」

半闇狩人の背中を見送りながら、退役軍人はテーブル席に腰を下ろす。そして、その様子を見ていた獣人女給が、いつものように明るく声をかけてくる。

「先生、なにか軽くいただきますかあ?」

「うん、そうだね」

獣人女給、器量よし、気立てよし、まさに非の打ちどころのない、ギルド酒場の看板娘。こうして、化け物じみた醜い顔を晒しているのに、その笑顔は相変わらず人懐っこく、暖かい。

「それより君、すこし相談したいことがあるんだけど、いいかな?」

「あいあい、なんでしょー?」

「おっと、その前に注文だったね、失敬、失敬」

ギルドの新人訓練所、その一角にある射的場でひとり、半闇狩人は一心不乱に矢を射かけ続ける。しかし、今日は、思ったように矢が飛んでくれない。的場からため息交じりに矢を回収し、そして、ため息混じりに矢を抱え、とぼとぼと射場へ戻ることの繰り返し。

そして、そもそもと沓巻の緩みを確認し、矢羽根の傷み具合を確認して選り分ける。これもやはり、ため息交じりに。

「どうしたの、調子悪そうじゃない?」

もう、弓はこの辺にして、投石紐の練習をしよう。そう思った矢先に、肩越しにかけられた声。半闇狩人は、腰に巻いた投石紐をほどきかけた手を止めて振り向くが、その表情は驚愕で凍り付いた。

「なんだったら、お手本見せてあげよっか?」

気さくな声と共にそこにいたのは、森人の弓手。それも、銀等級。それくらいなら別に驚きはしない。しかし、今日の前にいるのは、永遠の命を持つと謳われた、上森人の妖精弓手。

「なんか見てたらさ、筋はいいみたいだから」

そして、猫のような笑顔で近寄ってくる妖精弓手、しかし、半闇狩人は、反射的に謝罪の言葉を口に出していた。

「すつ……すみませんでしたっ!」

「え? あーちよつと!?!」

妖精弓手の声を背中に聞きながら、半闇狩人は疾風のように駆け出すと、あつという間に妖精弓手の視界から姿を消していた。そして、釈然としない様子の妖精弓手に、彼女の一党の面子のひとりである鉦人道士が、愛用の酒瓶片手からかうように声をかけてくる。

「なんじゃ、耳長の。また若いのにちよつかいかけて遊んどるんか」

「ちよつと、なによその言い方。あの子が調子悪そうだったから、お手本を見せてあげようとしただけじゃない」

「お前さん、それ本気で言うちよるんか」

一応、一部始終を見ていた鉦人道士は、妖精弓手の反論に呆れたように鼻を鳴らす。彼女の言葉に悪気はないのは理解できる、しかし、いくらなんでも無邪気に過ぎた。あの黒つ子の子の様子は、どう見ても気楽なものではない。まあ、何があつたかは知らないが。

確か、あの真つ黒いのの弟子よな。鉦人道士は、最近、ギルドに登録した新人冒険者

を思い出す。いや、アレを新人と呼ぶには、些か無理が過ぎる。あの真つ黒な偉丈夫、以前、挨拶がてらに酒に誘い、杯を酌み交わしたこともある。その時、色々話を交わした覚えがあるが、邪教団の將軍のような見かけに反して、なかなか愉快で、しかもいける口だったという事は覚えている。

いつの間にか一党の面子が増えたらしく、あまり飲む機会も少なくなつてしまつたが、それでも、彼の弟子と言う半闇人の少女については、まんざら知らないわけでもない。もちろん、個人の事情について詳しくは聞くはずもなかつたが、だからこそ。

「ただでさえ壁にぶちあたつて悩んだるときに、お前さんみたいな天上人が手本を見せるとか言うても、怖がらせるだけじゃない」

「なんでよ、つてか、天上人つてなによ。関係ないじゃない、そんなの」

「あのな、何度も言うがお前さん、本気で言うちよるんか」

本当にわからない、と言う表情で軽く頬を膨らませる妖精弓手に、鉦人道士は小さくため息をついた。こいつら上森人にとつて、時間つちゆうんは一体何のためにあるんじゃないかと、心の中で嘆息しつつ。

「そんなら聞くがの、耳長の。もしお前さんが弓の稽古で調子が思うように出ると本気で悩んだる時に、姉上とかが手本を見せてやるとか言つていきなり現れたら、お前さん、どうする?」

「……………」

妖精弓手の中で、ありとあらゆる可能性と状況がシチューのように煮込まれ、一つの結論が浮かび上がる。

「それは……厳しい、かも」

「そう言うことじゃ」

鉦人道士は、小さく鼻を鳴らしながら腰の酒瓶の中身を確認する。

「ものにはの、それぞれちようどいい役割、ちゆうもんがあるんじゃ」

「ちようどいい役割って、なによ」

「そうじゃの……」

鉦人道士は、顎髭をしごきながら思案を巡らす。そして、ふと視界の隅をてこてこと横切っていく、見知った顔。

「たとえば、アレじゃい」

訓練所の片隅、見渡せば、自分と同じ駆け出し冒険者が剣や槍の稽古に励んでいる。それをぼんやりと眺めつつ、半闇狩人は膝を抱えて座り込みながら、鉛のようなため息を吐き出した。いつもは風と共に万の音を拾わんと立つ耳も、今は地面に落ちそうなくらいに伏せている。

今日、上森人に初めて声をかけられた。しかし、神にも等しい弓の技量を持つ存在と、自分のような山村の獵師では、どうあつても話にならない。自分の弓に自信がないわけではない、けれども上森人に対して闇人と只人の血が混じる自分。

そんな天上人とお山の大将では端から勝負になる訳がないし、手本と言われても、自分には到底無理な神業をみせつけられて終わりになりそうな予感がした。

矢が飛ばない理由、それは自分でもよくわかつていた。しかし、それをあの上森人に話せるかと言えば、それは違う話。だから、これ以上話かけられる前に、彼女の前から逃げ出していた。

それが、とても情けなく、悔しい。

じわり、と浮かび上がる涙、もう何度目かもわからないため息。今日の、一党の打ち合わせの時もそうだった。熟練者の意見に対し、当たり前障りのない賛意しか示せなかった自分。体を傷めた師に静養してもらいたいというのは本心であるにしても、あれでは、自分はいてもいなくても変わらなかつたのではないか。

そのくせ、一度命を助けられたくらいで、勝手に師匠と呼び、彼の元に押しかけた自分が、今から思えばどうしようもなくみつともなく、恥ずかしい。それに、師の亡き妻に対し、知らなかつたとはいえ、嫉妬の感情を燃やしてしまったこと。どれにしても、それらは半闇狩人の心とため息を重くする。

そして、再び吐き出された、鉛のため息。

「あ、ここにいた」

不意に聞こえた声、しかし、日向の匂いがするような、どこか暖かく、心地よい雰囲気。

「お弟子ちゃん、お弟子ちゃん」

「え……あ、はい……？」

素早く涙を拭い、顔を上げると、そこには見知った顔。半闇狩人は、ほっとしたように表情を緩める。

「ちよつと配達でコッチ来たんだけどさ、給食っていうか、そんなカンジの」

「あ……そうなんですな、お疲れ様です」

「うんうん、それでさ、お弟子ちゃん、ちよつとコレ、食べてみない？」

「え？」

獣人女給が肩に下げていた帆布のバッグから取り出した包み。半闇人の鋭敏な感覚は、それがパンケーキであることに気付き、小さく喉が鳴る。

「だつしよ？おいしそうでしょ、けっこうこれ、人気あるんだよ」

獣人女給は、嬉しそうに包みを解くと、半闇狩人の膝に乗せた。

「だからさ、お弟子ちゃんも食べて、食べて」

「え、あの……いいんですか……?」

「いいよいいよー、なんなら、蜂蜜もかけてあげちゃう」

「えっ、ええっ……!」

獣人女給が、エプロンのポケットから得意げに取り出した硝子の小瓶。蜂蜜が苦手な訳ではない、むしろ、大好物。村にいた時は、重要な外貨の調達資源だった蜂蜜。何度も目にしたし、父と共に蜂箱の世話もした。

しかし、蜜の出来を確認する味見と、誕生日の時にしか口にしたことではない。それが、小瓶から惜しげもなく、目の前のパンケーキにふりかけられた。

たちまち漂う、ふくいくたる甘い香り、健やかに咲いた花々から集められたと分かるそれは、半闇狩人の曇った顔をたちまち蕩けさせた。

「んっふっふー、ほら、遠慮しないで、食べて食べて」

獣人女給は、満足そうな笑顔で大きくうなずく。

「お弟子ちゃんにも、食べて欲しいって思ってたからさ」

「あ、ありがとうございますっ……!」

半闇狩人は、花が咲き開いたような笑顔を浮かべながら、受け取った包みを大事そうに両手で支え持つ。そして、蜂蜜がたっぷり乗ったパンケーキを、先に獣人女給に差し出した。

「え？あたし？いいよいいよー、気を遣わなくてもさあ」

「あの……お姉さんも、いつしよに食べませんか？」

「えっ？」

「一緒に食べたなら、きつと、もつとおいしいと思うんです」

かわいい

そう思うよりも先に、獣人女給は、隣の半闇狩人を抱きしめていた。

「えっ、あつ、ちよつと！蜂蜜がこぼれちゃいますっ！」

慌てる半闇狩人の声を胸に聞きながら、獣人女給は、ふわりと腕をほどきつつ、そのおろしたての銀糸のようなさらさらの髪をなでる。こんなに健気で、こんなに純粹で。先生が、いつも気にかける理由もわかるとういうもの。

「それじゃ、お言葉に甘えていただきまーす」

獣人女給は、半闇狩人の手にあつたパンケーキにぱくりとくいついた。手ずから直接、そんな無作法な食べ方も、花開いた親愛の表れ。こんなに雑で、こんなに暖かく、そして懐かしい、友達というものの匂い。半闇狩人は、いつかどこかで無くしてしまったものをやつと見つけたように、晴れやかな笑顔を浮かべていた。

「そうだったんだ……それは、ちよつとくやしいよね」

半闇狩人の話を聞きながら、獸人女給は優しくうなずく。かたや冒険者、かたや酒場の女給。やっている仕事は違うけれども、この子の気持ちは痛いほど良くわかる。自だって、そうだった、そんな時があった。

「でもさ、慌てることなんて、ないんじゃないかな」

「え……？」

「だって、先生が一番大事にしてるのって、お弟子ちゃんだもん」

「そ、そうでしょう……か……」

「そうだよ、見ててわかるもん」

獸人女給は、明るく笑いながら半闇狩人の顔を見る。

「お弟子ちゃんはさ、今はすっかりみんなを見て、いいと思ったことをどんどん覚えて行けばいいんじゃないのかな」

そう、自分が、これまで厨房でそうしてきたように。

「できないことやわからなかったり前じゃん、いきなりなんでもできちゃったら、先生やみんなの立場がないじゃん」

獸人女給は、味付けひとつ満足にできなかった頃の自分を思い出しながら、懐かしそうにつぶやく。いや、ある程度はできていた。それでも、料理長の腕前にはとても敵わず、どれだけ自分自身を思い知らされたことか。

「みんな、そうやってひとつひとつ、教えてもらってきたものを積み上げて、できるようになつてきたんだからさ」

そう言つた後、獣人女給は、にしし、と笑うと、不意に悪戯っぽい表情を浮かべた。

「それに、お弟子ちゃん。もう少ししたら、絶対に美人になるから、心配しなくてもいよ」

「えっ……!?!」

急に切り替わつた話に、半闇狩人は思わず目を丸くする。

「だって、ならないわけじゃないじゃん。だからさ、諦めたりしないでさ、絶対、先生のそばからいなくなつちやダメだよ」

「え……あの……?」

「だって、それじゃ先生だって、さびしいよ」

自分のことよりも、先に他人を思いやるまっすぐな心根。確かに、もう少しわがままを言つてもいいんじゃないか、とは思うけれど。

でも、それができるから、お弟子ちゃんなんだよね。

獣人女給は、包みからそつとパンケーキを手に取ると、小瓶に残つた蜂蜜をかけ直したそれを半闇狩人の口元に差し出した。

「はい、どーぞ」

そんな子供同士の戯れのようなやりとりに、半闇狩人は、少しためらうように目を泳がせる。それでも、日向のような獣人女給の笑顔の前に、すうつと気持ち軽くなり、ふわりと表情が明るくなった。

「はい、いただきます！」

さっきの獣人女給の真似をするように、ぱくりとパンケーキにかみつく半闇狩人。ようやく見せてくれた、年相応の屈託ない仕草。そんな半闇狩人に、獣人女給は心から嬉しそうな笑顔を浮かべていた。

「おい、お前、そこでなにをしている」

いつか聞いたような言葉に、退役軍人は物陰からうかがっていた姿勢のまま振り返り、思い出したかのような腰の痛みに顔をしかめる。

「やあ、君か。ひさしぶりだね」

「ひさしぶりもなにも、ギルドでいつも顔を合わせているだろう」

「ああ、そういうえばそうだったねえ」

いつもの調子で応える黒ずくめに、女騎士は小さく鼻を鳴らす。年の功というのもあるだろうが、この男の前では等級など全く意に介するものではないようだ。本当に、あいつと言いつこの黒ずくめといい、面白い連中だ。いや、それはいい。なにがあった

から、こいつは壁の影に隠れて何を覗き見ていたのか。

「で、ここぞなにをしていた？」

「ああ、うん、ちよつとね」

「怪我をしているのだろう、あまりうろちよろせず、部屋で大人しくしていたらどうだ」

「そうだね、君の言う通りだよ」

女騎士の言葉に、退役軍人は申し訳なきように肩をすくめると、建物の壁から離れてマントの襟を正す。腰を痛めているくせに、完全装備のいでたち。以前手合わせをした時、その装備が生半可な体力では扱えないものであることは、あの時十分に思い知らされた。

「どうする、少し中で休んでいったらどうだ？」

「いや、もう大丈夫みたいだし、用事は済んだからね。これで失礼するよ」

「そうか、だが、あまり無理はするなよ」

「うん、ありがとう。それじゃあ、また」

そんなつつけんどんな言葉の裏に滲む思いやり、退役軍人は、この若い女騎士に一礼し、辞去の意を伝える。そして、町へ帰る道を、晴れ晴れとした表情で歩き出した。

「そうだね、もう、大丈夫さ」

退役軍人は、そう眩きながら心からの感謝を捧げる。彼女も忙しかろうに、自分の無理な相談を快く引き受けてくれた。そして、彼女が動くための時間を分け与えてくれた。圃人の料理長にも。

あの子が、自分を頼りにし、抛り所としていることは理解していた。あの子の身の上を思い返せば、自分のしたことはそうなつても仕方のない事。しかし、このままでは、いつか動かせない現実をあの子に突きつけることになる。

自分は、いつまでもあの子の傍に居ることはできない。これから先、運命の骰子の気まぐれで無事でいられたとしても、只人と半闇人。それぞれの種族に与えられた命の灯が、無慈悲な現実を思い知らせに来る日は、そう遠くはない。

それなのに、その時、心を許せる友のひとりもないとなれば、あまりにも寂しすぎるではないか。年寄りの余計なおせっかいだということは十分承知している、それでも。

「いつまでも暗い場所にいることなんてないさ」

退役軍人は、こりがちな背中と腰を伸ばすようにのびのびと両手を広げる。そして、少年のように笑い、愛すべき弟子に言葉を贈る。

「その向こう側も、けつこういいものだよ」

魔弾の射手

「さあ、真剣にやらないと、大変なことになるよ」

「は、はい！」

新人冒険者の訓練所で、退役軍人と半闇狩人が大立ち回りを演じている。といつても、別に喧嘩が始まったわけではなく、半闇狩人たつての願いによる、白兵戦の稽古。

「相手の手や足ばかり見てちゃダメだよ、遠くの山を眺めるように、相手の姿全体を視界に入れるんだ」

両手の拳に緩衝材代わりの布を分厚く巻いた退役軍人は、流れるような足さばきで半闇狩人を追い詰めていく。一方、半闇狩人も、鏃を外した矢を握り、退役軍人の拳や蹴りかわしながら、一撃を見舞う隙を懸命に探す。いつもの黒い鎧兜姿で、それでもこの動き、この速さ。そして、生半可な突きは籠手に弾かれ、呻りを上げて鉄拳が飛んでくる。

耳元をかすめる拳を冷や汗混じりにかわし、膝を狙ってくる蹴りから逃げるように跳びはねる。しかし、そのたびに彼女の腕の届く間合いから遠のき、逆に、退役軍人は獲物を狙う大熊のごとく一瞬で眼前に迫ってくる。

「ほら、手や足しか見てないから、次がわからない。私は君がどこを見ているのか、よくわかるよ」

そんな言葉と共に目の前に迫る大きな拳、しかし、それは半闇狩人の鼻先で急停止する。が、状況を理解する暇もなく足元を蹴り払われ、視界が回転し、青空が見えたと同時に背中から地面に叩きつけられた。

「大丈夫かい？」

受け身をとって地面を転がり、再び立ち上がった半闇狩人に声をかけつつも、小刻みにステップを踏みながら、右へ、左へ、空を切る音と共に横殴りの素振りをしながら、どうにも攻めあぐねている様子の半闇狩人にもう一度声をかける。

「君の素早さとバネをもつとあてにしてごらん？ 君なら、教えたとおりにできるんだ。それと、何があっても最後まで目を閉じなかつたのは良かったよ」

「は……はい！」

「じゃあ、もう一度いくよ」

再び迫り来る黒い暴風、そして、半闇狩人は今までより半歩間合いを広げながら、懸命に退役軍人の全身を視界に入れつつ、こちらに向かって拳が伸びきった瞬間、地を蹴る。しかし、これは誘導、次に来るのは――

鞭のような蹴りが迫る、しかしかわさない。むしろ、その内側に向かって飛び込む

ように加速する。しかし、すかさず反対側の拳が迎撃に上がるが、さらにその下をかくぐるように、拳より速く、ひたすらその巨体に向かって再び加速。

そして、組みつくように退役軍人の懐に飛び込んだと同時に、指の間に握った矢を拳ごと叩きつける、そして、鏃の無い矢は胴鎧の隙間から脇下に突き立てられた。もし、これに鏃がついていたら、退役軍人は肺から鎖骨辺りまで斜めに貫かれていた。

たった二呼吸ほどの間でなされたこの動き、多少手加減はしてみたとは言え、ここまですれば大したもの。

「うん、よくできたね」

まさに黒い疾風、二段、三段の加速、そして、視界の集中と拡散の瞬時の切り替え、人間の血ならではの身体能力。只人なら、教えてここまでできるようになるまで、よほどの才に恵まれなければ倍の月日が必要だっただろう。

「でも、最後まで油断しちゃいけないよ」

「えっ……んっ！んああああああっっ!？」

いつまでも懐に留まっていた半鬮狩人は、突然抱きすくめられ足が宙に浮く。その瞬間、ものすごい圧力で締めあげられ、背骨が軋み肺の空気が全て絞りだされた。

「最後の力を振り絞って反撃してくるかもしれないからね、だから、一撃入れたらさっさと離れないと危ないよ」

詰めの甘さを指摘する退役軍人の言葉を、半閹狩人はどこか恍惚の表情を浮かべながら聞いていた。それが、酸欠手前だからなのか、他の理由なのかは、わからない。

「お師匠様！お昼ごはんもつてきました！」

「うん、ありがとう」

最後の最後に意地悪いことをしてしまったにもかかわらず、何故か上機嫌な半閹狩人は、パンやハム、チーズの包みと、慎重に運んできた牛乳のジョッキを退役軍人に手渡した。

青空の下で食べる昼食は楽しい、そして、師から習っている、矢を刺突武器として白兵戦に使う打根術も、ようやく今日初めて一本取れた。それと——

「最後の最後に申し訳なかったね、背中は大丈夫かい？」

「はい！大丈夫です！」

「そ、そうかい？ともあれ、ただこうじゃないか」

半閹狩人の明るい表情と返事に面くらいなながらも、なにはさておき、昼食を頂くことにする。そして、青空の下での食事をとりながら、退役軍人は隣に座る半閹狩人に話しかける。

「最後に組み付かれた時なんだけどね、相手の頭に抱きついてても特に効果はないから、と

にかく頭のとつぺんに思いつきり肘を打ち下ろすといいよ。矢を取ることができたら、それを首に刺すのもいいだろうね」

「はいー」

今日はものすごくご機嫌、よほど、一本取れたことが嬉しかったんだねえ。と思いなから、退役軍人は腰の雑囊を探り、銅貨を数枚つまみだした。

「今日はよく頑張ったからね、これで、君の食べたいものを追加で買ってきていいよ」

とたんに輝き出す表情、半闇狩人は、退役軍人に一礼すると建屋に向かつて駆け出していた。そんな彼女の成長ぶりに、退役軍人は感慨深げにジョッキの牛乳を飲む。とかく、彼女は呑み込みが早い。読み書き計算にしても、戦技にしても。まるで、知識に飢えているかのように、乾いた砂に水が染み込むように、彼女は教えたことを余さず吸収していった。

この分だと、あと1年もしたら、軍団員の若手くらいはやつつけてしまいかもしれないねえ。そんなことを思いながら、すぐにそれを打ち消す。別に、自分はその子を人狼にしたい訳ではない。そして、軽やかな足音と共に、半闇狩人が戻ってきた。

「いつてきました、お師匠様！」

ほどなくして戻ってきた半闇狩人が買ってきたものをみて、退役軍人は思わず目を細める。

「蜂蜜。パンケーキかい、こういうのもあつたんだねえ」

これが彼女のお気に入りで、ということなら次から食事の献立に追加しようか。そう考
えていると、退役軍人の前に蜂蜜をふりかけたパンケーキが差し出される。

「お師匠様も、どうぞ!」

「え、いいのかい? 私のことには気にしなくていいから、遠慮せず食べなさい」

「一緒に食べたほうが、おいしいですから」

屈託のない笑顔、この子は、あの日からずいぶん明るくなった。退役軍人は、ギルド
酒場の獣人女給に、心の中で感謝の言葉を送る。

「それじゃあ、お言葉に甘えて、いただきますかな」

「はい!」

久しぶりに食べる甘味、なんでもかんでも歳のせいにはしたくないが、この所甘いも
のにあまり興味がなくなっていた。こうして彼女からすすめられなければ、こうして口
にすることもなかっただろう。

だけど、こうして久しぶりに食べてみるのも、いいものだねえ。そんなことを思いな
がら、退役軍人は、ふくいくたる香り漂う蜂蜜とパンケーキの味を堪能していた。

「先生! お疲れ様です!」

「やあ、君、お疲れ様。尼僧殿には会えたかい？」

昼食も終わり、帰り支度を始めていた師弟の元に、宿坊を訪ねていた若い戦士が戻ってきた。

「それが……所用で出かけていると言って留守だったんです」

「そうだったのかい、尼僧殿も、なかなか忙しそうだからねえ」

若い戦士の報告に、退役軍人は自分を納得させるように頷く。冒険者とは言え、僧侶神職である以上は、本業の方もおろそかには出来まい。それにしてもこの青年、お弟子さんの稽古が大事ですから、と、使いつ走りのような仕事を進んで引き受けてくれた。なんとも心持ちのいいことか。

「それより先生、怪我の方は大丈夫なんですか？」

氣遣わしげに尋ねる若い戦士、あれから調査の出発を延期して以来、退役軍人は半闇狩人の稽古のため訓練所に通い続けていた。できるだけ安静にしていた方が、と話もしたが、退役軍人曰く、この程度なら大丈夫だよ。との返事。

「ああ、それならもう大丈夫。薬の方も効いているし、尼僧殿が治癒の奇跡でなんとかしてくれているからね。この調子なら、近いうちに復帰できそうだよ」

「そうでしたか、ならよかったです」

「それはそうと、君の方は大丈夫なのかい？ 面倒を見てあげている新人たちもいるんだ

ろう?」

「ええ、まあ。でも、俺がいなくても、とりあえずは大丈夫そうですよ。彼らも、自分ができることとできないことの見極めがついたようですし」

「そうかい、まあ、それがわかるなら、とりあえず大丈夫だろうね」

そう答えてから、退役軍人は、なにかいいたげな若い戦士に声をかける。

「そうだ、せっかくだから、君の剣も見せてくれないかい」

「えっ、いいんですか……!」

一瞬明るくなる表情、それでも、やはり気を使うような表情に戻る。

「でも、お昼を食べたあとじゃないんですか?それに、怪我の方だつて……」

「大丈夫だよ、ちよつと待つてくれるかい?」

「あ、はい」

そういうと、退役軍人はてくてくと倉庫の方へと歩いていく。そして、しばらくして戻ってきた退役軍人の手に握られていたのは、格闘家が鍛錬に使うような三尺棒。

「ちようどいい剣の代わりがあつたからね、これでやろうか。君は、自分の剣を使っているからね」

「え……?」

「大丈夫だよ、棍棒は結構丈夫だね。却つて、木剣より安全だし稽古向きなんだよ」

確かに、長さだけなら剣ときほど変わりはない。そんな楽しそうに応える退役軍人の様子に、彼がそう言うなら、と若い戦士は納得したように頷く。

「わかりました、それじゃ、よろしくお願いします」

「うん、じゃあ、お互い気をつけてやろうか。ああ、それと、君も、私達の稽古をよく見ておくんだよ」

「はい！」

「うん、自分がそこで戦っているつもりになって、自分だつたらどうするか。そういうことを考えながら見ていると、結構、面白いし勉強になるからね」

半闇狩人に見学を命じ、退役軍人は三尺棒を右手に携え、若い戦士は愛用の剣を携え、お互いに対峙すると儀礼に則って一礼する。

若い戦士は、割と我流が入ってはいたが、それでも、今までの経験を反映させた実践的な構え。一方、退役軍人は、右手に握った三尺棒をほぼ自然体のまま提げている。

(なるほど、なるほど)

退役軍人は、若い戦士の構え方を見て、彼自身の等級に相応である技量にうなずく。

「うん、じゃあこっちは装具もつけていることだし、遠慮無く打ってきていいよ」

「……はい！」

様子見、という配慮じみた最初の打ち込み。しかし、それは片手で軽やかに振るわれ

る三尺棒にことごとく受け流された。

「遠慮してたら私も君も稽古にならないよ？じゃあ、私からも行くからね」

そう言った途端、退役軍人の握る三尺棒がスズメバチの羽音のような唸りを上げて襲い掛かってくる。そのくせ、その主はどこにも力みはなく、まるで牛追い杖を振るう牛飼いのような気楽さで、一撃必殺の疑いもない打ち込みを繰り返して出る。

「相手の勢いにのまれちゃ駄目だよ、ちゃんと間合いをはかって、相手の姿全体を視界に入れるんだ」

ついさつき、自分に言われたことと同じ言葉。踊り翻るような三尺棒の襲撃に、若い戦士は必死にそれを迎撃し、打ち返す。その様子は、まるで剣だけを狙っているような打ち込み。半闇狩人は、初めて見る師の剣技に、瞬きも忘れて見入っていた。

「もつと手首を意識して使って、肩や肘ばかりに頼ってちゃ駄目だよ」

ほぼ素立ちに近い体勢からつかつかと歩み寄りつつ、旋風さながらの連撃が空気を振動させるような唸りを上げて飛んでくる。一方、若い戦士は、足運びは言うに及ばず、全身を総動員して懸命に防御、反撃を繰り返すが、ことごとく三尺棒の迎撃に払いのけられる。

「だから、相手の勢いに飲まれちゃ駄目だよ。君の手首をもつと頼りにしてごらん、大丈夫、君ならできるんだから」

激励の言葉をかけながらも、その勢いはまったく緩まない。そして、左の肩口を狙う打ち込みに、若い戦士は、咄嗟に手首を軸にして柄を梃子のように押す。その途端、劍は軽やかに旋回し三尺棒の打撃を受け流した。そして、そのまま翻るように切つ先を旋回させ、反対側から襲い掛かる打ち込みも辛うじて受け流すことができた。

急に、劍が軽くなつた。そう思う間もなく、次々と打ち込まれてくる三尺棒の切つ先。それでも、先ほどとは全く違う劍の感触を実感しつつも、懸命に打ち込みを防ぐ。

「そうそう、劍の重心を意識してね、劍は盾にもなるからね」

嬉しそうな退役軍人の声、そして、彼が振るう三尺棒の勢いが増した。

(そんな……これ以上もたないっ……!)

「慌てること無いよ、さつきとやることは一緒だからね」

劍の重心、それを意識しつつ手首を返し、打ち込みが来るであろう方向を意識した途端、自分の劍が、退役軍人の振るう三尺棒に吸い寄せられるようにその打ち込みを阻止する。続いて、右、左、正面、そして、大腿を狙う低い打ち込み。

それを受け止めると同時に、三尺棒を押しつけるように劍を滑らせながら地を蹴り、一気に間合いを詰めると同時に体当たり。そして、ほんの一瞬体勢が揺らいだその刹那、若い戦士の劍は、逆袈裟懸けに退役軍人を薙ぎ払った。

「おお怖い怖い、今のは危なかつたねえ。でも、君の一本だ」

鎧に当たる前に体を退き、その切っ先の直撃をかわしたものを、退役軍人は、本気で肝を冷やした様子で三尺棒を収め、投了の意を示した。

「さすがだねえ、なかなかやるじゃないか。お見事、お見事」

「は……はい、ありがとうございます……！」

嬉しそうな退役軍人の声に、若い戦士も肩で息をしながら、どうにか笑顔でうなずいた。

「今の流れはとてもいいよ、こういう時は、脇の下や腕の付け根を狙うといいよ」

退役軍人は、上機嫌で若い戦士に歩みよると、その肩に手を置いて何度も頷く。

「せっかくの決め技なんだ、最後の瞬間こそ相手をよく見て、確実に仕留められる一撃を見極めようじゃないか」

「いやあ、なんか今日は楽しかったねえ」

ギルドの酒場、少し早いですが、退役軍人の一党は一角に席を構え、それぞれ鼻肩の飲み物や料理を注文していた。そして、今日は余程楽しかったのか、彼の持つジョッキには珍しく、牛乳ではなくエールがなみなみと注がれている。

「こんな毎日なら、ずっと続けばいいのに」

とても上機嫌、まるで、娘や息子の成長を喜ぶ父親のごとし。

「ほらほら、君たちも遠慮しないで、好きなものを頼みなさい」

「それより先生、教えてほしいことがあるんですけど」

「うん？なんだい？」

「その……先生は、どうして剣を使わないんですか」

「場所塞ぎだし、手入れも大変だからねえ。今のところ、使うつもりはないよ」

いつもの調子の、本気なのか冗談なのかわからない言葉。しかし、彼が愛用するフランジメイスとて馬鹿には出来ない。あの破壊力の権化のような得物が、あの勢いのまま襲い掛かってくるとしたら、鎧や盾の上からでも骨身を砕かれるであろうことは間違いない。

「お師匠様、もしよかったですら、わたしにお手入れをさせてください！村にいた時は、父と村共同の武器の管理とかもしてましたから、剣や槍のお手入れだってできます」

半闇狩人の言葉に、退役軍人は目を細めながらうなづく。そして、村でも相当の働き者であったのだろう、と思うと同時に、彼女の父が、娘を単なる労働力としてではなく、生るための術を教え、与えようとしていたのではないか、という思いが浮かぶ。

「そうなのかい？それは頼もしいねえ。もし機会があつたら、その時はお願いするよ」

「はいー」

「でも、今はこれが気に入っているからねえ」

そう言いながら、退役軍人はフランジメイスの柄を確かめるように手を置く。

「それに、私には奥の手があるからね」

「奥の手……?」

「うん、これだよ」

楽しそうに答えながら、退役軍人は、左手の小盾の裏から見慣れぬ武器を取り出す。それは、この辺境では話半分にししか伝わっていない武器、鉄砲。火縄や火打石で撃発し、鍛造した鋼の銃身から鉛の弾丸を撃ち出す。そしてそれは、50歩先の重装騎士を一撃で打ち倒すとも言われた、錬金術師の呪法・化学の知識と鋳人の冶金・工作技術の融合とも言える武器。

「お師匠様、それは……?」

「うん、これは、なんでも撃ち抜く魔法の鉄砲さ」

「てっ……ぼう……?」

「うん、火薬の力で金属の礫を飛ばす武器だよ」

未だにピンとこない表情の半闇狩人、そして、若い戦士は驚きに満ちた目でフリントロックピストルを凝視する。

「先生、それにしてもこんな珍しいものをどうやって……」

「うん、退職金代わりにもらってきたんだよ」

「そ、そんなんですか……」

これもまた、嘘か真か、なにぶん、いつもがいつもだけに、どうにも判断つきにくい。「まあそうだね、でも、これの売りは、悪魔の呪いを鑄込んだ弾丸なんだよ」

「悪魔……ですか……?」

悪魔、というただならぬ言葉に、半闇狩人に戸惑いの色が浮かぶ。

「そう、この弾丸を使えば、弾の届くところにいるなら必ず命中するよ。ただし、射手の命を引き換えにしてね」

「へえ……えっ! ええっつ!」

退役軍人の言葉が浸透しきった時、半闇狩人は文字通り目の色を変えて彼に詰め寄った。

「駄目です! そんなの使ったら駄目です! お師匠様!!」

「いやいやいや、そんなに怒らなくても。冗談だよ、冗談」

「もつと悪いですっ! 絶対嫌ですからね! 約束してください! 絶対使わないって!!」

「わかったわかった、私が悪かったよ、絶対に使わないから、安心しなさい」

「本当に、絶対に、絶対にですからねっ!」

血相を変えて抗議する半闇狩人の様子に、退役軍人は内心喜びにうなずく。以前なら、言いたいことがあってもただ黙ってうつむいてばかりだったこの子が、こうして感

情を真つ直ぐにぶつけてくれるようになった。

少しずつ、ほんの少しずつではあるが、ゆっくりと、しかし確実に、彼女は無くしたものを拾い集め直している。そして、いつか自分の足で立ち、そして歩んでくれれば、それは自分にとって、なにものにも代えられない喜びと誇りになるだろう。

「うん、約束するよ。すまなかつたね、心配させてしまつて」

「は、はい……」

やや納得がいかなさそうではあるが、とりあえず矛を収めた半闇狩人の様子に、退役軍人は、今のは迂闊だったねえ、と、酔いと浮かれ過ぎでつい口をすべらせてしまった事を反省しつつ、ふと、まだこの場にはいない面子を思い出す。

「それはそうと、尼僧殿はまだこないのかな？」

「そういえば……」

一同は、まだこの場に巡礼尼僧の姿がないことに気付く。

「宿坊には、ちゃんと伝てをお願いしたんだけどな……」

若い戦士は、なんとも気まずそうな様子で周囲に視線を向ける。そんな彼に、退役軍人は気遣うように声をかけた。

「いいよいいよ、尼僧殿もいろいろすることがあるんだろうしね。まあ、ここは慌てず待とうじゃないか」

お坊さんと言うのも、大変だねえ。そう気楽に呟きながら、退役軍人は、久方ぶりに口にするエールの味を堪能する。あいかわらず、兜も面頬もつけたまま、器用なことに。「そう言えば先生、食事中でも兜や面頬つて、食べづらくないんですか」

もう何度目の質問だろうか、誰もが一度は必ず聞く質問に半闇狩人が苦笑するそばで、退役軍人はいつもの答えを返してよこす。

「そりゃ、この方が冒険者らしくてカッコいいじゃないか。それに、酒場とはいっても、子供達も食事に來るんだ。若い子が私の顔を見て、食欲がなくなったらかわいそうじゃないか」

「そんなに悪いものじゃないと思いますけど……なんていうか、俺の知り合いにもそう言うのがいますけどね」

「ああ、ゴブリンスレイヤー君のことかい？」

「え？ 知ってるんですか？」

「うん、まだ会ったことはないけどねえ」

そう答えながら、退役軍人は酒場を見渡してみるが、食事中に兜や面頬で顔を覆っている冒険者はいない。もつとも、聞くとところによれば、仕事が終わったらさっさと家に帰ってしまう性分らしかったが。

「一度、会っていろいろ話を聞いてみたいとは思っているんだけどね」

「いや、多分、あんまり会話にならないと思いますよ。聞かれたこと以外は、あまりしゃべらない奴ですから」

「そうなのかい?」

「まあ、ゴブリンの話振ったら、食いついてくるというより、聞いてもないことまでいろいろとしやべりだしますけどね」

「そうなのかい、ゴブリン退治に詳しいというわけなんだね」

「つていうか、ゴブリン専門ですよ。でも、それでも助けられた村や人はかなりの数になるんです、それで、銀等級にまでなつたわけですからね」

「なるほど、それは頼もしい話じゃないか。でも、実を言うとね。私は、ゴブリンは苦手なんだよ」

「え、そうなんですか?」

「そうとも、あれほどやりにくい相手は、そうそういないよ」

かつて、地下迷宮に根城を構えた邪教の一团に対し討伐を仕掛けた時のこと。その時尖兵に使われていたのは、無数のゴブリン。確かに、一匹一匹は物の数ではない。しかし、徒党を組んで襲い掛かるだけならまだしも、人間が言う所の『良心』というものが全く存在しない連中。

考えもつかない、いや、普通考えついても実行をためらうような悪辣な行動を、臆面

もなくやつてのけるそれは、言い換えれば、悪意の塊。あれなら、まだ山賊の方が可愛げがある。

彼らを見てみると、人の醜い面だけを練り固めたような存在に、まるで自分の内面の闇を見せつけられるような思いになる。ゴブリンと言う怪物に対して感じる嫌悪感は、すなわち、自分自身に対する嫌悪感といつても過言ではないのだろう。

「本当に、嫌なものだからねえ」

ぼやくような退役軍人の様子に、半闇狩人は、かつて、亡き父が強く戒めた言葉を思い出す。

“逃げるゴブリンは殺せ、逃げないゴブリンは訓練されたゴブリンだから、殺せ”

ゴブリンの4、5匹程度の徒党が村に現れた時、自警団のひとりとして討伐に出た父は、それこそ、一匹残らず射殺した。逃げようが背を向けようがおかまいなしに。その時、普段は温厚だった父が、厳しい表情で自分に言い聞かせた言葉。

あれは、人からすべてを奪い取る。財産も、家族も、命も、尊厳も。

自分の欲望や情動を見逃すものが、ついには膨れ上がったそれに狂わされ破滅するよう。あれを見逃せば、次にまみえる時は手の付けられない猛毒となって現れる。兵役時代、戦場で何度も相手にしたとは聞いていた。それでも、あまり多くは語ろうとしなかった。しかし、普段の父からはまず出てこない言葉と表情は、いまでもはつきりと記

憶に焼き付いている。

「けど、そういう若者がいるのは、本当に頼もしいことだよ」

退役軍人は、静かにうなずきながら、ジョッキのエールをぐびりと飲み込む。

「大したことはないから、と甘やかしたり、放っておいたりしてしまうのが人の性さ。でも、それをしない、できない、というのは、簡単なようで難しいからねえ」

独り言めいた言葉の後、退役軍人は気を取り直すような口調で、半闇狩人や若い戦士に食事をすすめる。

「まあ、そんなつまらない話はこのくらいにしようか。それに、彼にもそのうち会う機会もあるだろうしねえ」

と、その時。

「黒騎士様、皆様、遅れてしまい、大変申し訳ございませんでした」

穏やかで涼やかな、喧騒の中にあつてもなお澄んだ声。巡礼尼僧は、会席に遅れたことを一堂に詫びるように一礼する。

「やあ、尼僧殿。待つていたんだよ、さあ、座つて座つて」

「はい、ありがとうございます」

頭巾の下からこぼれた栗色の髪がふわりと揺れ、あの心地良い空気が広がる。それはまるで、晩秋の夕暮れ時、収穫を待つ穀物畑に佇んでいるような。はつきり言葉に出す

のは恥ずかしいから言わないが、半闇狩人は、一緒にいてどこか心安らぐような、そんな巡礼尼僧が好きだった。

「お坊様、どうぞ、こちらへ」

「ありがとうございますね、狩人様」

席をすすめる半闇狩人に笑顔を向けながら、静かに腰を下ろした巡礼尼僧は、今日も相変わらずな退役軍人の様子に苦笑する。

「今日も、兜をお召しになっているのですね」

言葉とは裏腹に、巡礼尼僧はくすくすと笑みをこぼす。

「まあ、わざわざ見せるほどの顔じゃあないしねえ」

「なにをおっしゃいますやら、黒騎士様のお顔はご立派でございますよ。誇りこそすれ、恥じるものなどございませぬ」

「そ、そうかい?」

「ですが、黒騎士様。高位の術師なら、傷跡を癒やし消し去ることも可能でございます。お気になさるようでしたら、どうして治療をなさらないのでございますか?」

「うん?まあ、そうだねえ……」

巡礼尼僧の問いかけに、退役軍人はしばらく考えこむ素振りを見せた後、いつもの調子で答える。

「だって、この方が格好いいじゃないか。歴戦の戦士みたいだね」

そんな退役軍人の言葉に、巡礼尼僧はころころと鈴を転がすような声で笑う。

「おっしゃるとおりでございますね」

どこか困ったように、しかし、柔和な笑みを浮かべる巡礼尼僧の顔を見上げ、半闇狩人は、ほうと小さくため息をつく。

会ってそう間もないが、僧侶にふさわしい穏やかな人柄は、心地よい安らぎさえ感じてる。綺麗な人だ。同性の目から見ても、どこか惹かれるものがある。僧侶として、冒険者として、これまで様々な積み重ねがあつて今の彼女があるのだろう。

亡き父からもある程度習っていたが、退役軍人も読み書き計算を教えてくれたおかげで、大抵の文字には目を通すことができたし理解もできた。その上で特に、巡礼尼僧が読み聞かせてくれる神々の逸話。自分で読むのは勿論のこと、信仰や教義抜きで純粹に物語として彼女が語ってくれる時間は、半闇狩人のささやかな楽しみの一つになっていた。

「どうなされましたか、狩人様」

にっこりと笑いかける巡礼尼僧に、半闇狩人はもじもじとうつむきながらも、意を決したように彼女に問いかけた。僧侶である以前に、どうしたら、そういう風に人として美しくあれるのか、聡明であれるのか。今はまだこんなだけで、いつかは、貴女のように

になりたい――

「私めも、狩人様のことを、美しいと思っておりますよ」

巡礼尼僧は、半闇狩人へにこりと笑いかける。

「姿形が良いから、美しいのはございません。美醜など、時の移ろいによつていくらでも変わるものがございます。本質が美しいからこそ、愛され、外側も美しくあるのでございます。狩人様、ゆめお忘れなきよう。姿とは心の映し鏡。願わくば、その曇りなき心、いつまでも大切になさってくださいませ」

「は……はい！ありがとうございます、お坊様……！」

巡礼尼僧の言葉に、半闇狩人は笑顔で頷く。しかし、何かを思い出したように眉根を寄せると、母親にとりすがる娘のような勢いで訴えかけた。

「あつ！それより聞いてください、お坊様!!」

「いかがなされましたか、狩人様？」

「お師匠様つたら、ひどいんです！」

やはり、稽古の時、鯖折りをかけてしまった事を怒っているのだろうか。半闇狩人の切実な声に、退役軍人はひやりとしながら身を固くする。

「お師匠様、撃つたら自分が死んでしまうって鉄砲を使うって言うんです！」

「まあ」

「いや、そつちなのかい!」

「……そつち、とはどういうことでございますか、黒騎士様?」

「え? ああ、いや、それはだね……」

うろたえる退役軍人をよそに、巡礼尼僧は半闇狩人の必死の訴えに静かに耳を傾ける。そして、半闇狩人の話を聞き終えた彼女は、静かにうなずきながら合掌する。

「なるほど、さしずめ、魔弾の射手……で、ございますね」

巡礼尼僧は、言葉の意味をかみしめるように小さく呟く。そして、合掌を解くと、静かに退役軍人に向き直った。

「黒騎士様、狩人様の御心配、ごもつともでございますよ」

「いや、本当に申し訳ない」

「黒騎士様、私めは責めているわけではございませんよ。私めも、このように楽しい席で、雰囲気壊すようなことはいたしたくありません」

穏やかな言葉と共に合掌しつつ、巡礼尼僧は退役軍人に一礼する。

「冗句であれ真であれ、私めも、黒騎士様のお命に係るような事は望みませぬゆえ、どうかそのような寂しいことはおっしゃらないで頂ければ、幸いですよ」

「うん、私も軽率なことを言ってしまった、本当に申し訳なかったと思ってるよ」

「はい、ですけど、もうお気になさらないでくださいませ、黒騎士様」

巡礼尼僧は、穏やかに笑いながら、退役軍人の謝罪をやんわりと制止する。

「それはそうと、黒騎士様？ここの酒場、チーズと茸の米雑炊が大層美味しいと聞き及んでおりますよ？」

「おや、そうなのかい？それじゃ、ひとつ注文してみようか！」

「ええ、よろしくお願い申し上げます」

ようやく戻ってきた穏やかで温かい晚餐の空気、退役軍人は、安堵の気持ちとともに、
獣人女給を呼び止めた。

下水道の獣

「さあ、みんな準備はいいかな、忘れ物はないね？」

「はい！お師匠様！」

まるで遠足に出発する教師と生徒のようなやりとりに、巡礼尼僧と若い戦士は優しく苦笑する。それでも、彼ら一党の背囊には弁当やお八つなどではなく、探索用の装備資器材が各々の役割に応じて納められ、その上に複数の麻袋に仕分けられた毒餌を積んだ背負子を取り付けられた。

退役軍人の復帰、そして、ギルドから要請されていたものの、一党の頭目である彼の故障のため一時延期となっていた下水道調査。あれから一週間ほど延びてしまったが、その分準備は万端。装備にしても、面子の仕上げにしても。後は、慎重に事を運び、先を焦らない。

「それにしても尼僧殿、貴重な奇跡をこんなことに使わせてしまって、本当に申し訳なかつたね」

槍使いが差し入れた薬草もそうだが、巡礼尼僧が治癒の奇跡と整骨の施術を時間をかけて、そして、入念に施した甲斐あって、魔女の一撃で傷めた腰痛はすっかり追い払

われていた。

それにしても

巡礼尼僧は、治療のための施術を施す際に見た、退役軍人の全身に刻まれた傷痕を思い出す。歴戦の証明、という事でもあるのだろうが、補助のため共にいた半閼狩人が思わず息を呑むほどの、無数の火傷や創傷、裂傷の痕。

まるで、魔神王の使徒と戦ったが如し、で、ございますね。

半閼狩人に対しては、やれ酔って焚火の上で転んだだの、足を踏み外して階段から転げ落ち床板を突き破っただの。ろくでもない話ばかり。

本当に、不思議な御仁でございます。巡礼尼僧は、この、気のいい、しかし、どこか掴みどころのない男を前に、その時のことを思い出しながらふつと笑みを漏らす。

「なにをおっしゃいますか、黒騎士様。お役に立てればと願ひこそすれ、迷惑と思つたことなどございませぬ。それに、狩人様もよくお力をお貸ししてくださいましたゆえ、今日この日を迎えられたのでございます」

「そうだね、本当にそうだったね」

そして、退役軍人は若い戦士に向き直ると、丁寧に一礼した。

「君も、若い子の世話で忙しいだろうに、力を貸してくれて感謝するよ」

「よしてください、先生。これじゃ、まるで戦争に行くみたいじゃないですか」

苦笑交じりにこたえる若い戦士に、退役軍人は嬉しそうに頷く。

「そうだね、でも、まるで冒険者みたいだ。やつと夢がかなった気分だよ」

「いや、もうだいぶ前から冒険者じゃないですか」

「ハハハ、いや、失敬失敬、たしかに、そうだったね」

「それはそうと、先生。やつぱり、剣は使わないんですか？」

いつもの装備に身を固めた退役軍人、その腰には、愛用のフランジメイスが一本。

「大鼠や黒蟲なら、これで十分だよ。それに、君たちが付いているからねえ、大丈夫さ」

「そうですか……」

少し残念そうにうなづく若い戦士、あの剣技を振るう退役軍人の姿を見てみたかった。凶々しいとは判っている、剣士の端くれとして正直な思いではあるものの。

「それよりも君、ちゃんと兜は持ってきただろうね。冒険者として顔売りたいというのはわかるけど、頭の守りだけはしっかりした方がいいよ」

「ええ、だからこう、探して引つ張り出してきましたよ」

若い戦士は、腰の帯革に提げていた兜を外して退役軍人に見せる。あまり使われた形跡がないようだが、手入れはされている。まあ、及第点か。

「うん、うるさいことをいうようだけど、礫一個頭に当たっても、人間というのは途端に弱ってしまうからねえ」

戦場での経験から出た言葉、それに応えるように、半闇狩人も、被っている革帽子の顎紐を確かめる。見た目大きなキャスケット帽に似たその中には、彼女の頭の形に合わせて削ったコルクの塊が詰め込まれている。

さすがに、メイスや刀剣の一撃には厳しいが、棍棒や礫の一発くらいなら気が遠くなることもない。特に頭の保護は譲らなかつた退役軍人が、女の子なんだから可愛らしい方がいいじゃあないか。そういつて、奮発してくれた革帽子。

「それに、あんな暗がりの中まで、わざわざ顔を見に来る人なんていないよ」
退役軍人は、なぜか楽しそうに笑う。

「顔は、人がいるところで存分に見せたらいいからねえ」

まあ、それでも、私みたいにみつともない顔になってしまっていたら、台無しだからねえ。そんな冗談を交えながら、退役軍人は気楽そうに笑う。

「さて、それじゃあみんな、行こうか」
とその時。

「お弟子ちゃん、お弟子ちゃん」

いざ出陣、その時半闇狩人に声をかけたのは、獣人女給。包みを抱えて、ぱたぱたと厨房から駆け寄ってくる。

「あ、はい、なんででしょうか」

「これ、あたしからの差し入れ。お腹すいた時とか、みんなで食べて？」

獣人女給が差し出した、油紙を何重にも巻いた包みと、蜂蜜の小瓶。半闇狩人の鋭敏な感覚は、微かに漂う香りから包みがパンケーキであることに気付き、ふわりと表情を明るくする。

「ありがとうございます、みんなでいただきますね」

「うんうん、それじゃ、気をつけて、いつてらっしゃい」

「はい！いつてきます！」

「この辺でいいですか、先生」

「そうだね、お願いするよ」

退役軍人の一党は、地下下水道の最深部へ向かって順調に歩みを進める。時折、大鼠や黒蟲の群れと遭遇することはあっても、後列からの半闇狩人が射かける矢で漸減、そして、それをかいくぐってきたものは、退役軍人と若い戦士の連携で問題なく駆逐していく。

今の所、幸運にもあの時の山津波のような大群にはまだ遭遇していない。しかし、そうなった場合は背負子ごと毒餌を放棄し、全力で撤収という段取りは徹底してある。無理して強行突破する必要はないし、理由もない。

そういう時は素直に帰ろう、帰ればまた来れるからね。と、いつもの調子であつた。「やはり、みんながいてくれると違うねえ。これなら、なんとか全部置いて帰れそうだよ」

「ですが黒騎士様、この人数で事が進んでいるということは、そうでなければ危険という事ではございませんか？」

「やつぱり、尼僧殿もそう思うかい？」

巡礼尼僧の問いかけに、退役軍人はだいぶ軽くなつた背負子の感触を確かめながら応える。そう、確かに、彼女の言う通り。

ここまで順調にこれたのは、巡礼尼僧や若い戦士の加勢もそうだが、入念に計画を練つた上でのことでもある。これが、何も知らない判らない、素人同然の若者が1人2人でうろちよろすればどうなるか。

「——やつぱり、こうなつてしまふよねえ」

退役軍人は、小さく肩を落としながら嘆息しつつ、石畳の上に散乱する白い欠片と衣服の切れ端に目を落とす。そして、手分けして集めようと動いた半闇狩人と若い戦士を一旦制止すると、自ら石畳の上に散らばるそれを観察する。

その遺骨には鼠の牙で齧られたような跡が残るが、それ以上の損傷はない。大鼠以上の牙を持つもの、そして、刀剣や鈍器。それらによるものではないと判断し、退役軍人

は半闇狩人たちを招き呼ぶと、その散らばる中から協力して認識票を探す。

「申し訳ございません、この方は、他のどなたかのものでございます」

ようやく見つけた白磁の認識票、巡礼尼僧に確認を求めると、そこに刻まれた名前を見て、彼女は違うと言うように静かに首を振り、文字通り、ここに散った冒険者へ合掌を捧げる。

(しかし、妙だね)

確認の済んだそれら遺骨や衣服、遺品の破片と共に、認識票を麻袋に納めながら、退役軍人は心の中で呟く。こんな所で、ひとり寂しく命を落としたのだ、無念でないはずがない。なのに、動屍體(ゾンビ)にも食屍鬼(グール)にもならず、こうしてこの場で朽ちていくに任せたという事は。

——誰かが吊ったからではないか。

ふと、退役軍人の頭をかすめたもの。しかし、それを口にすることはない。それを皆に聞かせるに値する根拠を示せない以上は。

「君、申し訳ないけれど、帰りに必ず迎えに来るからね、いましばらくここで待っていておくれ」

小さな麻袋に納めた遺骨に向かい、まるで生あるものに対するように語りかけた退役軍人は、壁際に安置した遺骨に黙祷した後ようやく立ち上がる。

「お師匠様……」

「大丈夫だよ、待たせて済まなかったね、さあ、それじゃあ、先に進もうか」

気遣うような半闇狩人に、退役軍人は努めて明るく応えながら先を促す。そして、彼の一派は再び地下下水道の奥へと進んでいく。

もう既に、退役軍人が描き上げた地図の上で未到達とされる領域に到達している。そして、時折立ち止まりながら、退役軍人はギルドが配布していた地図と、自分が描き直している地図とを見比べながら、これまで進んできた道順をこれまで以上に慎重に確認する。

「まさか、こんなに広いなんてねえ。いくらなんでも、ここまでは思わなかったよ」

長年の放置がたたったか、石積みが崩れ先に進めない場所があれば、逆に、崩れた壁の向こう側に、確認されていない通路らしき空間が現れたりする。そも、こんな深くまで潜る必要もないから、把握されていないのは当然なこと。

元々下水道掃除とは、大鼠や黒蟲が抜け出し町に入り込まないよう駆除すればいいものであって、こんな深部まで探索することは求められていない。

「これは、今回は範囲を絞った方がいいね。闇雲に進んでいては、いざという時素早く戻れなくなってしまうよ」

小さな蠟燭の明かりの下で、ギルドの地図と自分が作成した地図を見比べながら、退

役軍人は呆れたようにつぶやく。そして、それを覗き込む半闇狩人や、若い戦士も同様に賛意を示してうなずいていた。

なんだか、嫌な予感がするねえ

退役軍人は、思った以上に不穏な空気を漂わせはじめた坑道の中で、微かに表情を陰しくする。自分に限ったことではないだろうが、悪い予感に限って良く当たる。これは、現役時代から続いた、あまり自慢できない特技。しかし、その亡霊の囁きじみた声に従い続けてきたことで、どうにか今まで生き延びてこられた。

「黒騎士様、毒団子もほぼ置き終わったことでもありますし、今日の所は、そろそろ打ち切りになされては？」

「そうだねえ……」

巡礼尼僧の意見具申にうなずきながら、退役軍人は、目の前の崩れた壁の石積みを乗り越え、汚水が落ちていく急傾斜を注意深く見おろす。

こんな場所、描いてなかったじゃあないか。

退役軍人は、その、あまりにも不穏な様相を醸し出す急傾斜を見やる。ざあざあと音を立てて、漆黒の深淵へと流れ落ちていく汚水。その先は、見通せないほどの闇。

それでも、建築当時には管理すべき施設があったのか、そして、この下にさらに何らかの施設があるのか。かなりの急傾斜ではあったが両側に通路、と言えなくもない石畳

の坂が、カンテラの蠟燭の灯に浮かび上がるのが辛うじて見えた。

元は、これほど無防備に開かれた場所でなかったであろうことは、崩れた石積みにもれかけた小部屋らしき空間の様子から伺えた。経年劣化や湿気で壁が崩れ、剥き出しになったのであろう排水口。恐らく、この先にあるものに、今回の異常事態の原因があるのかもしれない。

しかし、今は一党の面子を連れて降りるつもりはない。読みが甘いとのそしりを覚悟で言えば、こんなに早く対象を見つけられるとは想定外だった。

それに、文字通りここが下水道の最深部へ至る道の一つであろうことは、状況から見ても容易に想像できる。この場所を見つけただけでも十分な成果と言えるだろう。退役軍人は、そう自分を納得させることにした。

「そうだね、尼僧殿の言う通りだよ。今日の所は——」

帰ろう、そう言いかけた退役軍人の表情が険しく吊り上がる。そして、微かに震えを帯びた半闇狩人の声。

「お師匠様、なにか大きな足音が——」

彼女の声は、暗闇の中からゆっくりと近づく凶暴な気配にかき消される。まだ距離は十分離れているはずなのに、これほどまでに強烈な瘴気と怒気の持ち主とは何者か。

「みんな、背負子は捨てて。君と尼僧殿は下がちなさい」

退役軍人は、背負子を捨て、フランジメイスを握り直す。そして、同じように、他の面子も残った毒団子の袋や背負子を捨てる。そして、半闇狩人と巡礼尼僧を背にした退役軍人は、若い戦士と防壁を造るかのように武器を構えた。

「お師匠様……あそこの角の向こう、来ます、あと20歩ほどです……！」

緊張する声と共に半闇狩人が指さす、通路の曲がり角。漂う瘴気と凶暴な気配を漂わせ、闇の中からゆつくりと歩み現れた獣の影。

カンテラで保護されているにもかかわらず、蠟燭の火が怯えるように揺れる。そして、辛うじて届いた明かりに反射する幾つかの光。

(まさか、悪魔犬の群れが——?)

まさに不覚、そして迂闊。ありとあらゆる状況を想定と言って置きながら、まさか、町のすぐ真下の地下下水道に、こんな危険な怪物がいたとは。

相当光を嫌悪しているのか、蠟燭の光が届く距離に近づこうとしない。しかし、紅く光る無数の目は、統制の取れた動きでこちらの様子を伺い続けている。

(こんなことなら、彼も連れてきてあげればよかったねえ)

退役軍人は、麻袋に納めて安置してきた遺骨を思い出す。これでは、撤退の際に回収していく余裕はない。こんな時にできえ、退役軍人の思考は高速で回転し、これまで

辿ってきた道筋、そして、記憶している構造を次々と呼び出しては、一党の戦力と装備でこの状況から悪魔犬達を出し抜いて、地上まで脱出する順路を組み立てる。

「お師匠様！あれは——！」

「UUUUUUUUUUUUUUUUUUUU!!」

何かに気付いた半闇狩人の声は、暗闇の中から轟く咆哮に打ち消される。そして、ついに下水道の獣が、退役軍人たちの一党を攻撃目標と認識した。

凄まじい咆哮と共に突進してくる獣、それは、闇に紛れて姿は見えない。しかし、牛や馬よりも大きい、いや、それ以上であることは疑いようもない足音と咆哮。そして、暗闇の中を猛然と突進してきた獣は、山津波のような勢いで退役軍人たちを蹴散らし、跳ね飛ばすように駆け抜けた。

刹那、小さい悲鳴と水音。

「いけない!!」

水路に落ちたのは、半闇狩人と巡礼尼僧。軽装で目方が軽い分、下水道の獣の体当たりには抗いようもなく、流れに巻かれ排水溝に飲み込まれた気配。そして、獣は30歩ほど先で立ち止まり、再びこちらに向けて凶暴な怒気を吹きつけてくる。

「——やっぱり、君の言うことを聞いておけば良かったよ」

「先生……!!」

「気をつけたまえ、アレは——」

下水道の獣の正体を告げようとしたその刹那、再び凄まじい咆哮が轟き渡る。暗闇の向こう、彼らの退路に立ちふさがる下水道の獣。辛うじて見通す姿に、退役軍人は小さく歯噛みする。

こうなったら、自分達も排水口に飛び込むしかない。しかし、そこで追撃を受ければ、ふたりとも行動不能、最悪の場合は——

ここは自分が残り、先に彼を生かせるべきか。しかし、放水口の先が安全である保証もない。どうする、しかし、ここでとどまって、彼女らふたりを見殺しにするなど到底できない話。それに、ここでこの怪物を相手にしても無事でいられる保証はない。いずれにせよ選択肢はない。決断し、若い戦士に声をかけようとしたその時、

「先生、行つてください」

「何を言ってるんだ、君は！あれは——！」

若い戦士は愛用の剣を構えつつ、いたずらっぽく笑いながら退役軍人に先を促す。

「大丈夫です、俺もすぐ追いかけますよ」

「……わかつたよ、でも、時間稼ぎなんて考えないで、君もすぐ来るんだよ」

「わかつてます、早く行つてあげてください、あの子、きつと待ってますよっ」

「すまない、それじゃあ、先に行つて待つてるからね！」

若い戦士の覚悟と決意、しかし、退役軍人は、それでも彼に呼びかけると、意を決したように深淵に続く急傾斜へ身を躍らせた。

数えて300、それまでは絶対に踏みとどまる。

若い戦士は、可能な限り油断なく剣を構えながら、暗闇の向こう、下水道の獣と対峙する。もちろん、退役軍人に言われた通り、ここであれを倒す努力はしない。

ほんの一瞬、蠟燭の光が届き、目に映った下水道の獣の姿。あれが見間違いでなければ、どう逆立ちしても、自分の力も剣も届きなどしない。先生が警戒するのも当然だ、あんなバケモノ、魔法の武器を振るうか、銀等級でもなければ対処の仕様もない。

だから今は、自分にできることをやる。

(63 ————— 78 ————— 84 —————)

頭の中でゆっくり数える数字、それは、構えた剣の呼吸、足運び、体裁きのリズムと調子が重なり、やもすれば乱れそうになる呼吸や、足元を野兎のように飛び跳ねる恐怖を鎮めていく。

「UUUUUUUUUUUUUUUUUU!!」

再び、鼓膜をつんざくような咆哮。そして、下水道の獣が突貫してくる。

(94 ————— 101 ————— 120 ————— !)

硫黄の臭気と共に迫る鉤爪、それに対して、構えた剣を振るい迎え撃つことはせず、咄嗟に手首を返し、腕全体を覆う盾のように構えた瞬間、火花を上げてその上を獣の鉤爪が滑り抜けていく。

(132 ———— !?)

視界の隅に閃いた光、そして、鋭く迫る生臭い臭気。若い戦士は、考えるよりも先に剣を翻した瞬間、凄まじい衝撃が両腕を振動させ、弾き返された剣が自分の額を強打する。

(145 ———— 159 ———— 170 ———— !)

兜がなかったら即死だった。衝撃で滲んだ涙を、素早く目を瞬かせてかき消しながら、若い戦士は排水口の位置を確かめながら剣を構え直す。いや、もう剣を振るう必要はない。どのみち、もうこれ以上ここに留まるつもりはない。

(193 ———— 209 ———— 213 ————)

相当地に光が嫌いなのか、下水道の獣は、相変わらず怒気をまき散らしながらも、光源を警戒し嫌悪するかのようになり、一撃で仕留められる間合いを図り続けている。

無理もない、あれが奴なら、どんなに小さな光でも近寄りたくはないはずだ。特に、祈る者の世界から持ち込まれ、祈る者の手によって灯された光には。

いずれにせよ、退役軍人が置いていった蠟燭のカンテラ。これが、今自分の命をつな

いでいる、まさに命の灯。

(240 ————— 258 ————— 271 —————)

逸る気持ちと恐怖を抑えつけ、同じ調子で数字を数え続ける。そして、若い戦士は、兜の緒を確かめ、油断なく剣を鞘に納めた。

(283 ————— 295 ————— !)

カンテラの明かりを互いに挟んで対峙しつつ、若い戦士はじりじりと足をにじらせる。そして、

(3 ————— 2 ————— 1!!)

頭の中の数字を数え終わった瞬間、若い戦士は、排水口へと飛び込んだ。

運がよかったのはここまでか。

暗闇の中で、激痛に疼く全身を横たえた若い戦士は、湿った石畳の上で荒く息を吐き続ける。とりあえず、あの獣は追ってこないようだ。しかし、自分も相当まずいことになった。骨は折れていないようだが体が言う事を聞かない。

飛び込んだ先が、石積みのお坂。しかし、思った以上の急傾斜に足を取られ、まるで崖を転がり落ちるように全身を強打し続けた強烈な衝撃と打撃。それでもまだ、アレと戦い続けるよりはましだったかもしれないが。

(畜生………！)

自分の不甲斐なさに、若い戦士は暗闇の中でぎりど歯噛みする。自分はいつもこうだ、肝心な時に、肝心な所で、ろくでもない骰子の目を引き当てる。そう、あの時も、そのせいで、岩喰怪虫（ロックイーター）の餌食となつてしまったあの子——
手足の感覚はなかなか戻つてきてくれない、こうしている時間はない、ないはずなのに。もう、ここで終わりなのだろうか。何の役にも立てないまま、ここで終わつてしまふのだろうか。

冗談じゃない。

若い戦士は、歯を食いしばり、指を、腕を、足を、ひたすらに動かそうとする。こんな所で終わつてたまるか、意地、執念、決意、それらが必死に全身を叱咤する。そして、わずかに動き出した右手。朦朧とする頭を懸命に巡らせ、意識をつなぎとめる。

こんなところで、終われるかよ！

声にならない叫び、咆哮、そう、こんなところで終われない。

そうだよ

ざあざあという水音に混じつて聞こえた声、とうとう幻聴まで。

きみは、いつもいっしょうけんめいだったもんね

かつての仲間の懐かしい声、もう一度聞きたかった、あの声。

できるよ、きみなら

幻覚でもなんでも構わない、あの時、あの少女野伏の分まで歩き続けると決めたのだから。

だから、こんなところで終わらない。

じわりと動き始めた腕は、なにかに導かれるように腰の雑囊へとたどり着く。そして、指先に触れたのは、あの時もらった薬草の小さな包み。

「——ありがとうございます、先生。いただきます」

水薬は、背囊ごとどこかへ飛んでいってしまった、探している時間もない。巡礼尼僧もない今、これだけが頼り。若い戦士は退役軍人に礼を言い、注意された通り、気持ち程度の一欠片を取り出して口に入れ、何度も嘔み締めた。

「っふお、えっつっ!」

途端に、恐ろしいえぐみが口の中の血の味を塗り潰し、思わず嘔吐しそうになる。しかし、懸命にそれを耐え、どうにか飲み込んだ。それと引き換えに、全身を苛む激痛が徐々に軽くなり、指先や爪先からじわりと感覚が戻ってくる。

「……………っつっ!」

そして、無意味に沸き起こってくる高揚感と熱量。心なしか、闇さえも多少は見通せる感じがする。話にしかなかったことはないが、これはもしかして、麻薬か覚醒薬と呼ばれる

れた劇薬なのかもしれない。しかし、こうして体が動かせる。今は、それ以上は望まないし、気にしてなどいられない。

「よし……これなら……これなら……！」

若い戦士は、何度も死線を共にした愛用の剣を支えにして、祈るような姿で身を起す。ぜいぜいと荒い息の下、若い戦士は、ふっと笑みを浮かべる。あの子が見ている、みんなが待っている、そうだ、こんなところで終われない、終われるわけがない。若い戦士は、ふつきれたような笑顔と共に歯を食いしばり、再び立ち上がった。

「先生、みんな……待っててください、今、行きます……！」

「お坊様、お坊様、だいじょうぶですか……！」

急傾斜の排水口から放り出され、水面に叩きつけられながらも、運よく意識も装備も失わずに済んだ。半闇狩人は、暗闇の中に浮かび上がる石積みの河岸まで泳ぎ着く。とにかく、水が冷たい。それに、防水してあるとは言え、荷物も心配だ。急いで岸に這い上がり、まるで狼のようにぶるりと身を振るわせて水気を飛ばし、半闇狩人は巡礼尼僧を呼ぶ。

「狩人様、こちらでございませう、狩人様」

暗闇の向こうから聞こえる声、よかった、そう思いながら駆け寄ろうとしたその時、ふ

わりと抱きとめられた。暗闇を通して伝わる体温と、優しい匂い。つい気が緩みそうになるが、今はそんな場合じゃない、と気持ちを引き締める。

「お怪我はありませんか、お坊様」

「私めは大丈夫でございますよ、それより、何も見えないのはいささか困りました。それより狩人様こそ、お怪我はございませんか」

「わたしは大丈夫です、それより、やはり明かりを……」

氣遣うような半闇狩人の言葉に、巡礼尼僧は静かにそれを押しとどめる。

「私めは大丈夫でございますよ、今は蠟燭一本とて貴重です。大丈夫、たどり着く先はひとつ、黒騎士様も戦士様も、じきにここにおいでになるはずです。明かりは、その時にいたしましょう。それに、私めも、だいぶ目が慣れてまいりました」

「わかりました、私が代わりに周りを見ます。それから、安全な場所を探しましょう」

覚悟と決意の言葉、こんな可愛らしい子が。暗闇の中で、巡礼尼僧は淡く笑う。こんな状況になっても、安全な場所、とは。

初めて見た時は、純朴だがどこかいじけた感のある、気弱な娘にしか見えなかった。しかし、彼女の目に宿る光。まだ弱々しいが、瞳の奥に確かに灯るそれは、なぜか心を捉えて離さなかった。そして、その小さな光は、あの男の導きに育てられ、今こうして輝きを増そうとしている。それが、ただただ愛おしい。

「ええ、お願いいたします、狩人様」

半闇狩人と巡礼尼僧が落ちた先は、下水道の水が最後にたどり着く巨大な石造りの溜池。巨大な鍾乳洞のような空間を利用したのか、周囲に石筍が並び立つその光景は古代神殿のよう。地表から伝わってきた雨水が天井から流れ落ち汚水を希釈しているのと、溜池が浸透樹としての働きをしているのか、地下下水道坑内のような不快感はさほどない。

おそらく、ここから石灰岩に吸われ、さらに深部まで染み込んでいった水は、やがて地上のどこかに流れ出ているのかもしれない。滝音のような落水の音と、時折流れる水滴の音。地下の空気は冷やややかだが、湿度のおかげでそれほど辛くはない。しばらくの間、半闇狩人と巡礼尼僧は、背囊から、敷物や天蓋に使う大きな帆布をひろげ、それぞれお互いに身を寄せ合うように被って冷気をしのぎつつ、退役軍人たちを待つ。

「お坊様、寒くありませんか」

帆布を巡礼尼僧の方に寄せながら、気遣う言葉をかけてくる半闇狩人に、巡礼尼僧は淡く微笑みながら、それをやんわりと押しとどめる。

「私めは大丈夫ですよ、これも、修行の内でございますゆえ」

「そう、ですか——」

でも、そう言いかけた半闇狩人の耳と、小さな鼻が、暗闇の空気が微かに運んできた

ものを察知し、鋭い警告を彼女の脳に伝えた。

「狩人様？」

静かに、しかし素早く立ちあがりながら、瞬時に記憶の片隅から蘇る醜悪な気配と臭い。なぜ、どうして、こんなところに、ゴブリンが——？

「——お坊様、走って！」

既にその時には、半闇狩人は巡礼尼僧の手を引き、暗闇の中を走り出した。微かに聞こえてくる足音や気配は20を下らない。こんな開けた場所で迎え撃つても一瞬で包囲され、袋叩きにあつておしまいだ。それでは、わざわざ死を招き入れるようなもの。どこか、どこかに立てこもれる場所は——

半闇狩人は、未知の闇の中を、巡礼尼僧の手を引きながら走る。後ろからは、こちらを追うようについてくる足音と晒い声。間違いない、向こうも、こっちに気付いている。

状況を理解した巡礼尼僧は、自分の手を引いて駆け出した半闇狩人について走り出す。しかし、その小さな手が、小さく震えていることに気付かないはずもなく。

本当に、この子は。どこまでも、どこまでも健気な若き冒険者。巡礼尼僧は、その小さく暖かな手を握る手にそつと力をこめた。

行き止まり

通路の先に見えた石造りの門、その目の前に広がるのは、ちょうどギルドの酒場ほどの空間。しかし、湿気のこもるその場所は、長い年月の間手入れをする者もなく、石積みや石畳の傷みが激しくそこかしこが崩れている。そして、天井が一部崩落したのか、広間を分断するように石罫のような瓦礫が積みあがっていた。

「お坊様、こつちへ！」

巡礼尼僧の手を引いて、半闇狩人は石罫の向こう側の音を確認した後、その向こう側に飛び込む。今ここにいるのは、自分と巡礼尼僧のふたりだけ。しかし、諦めない。諦めるには、まだ早すぎる。

「お師匠様は、必ず来ます」

半闇狩人は、まるで自分自身に言い聞かせるように、強い意志の宿った目でつぶやく。そう、師は必ず来る。だからこそ、一刻でも、一瞬でも、時間を稼ぎ、持ちこたえるのだ。そして、素早く装備の残りを確認する。手元にあるのは、弓と小刀、投石紐。矢はあと10本かそこら、残念だけでももう当てにはできない。

礫は、それなりにある。しかし、これっぽっちでは、到底あの数のゴブリンに対処できない。どうする、どうしたらいい、半闇狩人の頭の中で思考が高速回転し、結論を導き出した。

「うああああっ!!」

突然、大声を張り上げた半闇狩人は、そこかしこに落ちている崩れた石積みを持ち上げると、力を振り絞って頭上に持ち上げたそれを床に叩きつけ、粉々の石くれに変えた。「狩人様!」

「あああああつっ!!」

思わず驚きの声を上げる巡礼尼僧に構わず、半闇狩人は、何度も何度も同じ行動を繰り返し、手当たり次第に石積みを破壊し続ける。

作り出したのは、礫の山。これが、彼女の武器となる。自暴自棄になって、ただ闇雲に暴れまわり、感情を爆発させていたわけではない。気が触れたなどに見当違いもない所。半闇狩人は、極めて冷静に状況を観察し、自分の武器を用意した。

「ここでお師匠様を待ちます、お坊様は、見張りをお願いしますー!」

半闇狩人は、弓を背負うと、腰に巻いた投石紐を引き抜く。そして、今しがた作ったばかりの礫を傍らに山にすると、投石紐に石くれを巻き付け、金色の瞳で油断なく闇の向こうを見据える。

そして、半闇狩人の耳が何かを捉えたように動いた瞬間、投石紐が鞭のように空を切り、撃ち放たれた礫は次々と闇の中へ吸い込まれるように消えて行った。

匂う、匂うぞ

只人と、闇人の雌の匂い

只人の方は肉づきも良かった、大人しそうだったし、色々楽しめそうだ。

闇人の方は、なんか妙な感じがした。

弱そうだったし、色々苛めてから楽しんでやろう。

期待と興奮でよだれが垂れる。

旨そうな匂いが近づいてくる、もう少しだ、もう少しだ。

そして、ほんの一瞬の衝撃の後、意識は永遠に暗転した。

仲間の悲鳴が立て続けに起こる。

中には、悲鳴すら上げられずに頭の中身をぶちまけてひっくり返る。

はるか向こうから、次々と飛んでくる石礫。

その度に、仲間が一匹、また一匹と減っていく。

あの旨そうな匂いも、間拔けな連中の血や脳みその臭いでかき消される。

いい加減にしろ、うつつというい。

そう思った瞬間、顔面で何かが弾け、何も考えることは無くなった。永遠に。

半闇狩人は、石墨に足をかけ、次々と石礫を放つ。かつて故郷の山野で父と一緒に日々の糧を追い、弓と共に磨いた礫撃ちの技。無駄な回転など一切ない、鞭を振り抜くような動作で必殺の一撃を放ち続ける。そして、ややあつて闇の向こう側から響く汚ら

しい悲鳴と苦悶の声。

半闇狩人の息は少しも乱れることはなく、熟練兵士達が操るカタパルトさながらに次々と石礮を撃ち放つ。彼女が足元の礮を手にし投石紐に巻いた瞬間には、鋭い風切り音とともに石礮が撃ち出され、容赦なくゴブリンの骨を粉碎した。

逃げも隠れもしない、むしろ、向こうから近寄ってくる間抜けな獲物。山野の鳥獣たちとくらべたら、投げたら当たる的当てのようなもの。だからこそ、この広間の入り口を奴らがくぐる前に、一匹でも多く潰す。

「お坊様！礮もってきて！お坊様!!」

拾った回数で足元の礮を把握しているのか、半闇狩人が叫ぶ。もう丁寧ないつもの呼び方をしている余裕はない。そして、巡礼尼僧も、半闇狩人の声に応えてその足元に礮を積み上げていく。

「なんてことを……!」

とうとう姿を現したゴブリンの群れ、しかし、その光景に半闇狩人は怒りと嫌悪で眉を吊り上げる。頭や顔を碎かれて息絶えた仲間を、あるいは、重傷を負って動けなくなった仲間を、まるで盾のように掲げて押し寄せてくる姿。

半闇狩人が放った石礮は、ゴブリンの死骸に当たり、鈍い音を立てて石畳の上に落ちる。その様子に、死骸を掲げたゴブリンや、その後ろにいるゴブリンからげらげらと愉

快そうな晒い声があがる。

そして、じわじわと前進するゴブリンの群れ。その距離は、もう30歩もない。しかし、半闇狩人は、その目をすうっと細くすると、月夜の狼のようにその金色の瞳を鋭く光らせる。そして、一瞬背中を見せるように上半身をひねり、全身のバネと共に振り抜いた左手から石礫が飛んだ。

「GYA!?!」

突然、脳天に炸裂した衝撃。

「GUGGYA!?!」

横つ面を強かに打ち据える衝撃

石礫が、向きを変えて飛んでくる。

上から、右から、左から

まるで、獲物を狙う蛇の頭のように、空中で軌道を変えて。そして、たまらず仲間の死骸を取り落とした途端、さっきの強烈な礫が次々と飛んできた。

半闇狩人は、右手に投石紐を持ったまま、左手に握った礫を振り抜き投げる。半闇狩人の指先と手首で微妙な回転を加えられた礫は、空中で軌道を変え、仲間の死骸を盾にしたゴブリンの脳天や横つ面に直撃する。そして、驚いて死骸を手放した瞬間を見逃さず、投石紐を振り抜き必殺の石礫を次々とお見舞いしていった。

冗談じゃない。

これでは、間抜けを盾にする意味がないではないか。

しかし、雌どもはもう目の前に見えている。

一斉にかかれば、ほら、もうすぐそこだ。

かかれ、かかれ、一斉にかかれ！

もはや、左様ならばこれまで。数を頼りに押し込もうとすしている気配を感じ取り、半闇狩人は覚悟を決めて、一瞬目を閉じる。それでも、それでも、我が師を信じて。半闇狩人は、腰の小刀を抜いて短弓の末弭（うらはず）に着剣し、弭槍（はずやり）を組み上げた。すべての矢を撃ち放った後は、これが自分の最後の武器。

「お気をつけ下さいませ、狩人様」

背後からかけられた、巡礼尼僧の穏やかな声が、暗闇の中からすうつと響く。

「地獄の番犬は、すぐそばに御座いますよ」

「——え？」

その時、短く、鋭く響いた聞こえた笛の音。どうしてこんなところで？ 矢をつがえながら、後ろの巡礼尼僧に振り返ろうとしたその瞬間、暗闇の向こうから、暗闇の大気を振動させるほどの咆哮が轟いた。

「UUUUUUUUUUUUUUUUUU!!」

門の向こうから、ゆっくりとその巨体をくぐらせるように現れた魔獣。三つの狼の頭、竜の顎をもつ尻尾。冥府の門で亡者達を見張り続ける地獄の番犬、ケルベロス。

あの時、自分達に襲いかかってきた下水道の獣がなぜここに。まさか、ここまで追いかけてきたのか。それでは、師は？あの戦士は？まさか、この怪物に——？

恐怖と衝撃で混乱しかける半闇狩人に目もくれず、ケルベロスは全てを吹き飛ばすような衝撃をはらんだ咆哮を上げた。

「GUUUUUUUUUUUUUUUUUUU!!」

青銅の塊を引き裂くかのような咆哮と共に現れた魔獣、思いもよらない怪物の出現に、ゴ布林共は一斉に恐慌状態に陥る。そして、先ほどまでの威勢を、そのまま逃走に切り替えたゴ布林共は、蜘蛛の子を散らすように逃げ惑い始める。そして、それがケルベロスの逆鱗に触れた。

冥府の門前で、その扉を見張っていたはずの自分。それなのに、こんな薄汚い場所にいる。それよりも、ここには口にできるものがない。理に反し、冥府の門をすり抜け、現世に逃げ還ろうとする愚かな亡者共の屍肉が、幽魂がない。極度の空腹、極度の渇き、それが、余計怒りの沸点を低くした。

うっとうしく目の前を逃げ散らかす奴ら、ケルベロスはゴ布林共の真つただ中に躍り出ると、三つの頭、竜の顎でゴ布林に牙を突き立て、噛み砕き引き裂いていく。

ゴブリンの悲鳴、ケルベロスの咆哮、そして、肉や骨が砕け飛び散る音。巡礼尼僧を背後にかばい、半闇狩人は恐怖で引きつる全身を叱咤しながら、ひたすらその様子を注視し続ける。どこかに、どこかに落ちているかもしれない、小さな可能性の欠片。それを必死に探し続けて。

地獄の番犬

目の前で次々と繰り広げられる殺戮劇、怒り狂ったケルベロスの前に、ゴブリンは引き裂かれ、噛み砕かれ、踏み潰されていく。地底の清冽な空気と闇の中をたちまち覆いつくす、汚らしい絶叫と、血と臓物と糞尿の臭い。

仲間がやられている隙に半闇狩人や巡礼尼僧へ駆け寄ろうとする、この期に及んでなおも浅ましいものもいたが、それらはすべて、半闇狩人の放った矢で顔面を貫かれた。

そして、全てのゴブリンが、ゴブリンだったものに変えられた後、ケルベロスは、その三つの狼頭、竜の顎（あぎと）で、ゆっくりと半闇狩人たちの方を振り返り睨みつけた。これは食事になるのか、それを確かめようとするかのように。

こうなったら、やるしかない。

半闇狩人は、手足の震えを懸命にこらえ、覚悟を秘めた表情で短弓に矢をつがえる。自分がこのバケモノ相手にどこまで戦えるかわからない。けど、やれるかやれないかわからない、やるんだ。

そう、あの時、赤毛の大熊と戦った父のように。自分を守って、全てを振り絞って戦った、勇敢だった父のように。

……U……AAA……UU……

その時、暗闇の向こうからかすかに耳に届いた音。うめき声のようにも、嗚咽のようにも聞こえる声。自分と巡礼尼僧の他に、誰もいないはずの場所で聞こえたもの。思わず声の方向を振り返ろうとした瞬間、首筋に打ち据えられた強烈な衝撃。そして、何が起こったのか理解する暇もなく、半闇狩人の意識は闇の中に滑り落ちて行つた。

「狩人様、もう結構でございますよ」

首筋への当て身、くてりと気を失つた半闇狩人の体を抱きとめた巡礼尼僧は、感情の见えない微笑を浮かべつつ石墨の隅にそつと寝かせる。

「さて、もう一度、番犬を上に戻さなければ」

巡礼尼僧は、相変わらずの怒気を噴き上げ続けるケルベロスに向き直る。それにしても、どうして今日に限つて、これはここまで追いかけてきたのか。まあ、そんなことはどうでもいい。こんな状況では、却つて好都合だった。

胸元に提げた鎖を引き寄せ、豊かな谷間に隠した小指ほどの銀の笛を取り出す。魔獣使いの魔銀笛、その吹き口に唇を近づけたその時、何の前触れもなしに暗闇がかき消され、突然の光に驚いたケルベロスの咆哮が大広間に響き渡る。

何の前触れも無しに灯つた明かり、不意に明るく浮かび上がった視界に、巡礼尼僧は混乱するように目を瞬かせる。しかし、その目に映つた姿を見た瞬間、彼女の顔に鋭い

光が横切った。

「やあやあ、どうもどうも。遅くなつてしまつて、申し訳なかつたねえ」

朗らかな声と共に、まるで宴の席に遅刻したかのような調子で現れた退役軍人。そして、その隣には、忠実に付き従う衛兵のように、油断なく剣を構えている若い戦士の姿。「いやあ、遺跡の照明装置がまだ生きててくれて助かつたよ。瓦斯にこんな使い方があつたとは、やつぱり昔の人は偉大だねえ」

いつもの調子で現れた退役軍人は、改めて周りの状況を見回す。もはや原型を留めないほどに破壊された、ゴブリンだった肉塊があたり一面に散らばる。それと、顔面に矢が突き刺さっているもの。これは言うまでもなく、半闇狩人の奮戦の証だろう。

そして、自分たちを威嚇するように唸る、その馬車馬ほどもある巨体。三つの狼頭、そして、竜の顎を持った尻尾を持つ魔獣の姿に、退役軍人は感慨深そうな様子で何度も頷く。

軍団の旗印にも採用された、地獄の番犬。よもや、こんな所で、こんな時に、本物の姿を目にすることになるとは思いもしなかつた。

「それにしてもだよ、尼僧殿。少し、悪戯が過ぎるんじゃないのかい」

不機嫌そうにこちらを睨むケルベロスの背後には、巡礼尼僧。しかし、彼女は今までとは別人のように、凍り付いた目でこちらを見据えている。いや、もはや別人と化して

しまったのかもしれないが。

(まあ、そんなわけではないね)

そう、彼女は、彼女のままで。よもや、こんな形で中してほしくはなかったが。そして、退役軍人は、崩れた壁の向こう、祭壇のような石造りの台座に横たわるものへと目を移す。動屍體かとも思ったが、違う。あれから感じるのは、何か法術の残渣。そも、死臭も怨念も感じないのなら、それはただの魂のない肉体か。いや、そうではない。あれは、邪法。何人であろうと禁じられた、禁忌の術。

「どうやら、弟くんは見つかつたようで、なによりじゃないか」

一通り観察を終え、やがて、退役軍人は相変わらずの口調で声をかけた。

「本当に、なによりだよ」

いつもの調子の笑い混じりの声、だがその全身はひとかけらも笑つてはいない。

「ええ、おかげさまで」

それに応えるように、穏やかな笑みと共に一礼する巡礼尼僧。だが、その目は深淵の縁のように暗く深い闇を湛える。そして、ケルペロスは巡礼尼僧の前にゆつくりと進み出ると、退役軍人と若い戦士に向けて低く深い唸り声を上げた。

「君、無闇に動いたり大声を出したりして、アレを刺激しちやいけないよ」

「は、はい……！」

巡礼尼僧に対して詰問の声をあげようとした若い戦士を、退役軍人は穏やかに制止する。地獄の番犬を従えるように立つ巡礼尼僧、そして、石塁の片隅に横たえられている半闇狩人の姿。確かに聞きたいことは山脈一つ分もあるが、今は彼女に状況を問う時ではない。

それよりも深刻な問題が、目の前で三つの狼頭、竜の顎でこちらを睨みつけている。退役軍人と若い戦士は、それぞれの武器を油断なく構えながらも、目の前に立ちほだかる冥府の魔獣の前に、お互い援護できる距離に立つ。

「この子は、やはり?」

退役軍人の、わざとらしい問いかけに、巡礼尼僧は微かに口元をゆがめる。誇るでも誇るでもない、笑みに見えない笑み。

「ええ、これは、私めが冥府より連れてきたのでございませすよ」

退役軍人への返事と共に、巡礼尼僧は自嘲するように笑う。そう、番犬が空腹になる時を待ち続け、主の忠誠よりも餌への渴望の均衡が揺らいだその隙に付け入り、魔獣使いの魔銀笛で従わせ幽世（かくりよ）の隙間から連れ出した。

勤勉忠実かつ獐猛だが、どこか抜けた性分だから出来たこと。同じ眷族でも、これが凶暴一辺倒でしかないオルトロスならそうはいかなかつただろう。しかし、よもや、餓鬼（ゴブリン）まで抜け出したとは思わなかつたが。

「黒騎士様、お尋ねしたいことが山とあるのでございましょう?どうぞご遠慮なさらずに、なんなりとお尋ねくださいませ」

「え? いいのかい」

「はい、この期に及んで隠し事もございません。それに、何も知らぬままでは無念でございましょうから」

「おやおやおや、これはこれは、お氣遣い感謝するよ」

「恐れ入ります」

言外に、生かして帰さないという意思をはらんだ言葉。魔道具に邪法、それらを悉く見られて只で済ませる故も無し。それでもなお、まるで朝食の席で今日の予定を話し合うような気安さ。

「では、ケルベロスを地下下水道に放ったのは、君ということなんだね?」

「おっしゃるとおりでございます」

「そうか、それで大鼠や黒蟲達が、怖がって奥から逃げ出してしまった訳なんだねえ。しかしだよ、尼僧殿。これはちよつとひどいんじやあないのかい? おかげで、命を落としました若い子たちがいるんだ。うちの子だつて、もう少しで危なかつたんだよ」

「そのことにつきましては、大變残念に思います」

「ふうむ」

まるで他人事、そんな巡礼尼僧の言葉に、退役軍人は小さく息を吐き出す。

「だいたいあれだよ？君に似合いそうなのは、白くてふわふわの賢そうなワンちゃんじゃないか。なんだって、こんなおっかなそうな子を連れてくるんだい」

思いもしない退役軍人の言葉に、若い戦士は思わず目が点になり、巡礼尼僧はころころと鈴の音のような声で笑い出した。

「恐れ入ります、黒騎士様よりお授かりいただけるのであれば、大変嬉しく存じます」

「うん、知り合いにつてがあるから、君が気に入ってくれそうな子を連れてきてあげよ。だから、もうこんな危ないことはやめなさい」

「まあ……それは、重ね重ね恐れ入ります。ですが、私めの身に余るお気持ちゆえ、恐れながら遠慮させていただきたく存じます」

「おやおや、振られてしまったねえ」

「滅相もございません、黒騎士様」

「あ、そう言えば」

「どうかなされましたか？黒騎士様」

「もしかして、あの時、私の荷物に加重（インクリースウェイト）をかけたのは君だね？」

「ええ、おっしゃる通りでございますよ。あの時は、大変失礼をいたしました」

「いやいやいや、ひどいじゃないか、本当にびっくりしたよ」

そんな退役軍人の言葉に、巡礼尼僧は鈴が転がるようにころと笑い、つられるように退役軍人も肩を揺らして笑いだす。場違いもいい所な楽しい会話と笑い声、ひとり若い戦士だけが、緊迫した表情でふたりの会話の成り行きを見守る。そして、今のところ、ケルペロスも大人しくしているが、いつまた暴れ出すか判らない。

「しかしだよ」

退役軍人は、不思議そうな仕草で巡礼尼僧に問いかける。

「どうして、私たちの一党に加わった時、私たちを始末しようとしなかったんだい？ 私達の行動は、君にとって都合が悪かったんじゃないのかな？ 君なら、その気になれば、いくらでもそうできたんだらう？」

「滅相もございません」

巡礼尼僧は、困ったように笑いながら応える。

「黒騎士様の動向さえわかれば十分でございませぬ、私めに必要だったのは、時間だけでございませぬから」

そう、時間。冥府の門から番犬を引き離し、その間に、冥界をさまよっているであろう弟の魂を探しに行く時間。しかし、外法を駆使しても、禁呪に頼つても、自分のように生あるものが冥界に踏み込める時間はそう長くない。それでも、こうして探しにいくだけましな話。

だから、地獄の番犬を魔道具の笛で呼び寄せ、地下水道に誘い出して放置した。地上に逃げ出す心配など考えなかったし、別にそれならそれでいいとも思った。そもそも、冥府の闇の中に住まうケルベロスにとつて、地上の清廉な光は、草鳥頭（トリカブト）の花を吐き出し生み出すほどに嫌悪すべきものだから。

「なるほど、なるほど」

巡礼尼僧の言葉に、納得したような仕草で何度もうなずく退役軍人。確かに、そう言われれば、これまでの流れは全て理解できた。それに、手際の巧拙がどうあれ、暗殺を疑われる騒ぎが起きれば、それこそ話が大きくなるだろう。

となれば、相手の懐に潜り込み、その動向を把握できるだけでも十分。それは、かつて現役だったころ、魔王王に与する者達の邪教集団や、そのセクトに対して軍団でもよく使った手法。

「それじゃあ、あの御遺体を吊ってあげたのも、尼僧殿なんだね？」

退役軍人の言葉に、巡礼尼僧は否定も肯定もせず、ただほろ苦い笑みを浮かべる。

「思い返してみれば、動屍體や食屍鬼に堕ちた御遺体にでくわしたことはなかったからねえ。あれだけ残念な事になったのに、無念の一つも残さずに逝けたということは、やはり、そういうことだったんだねえ」

しみじみと、しかし、納得するようにならずきながら、退役軍人は巡礼尼僧に向き直

る。

「それにしても」

退役軍人は、広場の奥、崩れた石塁の向こうにある祭壇代わりの石の台座の上を見て呟く。そう、これまで何度も見てきた光景。古の王を、賢者を、戦士を、そして、心から愛した人を。再び求めるため、再び会うために。しかし、それを行ったのは、邪教の使徒や宗徒達。ほんのひとつまみの例外もあつたが、全て、処した。

「反魂香の祭禮は、久しぶりに見るよ」

祭壇の上に横たわる體、しかし、その姿は、濁つた瑪瑙の彫刻のような姿に蛇紋を滲ませている。それは、外法で組み上げた偽りの肉体。とてもではないが、これから黄泉還りを待つようなものでは、決して無い。

「偽りなどではございませんよ、黒騎士様。あれには、しかと弟の骨身が納まつてございませぬ。あとは、魂さえあの体に戻れば——」

「なるほど、地獄の番犬を冥府の門から引き離したという事は、君はその向こう側に用事があつたと言う訳だね。そして、とにかく、探しに行くための時間が必要だった、と」

「ええ、おっしゃる——とおりでございます」

「なるほど、ありがとう、よくわかつたよ。でもね、アレはここにいちやあいけない存在だ。なんとしてでも、帰ってもらわなきゃいけないよ」

「もちろん、いずれそうするつもりでございますよ」

そう、冥府の門の向こう側にいる弟の魂。それを探し出して、用意した体に戻してやるまでは、弟を、黄泉還らせるまでは、

「今は、帰ってもらうわけにはまいりませんが」

そして、巡礼尼僧の息吹を吹き込まれた魔銀笛は、音のない音を響かせてケルベロスの耳を打つ。

おなががすいているのでしよう

ごはんがたべたいのでしよう

ほら

だったら

だったら

いうことをききなさい

いいこにして

いうことをききなさい

そして、番犬のように控えていた魔獣は一転、大気を振動させる咆哮を上げる。そして、三つの狼頭、竜の顎の尾を猛らせ、退役軍人と若い戦士に襲い掛かった。

「この！待て！伏せ！お座り！ああやっぱり駄目だね！！」

本気なのか冗談なのかわからない大声を上げながら、振り下ろされる爪や牙をフランジメイスで受け流しつつ、退役軍人は一撃を見舞う隙を窺う。しかし、三つの頭、尾の先の龍の顎は伊達や酔狂などではなく、本当に死角がない。向こうからの攻撃はどうか防げてはいる、しかし、こちらの攻撃もことごとくかわされてしまう。

「うわっ!？」

振り下ろされた鉤爪の一撃を辛うじてかわすが、一瞬火花が散ったその胸甲に、地金が見えるほどの爪痕が刻まれた。

「誰もお手なんて言っていないじゃないか!!」

飼い犬を叱るような父親のような大声を上げながら、退役軍人はケルベロスの脇を回りこむように駆け抜けようとした瞬間、その目の前に、竜の顎が牙を剥いて飛びかかってきた。

しかし、驚くより先に、長年の経験が沁み込んだ体が動く。急停止から右脚を振り上げ、間髪入れず石畳を踏みしめた瞬間、全身のバネと力で加速された両手持ちのフランジメイスが、フルスイングの唸りを上げる。

「そおいつつ!!」

渾身の一撃が竜の顎に炸裂し、鉄の扉を叩くような轟音を上げた王者の打撃の前に、

竜の顎は折れ砕けた牙をまき散らしながら、カウンターで打ち返された衝撃で弾き飛ばされた後、血泡を吹きながらよろよろと鎌首を持ち上げ、警戒するように退役軍人を見おろすように睨む。

しかし、その痛打は竜の顎の戦意を削いだ代わりに、メイスの縁刃が何枚か折れて吹っ飛び、石畳の上で甲高い音を立てて散らばった。

そして、その反対側では、若い戦士がケルベロスに懸命に斬りかかっている。自分めがけて振り下ろされた鉤爪を、肩に担ぐように構えた剣の鎬で受け流し、手首の軸で翻す勢いのまま切っ先をケルベロスの肩口に叩きつける。しかし、返しが不十分なまま繰り出された斬撃は、その針金のような強靱な毛皮を幾ぶんか削っただけで、さした痛痒も与えられない。

最初の会敵の時と違い、今度は明確な敵意を持って襲い掛かる牙や鉤爪に、戦士は必死に剣を振るって応戦するが、絶対的に技量が足りない。その一撃一撃が重く強烈な打撃となり、受け流しきれなかった衝撃が、確実にその体力を消耗させていく。

腕が痺れ、指に力が入らなくなる。それでも、必死に剣を翻し、牙を鉤爪を、弾き、受け流す。鎬には無数の傷跡が刻まれ、刃こぼれは限界に達しつつある。

「GUWOOOOOOOOOOO!!」

弱った得物を叩き潰そうとするかのように、若い戦士の頭上に鉤爪が振り下ろされ

硬直させた。

「危ない!!」

いち早く動いた退役軍人の声と共に突き飛ばされ、若い戦士は吹っ飛ばすように転がる。そして、彼の代わりに、退役軍人の左腕に据えられた小盾に四本の鍵爪の痕が刻まれた。

「固まってちゃ駄目だ、挟み込むよ!」

「は、はい!!」

猛り狂うケルベロスの前に、退役軍人は嵐のように繰り出されてくる牙や鉤爪を、フランジメイスで打ち返しながら懸命に防戦する。そして、若い戦士も、油断なく剣を掲げながら反対側に回り込み、斬りつける隙を必死に探す。

ケルベロスをも挟撃するふたりは、その鼻面や関節、足元に一撃を打ち込むが、急所とは程遠い箇所への痛痒は、この魔獣の怒りを加速させるだけ。そして、あまりにも足りない装備と戦力。このままでは一党の全滅はもはや必至。

「もはや、これまでかな」

「先生!?!」

思いもしなかった退役軍人の言葉に、若い戦士の顔に動揺が走る。

「約束はしたんだけどねえ……少し、甘く見過ぎていたようだね」

そうつぶやくと、退役軍人はフランジメイスを帯革の留め具に納め、小盾の裏に潜ませていたフリントロックを引き抜いた。

「先生！駄目です！それは!!」

「そうはいつても、君達の命には代えられないからねえ」

こんなことになったのも、自分の道楽に付き合わせたようなものだ。大鼠や黒蟲程度のつもりが、いざ蓋を開ければこんな怪獣が出てきた。何が起こるかわからないから、冒険。それは、最初から目標を定めて行動する軍とは、全く別の次元。これに比べたら、いくらでも想定できる敵の奇襲や伏兵など、大した話ですらない。

冒険を甘く見るな。

かつて言われた言葉が蘇り、退役軍人はほろ苦い笑みを浮かべる。

「本当に、おまえの言う通りだったよ」

ならば、その清算は自分が。退役軍人はフリントロックを構え直し、マントを翻しながら石畳を蹴ると、ケルベロスの側面に位置取るように走る。そして、左手で銃をなぞるように撃鉄を起こし、銃口の狙いを前足の付け根のやや後ろへと向けた。

雷轟電撃、轟音と共に閃いた砲炎と硝煙が舞い上がり、撃ち放った弾丸は、吸い込まれるようにケルベロスの心臓に突き刺さった。

「UWOOOOOOOOOOOOOO!」

胸郭を、いや、体全体を揺さぶるような強烈な衝撃に、ケルベロスは驚愕の悲鳴を上げてその巨体を身じろがせる。

「まず、ひとつ」

退役軍人は、すかさず距離をとると、落ち着き払った、そして、流れる動作で銃口に装薬と弾丸を込め直す。そして、心臓を鷲掴みにされるような痛みが全身を駆け巡った。

まるで、さつさと弾を込め直し、早く撃て。7発全部、早く撃て、と催促するように。心臓が、肺が、頭の血管が、はちきれんばかりに脈動し始め、体と精神が耐えられるぎりぎりの痛みを与えてくる。

契約の弾丸

悪魔との契約、絶対の命中を約束する弾丸。そして、それは人の生命を代償にする7発の弾丸。最後の弾丸を撃ち放った時、自分か、あるいは誰かの命は、弾丸に撃ち抜かれることになる。しかし、1発だけ残すという選択肢はない。それをしたが最後、契約を反故にしたとして、悪魔は問答無用で自分の命を持っていくだろう。

それが、呪力を提供する悪魔との契約。6発までは絶対の命中を、しかし、残りの1発は、悪魔が契約の対価としてふさわしい価値があると選んだものへ。それが、何であるかは、その弾丸が撃ち放たれるまではわからない、誰にも。

「先生！駄目です！」

「もうこれしかないんだよ、それに、ここで全滅するよりマシさ」

必死に止める若い戦士の記憶に、あの時の酒場でのやり取りが蘇る。自分の命を代償にして絶対の命を得るといふ弾丸。そして、2発目の銃声が轟く。そして一瞬だけ、すうつと軽くなる痛み。その間に、退役軍人は装填を終わらせる。しかし、程なくして、再び痛みの脈動が始まった。

「GUWON!？」

眉間に命中した弾丸は、分厚い毛皮を貫き、その堅牢な頭蓋に亀裂を入れる。しかし、その脳髓を破壊するまでには至らない。しかし、その強烈な衝撃に、左の狼頭は血泡を吹き白目を剥いて昏倒する。

「やはり、頭は駄目だったねえ」

退役軍人は、弾丸に宿る力を与えた悪魔に対して、わざとらしく呆れたようにぼやく。「当たりはしても、仕留められないんじや意味ないよ」

不服を申し立てるようこぼしながら、銃身から火薬を流し込み、弾丸を押し矢で詰め込む。そして、装薬した火皿の火蓋を閉じ次の撃発に備える。相当訓練を重ねたものでなければ為しえない、淀みなく正確な装弾。

「こうなったら、心臓狙いしかないね」

そして轟く3発目の銃声、契約の弾丸は、猛り駆け回るその巨体を追うように飛び、再びその心臓にめり込み、その中の血液を激しくかき回した。

「UWOOOOOOOOOOOOOO!!」

臓腑を鷲掴みにされるような激痛に、思わず転倒したケルベロスは、三つの狼頭から血反吐を吐きながら悲鳴じみた咆哮を上げる。しかし、退役軍人も、弾丸がケルベロスに命中する度、次発を督促するように与えられる、突き刺すようにも握り潰すようにも感じる胸痛に、思わず胸甲を押さえながら膝をついた。

「あいたたた……覚悟はしていても、流星に辛いねえ……」

口の中に血の味が広がり、こめかみが脈動するように痛む。

「これじゃあ、7発撃つ前に、私が倒れるんじゃないのかい」

ふうふうと息をつきながら立ち上がる退役軍人は、肩で息をしながら再び弾丸を込め直す。時折目がかすむのは、10年ほど前から顕著になってきた老眼のせいだけではない。

ケルベロスに撃ち込んだ銃弾は、1発が左の頭に。しかし、これは昏倒させるのが精一杯。そのうち目を覚ますだろう。そして、2発はその心臓に突き刺さっている。弾丸の鉛に混ぜた、破邪顕正の一撃を与える真銀の効果もあるのだろう。今や、見てわかるほど弱り始めている。

冥王の忠実な番犬を邪悪と言うつもりはないが、それでも尋常でない損傷を与えている。残りの弾丸は後4発、残り3発でケルベロスを沈黙させられなければ、もう後はない。計算違いではない、そして、最後の1発を撃たないという選択肢もない。

装填するたびに、撃発するたびに、急かすように全身を苛む痛みは、契約を反故にした途端、一気に全身の血管を破り、心臓を破裂させるだろう。そして、最後の1発が何に当たるか。自分か、獲物か、あるいは、一番大切にしている人間か。それは、その瞬間まで、誰にもわからない。

「こんなことなら、あの時撃つとけばよかったねえ」

大義そうに肩で息をしながらも、やがて、思い直したように背筋を伸ばす。

「いや、違うかな」

かすむ視界に映る、ケルベロスの注意をそらそうとするように、懸命に剣を振るう若い戦士。信じられないものを見るような目でこちらを見る巡礼尼僧。そして、気を失ったまま、まだ目を覚まさない半闇狩人。いや、今は目を覚まさないほうがいいのかもしれない。彼女にとって、辛いものを見せてしまうだろうから。

「今が、これの最高の使い時さ」

そして、迷いなく引き金を引き、4発目の銃声を轟かせた。

血反吐を吐き、咳き込みながら唸るケルベロス。心臓にめり込んだ契約の弾丸は、徐々に、そして確実に魔獣の命を削っていく。しかし、退役軍人自身も、全身を苛む激痛に呼吸が荒くなる。そして、突然その場にしゃがみこんだ瞬間、先ほどまで彼の頭があつた場所を、錫杖の一撃がうなりを上げて振り抜けた。

「いきなりなにをするんだい、危ないじゃないか」

素早く地を蹴つて転がるように距離を空けた後、寝起きの中年男のように大儀そうに立ち上がった退役軍人は、背後から錫杖の一撃を見舞つてきた巡礼尼僧に抗議の声を上げた。

「これ以上、それを使わせるわけにはまいりませんよ、黒騎士様」

「おやおや、心配してくれるのかい？」

相変わらず、何を莫迦なことを。巡礼尼僧の眉が一瞬吊り上がり、構える錫杖に明確な敵意がこもる。あの時酒場で聞いた話、冗談なのか本気なのか、しかし、注意しておくに越したことはないと思つていた。

しかし、それがここまであのケルベロスを追い詰めるとは。先ほどまでの凶暴さが鈍り、時折せき込むように血反吐を吐き散らしている姿に、巡礼尼僧はぎりと歯噛みする。

「先生の邪魔をするな！」

駆け付けた若い戦士が間に割つて入ると、巡礼尼僧を牽制するように剣を構える。そ

の程度の技量で何ができる、そう言わんばかりに小さく鼻を鳴らす巡礼尼僧。

もはや刃は全て潰され、折れていないのが不思議なほどの剣の傷み。しかし、切っ先だけはまだ鋭利さを残している。自分も、この剣も、まだ戦える。その刀身は上下左右の打撃に備え、切っ先は隙あらばいつでも繰り出せるように機をうかがう。

「そこで、大人しくしているんだ」

相手は銅等級、明らかに格上の相手に自分の剣が通用するか。しかし、勝てないまでも、時間を作る。流れは自分達に向き始めている、今まで動きを見せなかった彼女が、こうして妨害に動いたのが何よりの証左。

「先生の、邪魔はさせない」

強固な意志と覚悟を宿し、若い戦士は巡礼尼僧の動きを牽制するように、油断なくその一挙手一投足全てを視界に納める。そして、その背後で、5発目の銃声が轟いた。

「う……………」

目を覚ました時、首筋の痛みと、予想外に明るい視界に顔をしかめる。しかし、目の前の光景を認識した瞬間、半闇狩人は首の痛みも忘れて跳び起きた。

師が、三つ首の狼と戦っている。

戦士が、巡礼尼僧に剣を向けている。

師の手には、あの時酒場で見た『鉄砲』が握られている。

落雷のような音と同時に、怪物の毛皮が爆ぜ、悲鳴が上がる。

どうして、なぜ、こんなことに？

まだ自分は夢を見ているのだろうか、まったく想像もしていなかった事態が繰り広げられている様に、半闇狩人は呆けたようにその光景を眺め続ける。

「まいったね、まさか、これだけ撃つても倒れないなんてねえ」

未だ猛り狂うケルベロスは、辛うじて意識を保っている真ん中の頭で敵の姿を捉え、その牙を剥く。左の頭に1発、その心臓には、既に5発の弾丸が撃ち込まれ、鼓動が乱れ破裂寸前。右側の頭も、朦朧とした様子で血泡を吹いている。

それでもまだ、地獄の番犬としての矜持を示さんとするかのように、ケルベロスはその四肢と鉤で石畳を砕かんばかりに踏み締め続ける。

「さて、最後の1発。これが私の心臓を砕くか、君の心臓を砕くか。ひとつ、勝負と行くじゃないか」

彼女の耳に、死を覚悟したような師の呟きはつきりと届き聞こえた瞬間、全身がぞわりと粟立った。装填し終えたフリントロックを静かに構え、ケルベロスもまた、血走った目で飛びかかる隙を伺うように姿勢を低くする。

最後の1発

だめだ

あの弾丸を放つてはいけない

鉄砲ごとあの弾を壊す、半閻狩人は心の中で師に詫びながら、傍らに落ちていた短弓を拾う。そして、迷いなく選んだのは、錐のように鋭い丸根先細の鏃（やじり）。鎧兜を貫く徹甲の矢、一番速く一番硬い矢を選んだ、あとは、この矢に全ての力を乗せるだけ。半閻狩人は、つがえたこの矢が一番早く飛ぶように、今まで半分しか引けていなかった弦を、渾身の力で引き絞る。

「うっ……うあああああ……！」

父と共に拵えた時、この弦が最後まで引けたら一人前。そう言われた短弓。そして今、限界まで引き絞る弓弦。今まで、ここまで引き絞ったことなどなかった弦が、ぎりぎりとうなりを上げ、背中が、肩が、胸が、全ての筋肉が悲鳴をあげ、奥歯が軋む。それでも、懸命に弦を引き続け、退役軍人の一挙手一投足を凝視して、撃発の瞬間を待ち構えるように狙いを定める。

鉄砲の火がついた後なら、約束どおり撃つことになる。その後で邪魔が入っても、それはお師匠様のせいなんかじゃない。できるかなんて考えない、やるんだ、自分が、やるんだ。もう、それしかないんだ。

短弓につがえた最速の矢、その鋭利な鏃の向かう先。全身の力と全ての精神力を集中

する、そして、眠っていたなにかを叩き起こすかのような未曾有の過負荷。それに応じるように、半闇狩人の体の奥底で、まさにこの時を待つように眠り潜んでいた闇人の血が、ぞわり、とざわめきだした。

金貨に落とした一滴のインクのように丸い瞳が完全に縮む、そして、再び見開かれた瞳は純粹な闇人のような縦長の瞳に形を変え、その虹彩は翠玉のような光を放つ。

刹那、耳に、肌に、目に、ありとあらゆる音が、流れが、光がなだれ込み、頭の中で、体の中で、濁流のように渦巻き、反響し、叩きのめし合い始め、ありとあらゆる感覚が緩急様々なうねりとなって、半闇狩人の全身を翻弄する。

薄暗かった景色が突然真昼のように明るくなる。生ぬるい匂いを伴った空気が粘液のように動くのが見える。水の流れる音、空気が這いずりまわる音、鼻につく臭気。時の流れが緩やかになる感覚と共に、それら全てが目映る波の流れとなって、頭の中身をかき混ぜ、全身をばらばらにしてしまいそうな衝撃となって頭蓋の中を駆け巡る。

それでも

それでも

必死に耐える、そして、矢をつがえる指は決して緩めない。その時、退役軍人が地を蹴りケルベロスに向かって突進する。弾が反れる前に当てようとするかのように、零距离離射撃を敢行しようと突き出したその手の先には、最後の弾丸を込めたフリントロツ

ク。

刹那、頭を串刺しにするような轟音と熱。それがゆつくりと視界を揺らめかせ、一粒の弾丸が、炎と共にゆつくりと鉄砲の中を進んでいくのを感じ取る。

笑っている

嗤っている

晒っている

へらへらと

げらげらと

にやにやと

悪意の塊

いつか村で見たそれとは比べ物にならない

決してこの世に存在させてはいけない

悪意のカタマリ

いない

おまえなんか、消えてなくなれ

自分の呼吸が、自分の心音が、割れ鐘のように鳴り響く。眼の奥が痛み、涙が止まらない。それでも、やるんだ。自分が、やるんだ。半闇狩人は、ありとあらゆる感覚の濁

流の中で、憎悪にも似た視線で鉄砲を凝視する。そして、限界に達した指先が、その弦を放そうとしたその時。

それじゃあ、駄目だ

ふわり、と、暖かい空気が指先を包む。

痺れ、引きつった指にじんわりと感覚が帰ってくる。

矢で射るんじゃない、心で射るんだ

懐かしい声、懐かしい匂い。そうだった、すっかり、忘れてた。

だいじょうぶ、おまえならできる

そつと瞼をなでるような、暖かい空気。ふわりと、涙が止まる。

ほら、もう、だいじょうぶだから。

暖かい声、覚えていないのに、覚えてる。

いつかその胸に抱かれた、おぼろげな暖かい匂い。

蘇った感覚、蘇った視界。そして、感覚の揺らぎが収束集中し、集まった先は鋭利な鍬の先。身体の、感覚の、ありとあらゆるものと融合した鍬の先が、まるで自分の指を伸ばしたように感じられる。手を伸ばしたように感じられる。

そして、乱雑に散らかった紙が、その角を全て揃え整ったような感覚。あれだけ響き渡り、鼓膜を叩き続けた音が止んだ。頭の中をかき回し、揺さぶるような光や匂いも止

んだ。鏃の先が自分の指先となつて弾丸を捉え、つまみとつたような感触が伝わる。そして、弾丸を真つ直ぐに穿ち、貫き、砕く。それに至る、見えるはずがない矢の軌跡が、導くようにはつきりと見えた。

つかまえた。

その刹那、黒檀のような指が抑える矢を解き放つ。ひゅん、という短い音。乱れなく、滑らかに、軽やかに空を切る音。そして、銃口と毛皮の間に浮かぶ弾丸を捉えた矢は、楊枝で葡萄の実を刺すように、ぶつりと打ち貫いた。

その刹那、断末魔の悲鳴にも呪詛の罵声にも似た耳障りな音が耳朵を打つ。そして、誰かの心臓めがけて飛ぼうとしていた弾丸は、刺し貫いた矢ごと彼方の方向へと弾き飛ばされた。

まだだ、まだ終わつてない。半闇狩人は、激しくこみ上げてくる嘔吐感を抑えつけ、全力で走り出した。

最後の銃弾を放つたはず、しかし、ケルベロスは倒れない。だが、自分の左胸が爆ぜる感覚もない。では、他の誰かに？

あの子は、無事だろうか。

朦朧とする意識の中、最後に愛弟子の無事を案じながら、退役軍人の意識が遠くなる。

そして、その頭をケルベロスが噛み砕こうとしたその刹那、疾風のように体当たりしてきた半闇狩人に突き飛ばされた。そして、ふたり一緒になってもんどり打ち、石畳の上に転がり倒れたその真上を、怒気とともにかすめていく牙が打ち鳴らされる音。

「——ごめんなさい」

絞り出すような謝罪の声、退役軍人が朦朧とした視界に捉えたのは、自分をかばうように、両手を広げて真っ直ぐにケルベロスを見あげる半闇狩人の小さな背中。

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

懸命に謝罪の言葉を繰り返す半闇狩人、がちがちと鳴り続ける歯の根は合わず、恐怖で抑えを失った下半身は漏れた小水で濡れ、こらえきれない涙があふれ落ちる。それでも、彼女は師の前から逃げることはしない。

「食べるなら、わたしを食べてください！食べ物もみんなあげます！だから、このひとだけは、このひとだけは食べないでください……お願いです……お願いです……お願いです!!」

背負っていた背囊をかなぐり捨て、震える手で革袋に詰め込んだ食料を自分の前に放り出した半闇狩人を、ケルベロスは怒りの息を吐き散らしながら警戒し、威嚇するように唸る。

『GORUUUUUUUU……!!』

腹の底まで響くような唸り声に、半闇狩人は恐怖で思わず固く目を閉じる。しかし、

それでも、震えるその足は、その体は、師を守るように決してその前から動かない。そして、半闇狩人は、その牙が、その爪が、自分を引き裂く瞬間を覚悟する。

さようなら、お師匠様。

あなたに会えて、わたしは

しあわせでした。

覚悟と感謝を込めて、心の中で師へと送った言葉。しかし、ついぞその最期の瞬間は訪れない。恐る恐る目を開いた半闇狩人の目に映ったのは、自分が差し出した革袋の中からパンケーキの包みを引っ張りだし、覚醒した左右の狼頭と共に、一口一口を惜しむように、舐めるように味わっているケルベロスの姿。

「あ……」

獣人女給が差し入れてくれたパンケーキ、半闇狩人は、無意識のうちに雑囊を探り、蜂蜜の入った瓶を取り出すと、ケルベロスを刺激しないように膝をすり、そろり、そろりと近づきながら小瓶の栓を抜き、中の蜂蜜をパンケーキの上に全部ふりかけた。

少しでもこの魔獣が満足するように、少しでもその食欲を満たせるように。惜しいとか、もつたいないなどは、みじんも思わなかった。

三つの狼頭で用心深くその動きを見守るように、食事を中断していたケルベロスは、竜の顎の尾を軽やかに振ると、残りのパンケーキを分け合うように全て平らげた。

次は、自分の番。

お師匠様にもらった命、だから、今ここで、お師匠様にお返しする。

既に覚悟を決めた半闇狩人は、ケルベロスにかしづくように身を捧げ、静かに頭を下げる。そんな彼女の頬を、かすかに蜂蜜の匂いがする大きな舌がひとなめする。さらに固く目を閉じた半闇狩人の耳に、ゆっくりと遠ざかっていく足音が聞こえた。

「？」

もう一度目を開けたその先には、暗闇に続く大広間の門の奥、陽炎のように立ち昇る紫色の炎の向こう側にゆっくりと消えていくケルベロスの姿。

そして、再び、地下大広間は静寂に包まれた。

禁じられた遊び

おとうさま

おとうさま

あなた

あなた

御館様

御館様

ぼっちやま

ぼっちやま

お師匠様

お師匠様

懐かしい声、暖かい声が呼ぶ。優しく包み込む穏やかな光、それに呼び起こされるように目を開けると、そこには、愛すべき愛弟子の顔。とりすがるように頬を押し付け、わあわあと泣き続ける半闇狩人の姿、その向こうに落ちているのは、鏃に撃ち穿たれた契約の弾丸。

「そうだったのか……」

すべてを理解した退役軍人は、未だ痛みに疼く体をどうにか起き上がらせると、愛弟子の肩を抱きしめた。

「君が……助けてくれたんだね」

退役軍人は、慈しむようにその銀色の髪をなでる。

「ありがとう……本当にありがとう……!」

退役軍人が放った最後の弾丸、その代償に選んだもの。それは、彼自身の心臓か、それとも、愛弟子の心臓か。いずれにしても、悪魔の呪詛を鑄潰した契約の弾丸は、半闇狩人の乾坤一擲の矢の前に撃ち落された。

そして、退役軍人の目の前で、鏃に撃ち貫かれた弾丸は、抉り出された心臓のように、一度、ぶるりと脈動すると、粉々に砕け散った。

「使わないって言ったじゃないですか!使わないって言ったじゃないですかあつ!!」

「ああ、ごめんよ、本当に、ごめんよ」

悲痛な声と共にぼかぼかと胸甲を叩き、再びすがりついて泣き続ける愛弟子の姿に、退役軍人は素直に自らの非を詫げる。

「本当にごめんよ、私が悪かったから、どうか、もう泣かないでくれ」

どこまでも健気な我が愛弟子、退役軍人は、心の底から詫び、心の底から感謝する。

「さあ、私にはまだやらなければならないことがあるからね」

微かに抵抗する半閹狩人をなだめながら、ゆつくりと彼女の腕を解き、退役軍人は、ただ抗議の悲鳴を上げる全身を奮い起こすように立ち上がった。

「あんまり気が進まないんだけどね」

気楽な言葉と裏腹に、その表情は覚悟と決意に引き締まる。

「悪いことをしたら、叱らないといけないからねえ」

「もう少しで……もう少しで、あの子の魂をつれてくれたのに……」

真つ青な顔でつぶやく巡礼尼僧、しかし、その目は、狂気に満ちた怒りで歪む。

意味がわからない、あの男が最後の弾丸を撃ち、目を覚ましたあの子が矢を射たと思えば、あの忌々しい弾丸は撃ち落とされ、あの男を噛み殺すはずだったケルベロスは、お菓子を食べて帰ってしまった。

一瞬でこれだけの光景が現れて消えた。こんな莫迦な話がどこにある、こんなくらない喜劇にもならないような話のために、自分がこれまでかけてきたものが、全て無駄になった、全てぶち壊しになった。

「こんな、こんな莫迦な話がどこにある。」

「番犬が追い返された、もう、通り抜けられない……！」

わなわなと震える手は、血の気が引くほどに強く錫杖を握りしめる。飢えと渇きで縛り、従わせていたケルベロス。しかし、よりによって、冥府の魔獣が最も愛する甘味でその飢えと渇きを満たされてしまった。そうなってしまったら、もう正気に戻った魔獣を再び呼び戻すことは容易ではない。まだ、弟の魂を探し当ててもいないのに。

こんな、こんなくだらないことで。巡礼尼僧は、まったく思いもしなかった結末を前に、その細い腹におさまる臓腑が煮えくり返るような怒りが沸き上がる。

「よくも……よくも……」

巡礼尼僧は、怒りと憎悪の入り混じった息を吐き出すと、振りかざした錫杖を水平に構える。そして、呟いたのは魔力付与の呪文。頭の中に、神がうるさく何かを訴えかけてくる。さつきからずっとそうだ、ごちゃごちゃと、ぎやあぎやあと。だが、知ったことか。お前が今まで一体何をしてくれた、誰も、何も、救えないくせに、救ってくれないくせに。

「雷与（エンチャント・サンダー）」

巡礼尼僧の詠唱と共に、錫杖の杖頭が紫電の如き光を放ち始める。その瞬間、光の矛と化した錫杖を旋風のように振りかざし、唸りを上げる雷撃のような一撃を退役軍人がかけて繰り出した。

地底の仄暗い空間に一瞬飛び散る電光、錫杖の一撃を左腕の小盾で受け流した退役軍

人は、それでもなお、巡礼尼僧から目をそらすことなく対峙する。さつきよりは随分ましになったとは言え、呪いの残渣か、呪いを成就できなかった悪魔の報復か、未だ全身を激痛が駆け巡る。しかし、なににするものぞ。自分の痛みに比べれば、彼女の痛み、苦しみはいかほどのものか。

（私が邪魔したようなものなんだ）

退役軍人は、そう自分に言い聞かせると、精一杯の気力と見栄を振り絞って胸を張る。血の匂いのする鼻の奥、血の味がする口の中、今にも耳から脳みそが噴き出しそうな圧迫感を伴う頭痛。胸の中を、腹の中を焼け火箸でかき回すような疼痛。それでも、それら全てを意識の隅に押しやる。

（私が、なんとかしなけりやあね）

確固たる決意とともに、退役軍人は、紫電の光を帯びる錫杖を手に、見たことのないような目で自分を見据えている巡礼尼僧の前へと歩みを進める。

「またやりなおしだ……また、最初から……っ！」

「次はないよ、もう、こんなことは許さないからね」

退役軍人は、穏やかに言い返すと、自分をかばうように駆け寄ってきた若い戦士に話しかけながら、彼の構える剣を指さす。

「君、すまないけど、少し剣を貸してくれないかい？」

「は……はい！どうぞ、先生！」

「ありがとう、お借りするよ」

とうとう、あの剣技を。退役軍人の思いがけない言葉と、湧き上がる期待に若い戦士は鼓動を高鳴らせる。そして、戦士から剣を借り、その刃こぼれが酷く、傷み切った鋼の剣を掲げる。

「すまないとは思うけれどね、もう諦めてはもらえないのかな？」

穏やかに問いかけた退役軍人に対する巡礼尼僧の返答は、憎悪に歪んだ顔の中に光る緑色の目。かつて見た、そんな見覚えのある光景に、退役軍人は用意していた言葉が虚しく消えていくのを感じる。

「———そうか」

退役軍人は、寂しそうにため息を吐き出し、まっすぐに彼女を見る。

「残念だよ」

そして、右手に提げた剣の感触を確かめるように握りしめ、一言、魔力付与の呪文を頭の中で組み立てる。後は詠唱するだけ。しかし、体力はもう限界、果たしてこんな有様でもつだろうか、そんな弱気な考えが一瞬頭をよぎる。

(なにを言ってるんだい、あの時に比べたら、ぜんぜん『まし』じゃあないか)

退役軍人は、そんな逃げ腰の自分を叱り、笑い飛ばす。相手は銅等級、在野の冒険者

としていうならば、熟練された技量をもつと考えて構わない存在。一方で、こちらは氣力体力も限界に近い、若く、そして銅等級である冒険者相手に、どこまで戦えるか。

(なんでもかんでも、歳のせいにするのはいい加減やめたまえよ)

頭の中で自分を鼓舞し、叱咤してみる。しかし、そうは言っても、辛いものは辛い。それでも、できるかできないかではない、やるのだ。自分が、やるのだ。

「――炎与（エンチャント・ファイア）」

何十年ぶりにかに唱える、魔力付与の呪文。突然の無茶な要求に、心臓が抗議するかのように一瞬大きく脈打ち、頭が爆発してしまいそうな激痛が襲う。それでも、齒を食いしばり、懸命に、懸命に、退役軍人は意識を繋ぎ止めようと懸命に呼吸を続ける。

そして、退役軍人の握る傷だらけの剣は、炎を凝縮し錮（はばき）から切っ先へと光を帯び始め、その刀身を深紅に染めあげていく。大気を紅い鮮烈な光で照らし上げる光り輝く刀身、それはさながら、光の剣。

久しぶりに詠唱した魔法、消耗しきった体には耐え難い負担。燃え上がるような肺へと空気を送り続けるため、繰り返す呼吸は面頬の中でこもり、喘息を患った者のように低く響き渡る。

「もう一度聞くよ、諦めては、もらえないのかい？」

素知らぬ顔で苦痛を覆い隠し、巡礼尼僧に向かつていつもの調子で問いかける。最後

通牒のようにも、懇願のようにも聞こえる退役軍人の声。しかし、彼女の回答は、唸りをあげて繰り出された紫電の一撃。

「仕方のないひとだねえ、まったく」

胸板めがけて繰り出された錫杖の一撃を、赤く光る刀身が翻りすくい上げるように受け流す。それでも、空間を翻り、なおも稲妻のように繰り出される錫杖の連撃を、退役軍人は取り乱すことなく軽やかな剣さばきで受け止め、受け流し続ける。

紅く閃く刀身が、虚空を踊るような軌跡で光の残像を残し、それはまるで、演武の舞のように洗練された、鮮烈な軌跡を描き上げる。

深紅と紫電の光がめまぐるしく空中に踊る、退役軍人の喉元に向けて鋭く撃ち込まれた一撃が深紅の剣に弾かれるが、杖頭の遊環が退役軍人の兜を掠め、サレットヘルムの表面から火花が飛び散る。兜下を通してでさえ、頭蓋を揺さぶるような強烈な衝撃に、一瞬本気で意識が飛びそうになったが、意地と根性でどうにかつなぎ留めた。

「君、頭はよしなさい、頭は。ものすごく響くんだよ」

「うるさい、二！」

こんな時にまで、いつもの軽口。巡礼尼僧は、より一層目を釣り上げ、怒りのままに打ちかかるが、退役軍人も正確な太刀筋で受け止め、魔力同士の斥力で一撃一撃を弾き返していく。

ほとんどその場から足を動かさず、虫か何かを追い払うかのような片手で無造作に振るう剣さばき、巡礼尼僧の怒りと苛立ちが加速する。しかし、それも退役軍人がそう仕掛けたこと。

(惜しいね、でも、冷静になられたら、おしまいだからねえ)

突きが、打ち込みが、横払いが、千変万化の組み合わせで襲い掛かってくる。こんな時でもなければ、見惚れるような杖捌き、そして立ち回り。しかし、稲妻のような閃光とともに繰り出される錫杖は、彼女自身の怒りの感情に絡み取られ、それが打ち込みの鋭さを鈍らせ、どうにかしのぐことができています。

それでも、間合いの違いと、元からの高い技量から繰り出される暴風のような連撃は、一撃でもまともに喰らえば、電撃の魔力を帯びた錫杖が自分の肉や骨を粉碎してしまうだろう。

もはや立っているだけでも精一杯、鉛のように重く、疼痛が響く両足で、こうして立っていられるだけでも、自分で自分を褒めたくなる。

しかし、そんなことを言っている場合ではない。場合では、無いのだ。もっと大事な、大切なことに始末をつけなければならぬ。それは、自分の責任でなさねばならない。事の善し悪しはどうあれ、彼女の希望を自分が踏み潰したのは事実なのだから。

「君の気持ちは理解できるつもりだよ、大切な人を亡くした辛さや寂しさは、他人の言葉

じゃどうにもならないってこともね」

目の前でめまぐるしく軌道を変える錫杖を迎え撃ち、受け流しながら、退役軍人はなお巡礼尼僧に言葉をかけ続ける。かけがえのない家族であった弟を失った気持ち、それは痛いほどわかる。

「うるさい！お前に何がわかる！お前が邪魔さえしなければあの子は帰ってくるんだ！！」

そして、彼女の言い分であれば、弟は魂を取り戻し、この世に帰ってくるはずだったという。

（そんなわけ、ないじゃあないか）

退役軍人は、なおも激しく打ち込まれる錫杖の打擲の隙間から、祭壇に横たわる巡礼尼僧の弟の姿を見る。血の気どころか生氣すらなく、その体は、外法によって組み上げられた偽りの血肉のためか、濁った瑪瑙のような蛇紋すら浮かび上がる。

「A……U……AAA……」

開いた口からは、だらしなく液体が流れ続け、質の悪い大理石を埋め込んだような目は、ぼんやりと開かれているが、もはやどこにも焦点を結んではいない。

（もう、これ以上彼を苦しませるのはやめなさい）

偽りの肉体に、むりやり押し込めようとした魂。彼女は、地獄の番犬が冥府へと帰っ

ていったことで、御破算になったと思っっている。だが、本当にそうだろうか。

(よく見なさい、彼が、苦しんでいるじゃないか)

もはや、怒りと憎悪で曇りきった彼女の目には、もうそれすらも映らない、気づかない。
い。

(彼が、泣いているじゃないか)

半闇狩人にしても、若い戦士にしても、今この場にいる人間で、彼女の気持ちか推し量れないものがあるだろうか。いや、彼らだけではない、誰だって大切なものを失い、それに向き合つて、辛さ、痛さ、悲しさ、それらと懸命に折り合いをつけて、それでも前に進もうとあがいてきた。

去りゆく人、残された人、どちらが辛いのか、どちらが苦しいか、そんなことは論じるだけ無意味なこと。ただひとつ確かなことは、残されたものは、今を生きていかなければならない、ただそれだけ。

「ねえ、ひとつだけ言わせてもらおうよ、尼僧殿。君は、あの弟くんの姿を見て、なにも思う所はないのかい」

「なにを………っ!?!」

退役軍人の一言に、錫杖の動きにほんの一瞬迷いが生じる。その刹那を逃すことなく、退役軍人の剣は錫杖の杖頭を抑えつけた。互いの武器が帯びた魔力の斥力で激しい

火花を散らし、溶接してしまったかのようにびくとも動かない力に、巡礼尼僧の振るう錫杖は動きを封じられる。

「私はね」

錫杖を押さえ込みながら、退役軍人は苦しい呼吸を懸命に整えつつ巡礼尼僧に話しかける。面頬の奥で響く呼吸音が、さらに高くなる。

「軍団を裏切り、家内を死に追いやった者を許さなかった。だから、どこまでも追いかけて、八つ裂きにしたよ」

おおよそ、この男の口から聞くととは思わなかった、酸鼻な言葉。しかし、その言葉も、態度も、いつもと変わらぬ、優しく穏やかなもの。

「私はね、兄さんを殺したんだよ」

それすらもまるで、昔を懐かしむような穏やかな声に、巡礼尼僧に戸惑いと動揺の色が浮かぶ。

「とても優しい兄さんだったんだ、少し体は弱かったけれど、それでも、子供のころからいつも一緒だった。沢山遊んでもらったし、いろんなことを教えてくれたよ。冒険者だった家内との結婚だって、家族みんなが反対しても、兄さんだけは味方になってくれたんだ」

懐かしい日々、暖かく、優しい思い出をなぞるように、退役軍人の言葉は、いつにな

く穏やかになる。

「それなのに」

汲んできたばかりの水の上に落とした、一滴のインクのような陰りと闇をはらんだため息。

「魔神王の力に絶望し、祈らぬものの外法に魅入られた。それならいつそ、本当は私を嫌いだったから、憎んでいたから、そんな理由だったらどんなに良かったことか」

退役軍人の声は、どこまでも深く、穏やかに語り続ける。

「あんなに優しくかったひとが、あんなに愉快だったひとが、あんなに聡明だったひとが、人外の身になり果てて、人の心も失って、そんな姿なんか、見たくはなかったよ」

そして、退役軍人は、開いた左手で、兜を、面頬を、兜下を、そして、紅い色眼鏡を外し、うち捨てていく。その顔は、血の気が失せ蠟燭のように蒼白となり、白目を塗り潰す紅い目だけが、強い意志の火を示すように光る。

「君は、いつか治癒の魔法や奇跡で、傷痕を治さないのかって聞いたね？でもね、これは、兄さんからもらった最後の贈り物なんだよ。消せるわけじゃないか、治せるわけじゃないか。」

だつてこれは、兄さんがこの世に存在していた証なんだから。忘れちゃいけない、無かったことにしちゃいけないものなんだよ」

顔中を覆う火傷の痕、創傷、そして、満ちた血の引かない、紅く染まった目。それでも、退役軍人の表情は、どこまでも優しく、穏やかにあり続ける。

「私だってね、今でもまだ思い出にすがっているんだ。だから、君に説教できる筋合いじゃないのはよつくわかってるよ。でもね、そのために未来ある若い子たちを犠牲にした事だけは——」

気持ちを固めるように一瞬途切れた言葉、そして、退役軍人は紅く染まる眼で真つ直ぐに巡礼尼僧を見据えた。

「許すわけには、いかないよ」

瞬時に踏み込んだ爪先、そして、バネのように跳ね上がる手首。力の均衡を引き込み崩すように巻き上げた切っ先と共に振り上げた剣に弾かれ、大きく跳ね上がる錫杖の勢いで巡礼尼僧の足元が僅かに傾ぐ。そこへすかさず左右から打ちのめすような連撃に、錫杖が激しく振動するように暴れ、凄まじい火花と共にその手から弾け飛んだ。

「うあつっ!？」

紅い光の帯を引き、力と技の剣が踊る。そして、衝撃の余波は戦意を喪失しかけた彼女の足をよろめかせ、そのまましりもちをつくように石畳の上に転ばせた。

「それでもね、私は君を嫌いにはなれないんだよ」

大きなため息と共に吐き出された言葉。それは安堵か、苦痛の吐露か。しかし、呆然

と石畳にへたり込む巡礼尼僧を前にして、退役軍人はふと振り向くと、石畳に手をつき、子供のように泣きじやくつている半闇狩人の姿に、心底辛そうに表情を曇らせた。

(ああ、(っ)めんよ)

退役軍人は、心の中で半闇狩人に詫げる。こんな有様、本当は見せたくなかつた。あの子が、心から信頼していたひとが、実の姉のように慕っていたひとが、怒りと憎しみに駆られるままその色に塗り潰されている。そして、それを容赦なく打ち倒したのは、他ならぬ自分。

尼僧殿だけじゃない、自分は、あの子の心も、思いも踏みにじってしまった。結局、自分はこの生き方しかできないんだらうか。誰かを悲しませて、誰かを怒らせて、誰かを絶望させて。そして、誰かに憎まれて。

やっぱり、そう簡単には人は変われやしない、ということなのかな。退役軍人は、全てを諦めたような重い嘆息を吐き出す。そして、恐怖の色に塗り潰された巡礼尼僧に目を向けた。

「君は、あの子を守ろうとしてくれたよね」

一歩、歩み寄る退役軍人。

「ひ……………っ！」

そんな退役軍人を見上げ、巡礼尼僧はまなじりを見開き、魔物を前にした少女のよう

に、へたり込んだまま逃げるように後ずさる。

「地下水道で命を落とした子達を、吊ってくれたよね」

退役軍人は、心の底から怯えている巡礼尼僧の前に、小さくため息をつく。無理もない、今の彼女には、自分が血も涙もない悪鬼に見えるだろう。そして、彼は諦めたように、思いやるように立ち止まった。

「私だって、もう一度会えるものなら、会いたいよ」

そう言つて、退役軍人は照れくさそうに笑う。

「兄さんに会えるのなら、会いたいよ。家内に会えるのなら、会いたいよ」

そう言つて、退役軍人は今にも泣きそうな顔で笑いながら、炎与の魔法を打ち消し、紅く光る刀身は、もとの鋼の剣に戻つていった。

「だから、わかるよ」

静かに巡礼尼僧の前に膝をつき、まっすぐに彼女の目を見て言つた言葉。

「私はね、やはり冒険者になつてよかった、そう思っているよ」

そういつて、退役軍人は、泣いている半闇狩人を、唇を噛みしめる若い戦士を振り返り、そして、ひどく震えている巡礼尼僧に目を向ける。

「君達に会えたんだから、でなけりゃ、私は今でも失つてばかりの負け犬のままさ」

悲嘆、後悔、感謝、およそありとあらゆる感情が入り混じつたその笑顔。

「だから、私は君達に感謝してるんだ」

退役軍人は、劍を取めるように左手に持ち替え、右の掌を胸に沿える。そして、どこまでも穏やかな笑顔で言葉を贈る。

「嫌いになんて、なれるわけないじゃないか」

やはり、私は間違っていたの？

冷たい石畳の上にへたり込みながら、巡礼尼僧の中で、これまでのことが浮かんでは消える。

両親と死に別れ、歳の離れた弟とふたり。自分が、親代わりになる覚悟はあった。しかし、弟と共に、農園を営む伯父夫婦に引き取られた。それでも、決して楽ではなかった生活。来る日も来る日も、弟や従兄妹たちと肩を並べ、朝日が昇り、陽が沈むまで、畑と共に働いた。

寺院に入ったのも、自ら口減らしになるつもりだった。どこかへ嫁ぐにしても、持参金の工面などできるはずもなく、かと言って、伯父夫婦にそれを期待することなど、これ以上の負担を強いるなど、とてもできることではなかった。

ちがう、それは建前。本当は、農奴として一生を終わるのが嫌だった。従兄弟たちですら避けられぬ運命、それがどうして、自分達姉弟が免れるはずがあるうか。だから、弟

には、必ず迎えに来るからと約束し、伯父夫婦の家を出た。

僧侶となり、神職を務め、それでも、未だ修行の身ゆえに各地を巡礼する必要があったから、冒険者の資格も得た。冒険者として得た金は、全て伯父夫婦に送った。逃げた罪滅ぼしに、弟の居場所を守るために。

そして、ある日寺院を訪れた冒険者から受け取った弟からの便り。どこで字を習ったのか、読みづらかったが、それでも懸命に書かれた弟の字は自分にこう伝えた。

自分も冒険者になった。

あの家で、粗末にされていたとは、いじめられていたとは思えない。実際、伯父夫婦も、決して裕福ではなかったが、それでも親身になつて自分達姉弟の面倒を見てくれた。従兄弟たちも、本当の兄弟のように仲良くしてくれた。

そのことは、今でも本当に感謝している、誓つて嘘はない。それでも、弟はあの家を出て自分の力で生きて行こうと決めた。それでも、仕方ないと思つた自分がいたのは事実。それでも、弟からの手紙を心から楽しみにして、心の糧とした。そして、いつか会いに行こう。そう思つていた矢先のこと。

弟が流れていたこの町から冒険者を介して送られた手紙は、ある日を境に途切れてしまった。初めのうちは、忙しいのかと、冒険者としてもう誰にも気兼ねすることなく、自身の力で日々を生きているのだと思つていた。

それでも、ざわつくような予感。朝も、昼も、夜も、それはいつまでもまとわりつき続けた。そして、意を決して訪ねたこの町で、この町の地下下水道で、弟は消息を絶つたことを知った。

何日も、何日も、地下下水道を捜し歩き、そして、ある日とうとう見つけた、僅かな骨の欠片と、ぼろきれのようになった衣服と、白磁の認識票。全部かき集めても、両手の平に乗る分しかなかった。

間違いだと思いたかった、これは、他の誰かのものだ、そう思いたかった。そう信じなかった。しかし、白い板に刻まれた名前は、何回読み返しても、どんなに夜をまたいでも、それは他の誰かの名前になってくれることは決してなかった。

弟は、塵芥になってしまった。

自分が、弟を残して家を出なければ。

自分が、冒険者にならなければ。

自分が、

自分が、

どんなに考えても、どんなに後悔しても、取り返しのつかない現実。考えれば考えるほど、狂いそうになった、命すら断ちたいと思った。なのにできなかつた、狂うことも、死ぬことも。

他人の死に立ち会って、したり顔で説法をしていた自分を張り倒したくなった。いざ、自分の身に降りかかってみてわかる、その辛さ、その痛さ。両親を亡くしたあの痛みが鎌首を持ち上げて蘇り、神仏の道を修めたはずの自分の心をずたずたにした。

当然だ、自由欲しさに逃げ出した自分には。神仏に仕えると言うことを、もつともらしい言い訳にした自分には。どうして受け止められようか、鎮めることができようか。まるで臓腑を全てもぎ取られてしまったかのような、どうにもならない喪失感を抱えたまま帰路についた旅路の途中で手に入れた、小さな銀の笛。それが、歯車をおかしくした。いや、自分がおかしくした。

寺院に隠れて魔道を学び、魔術を学び、外法に手を染めた。躊躇いも迷いもなかった、今から考えれば、本当にどうかしていたとしかいいようがない。何人たりとも許されない、禁じられた遊び。ことある度にやかましく問い掛けてくる神仏の声も、無理やり聞こえないふりをした。

機が熟し、扉の場所を選んだのは、弟が命を落とした町の地下。弟が、迷いなく還つてこれるように。そして、とうとう現世と幽世の扉を開き、その向こう側に足を踏み入れた時、冥府の門を守る番犬を目の当たりにした時、真っ先に感じたのは、恐怖ではなく希望。弟の魂を、再び明るい地上に連れ戻せるという、希望。

地獄の番犬を欺いて、人々を欺いて、それでも、その一切に目を向けなかった、いや、

反らしていた。本当はよくわかつていた。全部、全部間違っていることを。似非僧侶と神仏から誹られようが、どうでもよかった。

それでも、病に苦しむ者に対しての奇跡は、不承不承ながらも認められたが、前より自由にはならなくなった。それでもかまわない、とさえ思った。自棄などではなく、本当にそう思っていた。

弟さえ帰って来れば、全てを投げ出してしまっても構わないと思っていたから。そして、一縷の希望にすぎり続けた、すがりたかった。それでもしななければ、到底耐えられなかったから。そして、そうしている内に、何が正しくて、何が間違っているのかも曖昧になった。

ふと顔を上げると、彼の肩越しに見えた、粗末な石造りの祭壇に横たわる弟。遺骨の欠片を芯にして、禁呪で組み上げたその體。ただ横たわり、うめき声をもらし、意思の光も感じられない目を虚空に向けるその姿は、動屍體とさえ言えない有様。

みんな、

みんな、無駄だったんだ。

もう、疲れた。

もう、やめよう

ただ、その前に――

唇を噛み締め、険しい覚悟を秘めた目で、巡礼尼僧は静かにその顔を上げた。足は萎え、立ち上がることができない。それでも、この詠唱を紡ぎ上げることに何の支障もない。もう、あれだけうるさかった神仏の声も聞こえない。当然だ、これだけの事をしておいて、なおも加護や慈悲をくださすことなどありえない。

もう、何もかもに、見捨てられた。

いけない、もうなにも。

みんな捨ててしまおう。

『カリブンクルス——クレスクント——ヤクタ』

火球の呪文、詠唱しきったその刹那、巡礼尼僧が掲げた両手の平に、蒼く燃え上がる炎が浮かぶ。そして、ゆっくりと炎の渦が凝縮していき、やがてそれは炎の砲弾へと変わる。およそ、神仏に仕える者が身に付けていいものではないはずの技がなす、魔術の炎を頭上に掲げる。

それを前にしてもなお、魔術の炎に照らされてもなお、退役軍人は微動だにせず、ただ静かに巡礼尼僧を見守り続ける。そして、巡礼尼僧も、真っ直ぐに、穏やかに、自分を見守るようなその目に気付く。それは、いつもと変わらない、心ごと包み込むような、温かで穏やかな目。

「う……………うう……………うああああああああああああつっ!!」

もしかしたら、初めて冥府に足を踏み入れたその時、一緒について来てくれていたのかも知れない。こんな、愚かな姉を案じてくれたのかもしれない、見かねたのかもしれない。けれども、もしそうだったとしても、それに気づけない、気づかなかった、本当に莫迦な自分。

「……………ごめんね」

巡礼尼僧は、震える膝で懸命に立ち上がる。そして、頼りない足取りで弟の元へ、そして、炎に包まれたその体を抱きしめた。

「ごめんね……………ごめんね……………！」

手の平が、頬が、髪が、炎で炙られることもいとわず、その手は弟の頬をいとおしむように撫でる。そして、それが別れの合図であったかのように、その體は炎と共にぎあつと崩れ落ち、やがて、一握の灰となった。

ありがとう、ねえちゃん

風の吹き抜ける音にも似た声。退役軍人は、静かに黙禱を捧げる。そして、二度も弟を失い、押し黙ったまま膝を落とし、何もかもが抜け落ちたような表情を浮かべた巡礼尼僧は、罪人のようにぎこちなく膝をすり、退役軍人へ向き直ると静かに頭を垂れた。

「……………黒騎士様、どうか、お願いがございます」

「なんだい」

「私めの犯した罪、償う覚悟はできております、せめて……せめて、黒騎士様の手で、介錯をたまわりとう存じます」

「嫌だよ」

退役軍人は、自分の前に跪き、首を垂れる巡礼尼僧に簡潔な答えを返す。

「これ以上、私に嫌な事をさせないでおくれ。もうこれ以上は、たくさんなんだよ」

穏やかで、しかし、確固とした拒絶の言葉。巡礼尼僧は、退役軍人の靴にとりすがり、額を擦りつけるようにひれ伏して懇願し続けた。

「黒騎士様、そこを曲げてお願い申し上げます。どうか……どうか、この愚か者に、お慈悲をお与え下さいませ……！」

「だから、嫌だと言ってるのに。しつこいね、君も」

大きいため息をつきながら、退役軍人は、まるで罪人のように縮こまる巡礼尼僧の背中に言葉をかける。

「君は、死ぬことは許されないよ、生きて、一生、死ぬまで生きて行くんだよ」

残酷な言葉。そんな、もうこれ以上、私にどうしろと。

「何故……何故でございませうか……黒騎士様……」

「決まっているじゃあないか、君ともあろうものが、楽な道に逃げてどうするんだい？ 法や神様が許しても、私は、そんなこと絶対に許さないよ」

あくまでも拒絶を貫く退役軍人の言葉に、巡礼尼僧は打ちひしがれるように力なく肩を落とし、虚ろに目を泳がせる。そんな彼女の前に、退役軍人は静かに膝をついた。

「君、私を見なさい」

敵かな退役軍人の声に、巡礼尼僧は抗うこともなく素直に顔を上げる。その瞬間、頭の天辺に軽い衝撃が走る。

「黒騎士……様……？」

父親が、悪さをした娘に与える罰のような、強くもなく弱くもない力で振るわれた拳骨ひとつ。それが、退役軍人が巡礼尼僧に下した、罰。

「自分の命くらいで、償いをした気になってもらっちゃ困るよ？君はこれから、生きて大変な目に会いながら、それでも、自分のしたことを償っていかなきゃならないんだから」

退役軍人は、拳骨を浴びせた頭をいたわるように、一度優しくなでた後、静かに巡礼尼僧の目を見て言う。

「君には、さっきの声が聞こえなかったのかい？君は、弟くんを故郷に連れて帰ってあげるんじゃないよ？それをお忘れちゃあ、いけないよ」

「私は……」

「聞こえた、確かに、聞いた。あの子が、最後にくれた言葉。」

「辛いのはこれからだろうね、それは間違いないよ。でもね、君は、自分のしたことを決

して忘れちゃいけない、そして乗り越えないといけないよ。それが、償うってことじゃないのかい？」

退役軍人は、静かに笑うと巡礼尼僧の肩に手を置いた。

「でもね、それが終わったら、いつでも帰っておいで。私たちは、君が帰ってくるのを待っているよ。ずっと、待っているからね」

静かで、穏やかな退役軍人の言葉。初めて会った時のように、昼下がり、大きな木の木陰で身を休めているような。まるで、子供の頃に帰ったような、あの安心感。

「黒騎士……様………」

こんな自分を、それでも待つという。抑えきれない感情が、堰を切って溢れ始める。火傷でたかれたその手の下にある弟の遺灰、それをかき寄せ、手に包みながら、胸の底からこみ上げてくるありとあらゆる感情を抑えきれなくなる。

そして、巡礼尼僧は子供のように背中を丸め、声の限りにわあわあと泣いた。ただ心が求めるままに、全てを吐き出そうとするように。そんな彼女を、退役軍人はただ静かに見守る。

「いいんだよ」

退役軍人は、細い肩に手をおきながら、静かにうなずいた。

「誰だって、辛い時は泣いていいんだ」

退役軍人は、やがて静かに巡礼尼僧の肩から手を放し、深く息を吐く。そろそろ、自分も限界の時間が近づいてきた。

「すまない、君、彼女たちのこと、後は頼んだよ」

そう、すべて終わった。そして、見守るように立ち尽くしていた若い戦士にひとつ頼み事を言い終わり、いつもの調子で笑顔を浮かべた後、退役軍人の視界は静かに闇の中に滑り落ちていく。

「黒騎士様?……黒騎士様!!」

「先生!」

「お師匠様!!」

ぐらりと、と、その大きな体が傾いて、退役軍人は、そのまま石畳の上に崩れ落ちた。

「お師匠様、嫌です!起きてください!お師匠様!!」

退役軍人に取りすがり、声の限りに叫び続ける半闇狩人の姿を、巡礼尼僧はただ茫然と見つめ続ける。そして、その姿が、かつて昔、両親を亡くした時の、弟の姿と重なった。

わたしは、いったいなにをしてしまったの。

あの時と、同じ苦しみを、痛みを、悲しみを。何の関係もなかったこの子に与えてし

まった。自分が、この子から、生きる希望を奪い取ってしまった。

わたしは、いったいなにをしてしまったの。

再び、同じ問いを自分に投げかける。

こんなはずじゃ、こんなつもりじゃなかったのに。

うそだ、またわたしはうそをついた。あのとき、死んでしまってもかまわないと思つてケルベロスをけしかけたくせに。

「お師匠様！お師匠様！起きて！起きてくださいよおっつ！！」

血を吐くような、悲痛な声。あの時と、全く同じ、同じだ。あの子が泣いている、なのに、自分はもう何もできない、する資格もない。神仏に見放されてしまった、自分には。

どんなに祈り、請うても、神からの返事はなく、ただむなしく時だけが流れていく。そして、ただ、ただ。あの子の慟哭が耳を打つ、この子には、あんな思いはさせたくなかった、それなのに。

それなのに、あの、おおきくて、やさしかったひとは、いまはもう虫の息。聞きたい、もう一度、あの声を聞きたい。叱られてもいい、怒られてもいい、だから、せめてもう一度。

それなら、自分の魂と引き換えにしよう。

せめて、このひとだけは。覚悟と決心、これが、わたしの最後の祈り。

誰もいない部屋にむかつて懸命に呼びかけているような虚しさをふりきって、それでも、巡礼尼僧は暗闇に向かつて祈り続け、呼びかけ続けた。それでも、だめ、なにもきこえない、なにも、かえってこない。

お願いです、許さないというのなら、この魂を持って行ってください、この命を、持つて行ってください。どうか、このひとを、あの子を、悲しみから、痛みから救わせてください。どうか、どうか、どうか、どうか――

何かが、激しく、散々言い争っているような声が聞こえる。あの子が、自分を責めているのかと、最初はそう思った。それは仕方のない事、罵られても仕方のないことを自分はしてしまった。けれども、何かが違う、何かがおかしい。

頭の中に直接届くような声、そして、やがてその片方が折れたように、諦めたように、語気が弱くなる。そして、もう片方が、急かすように、励ますように語りかけてくる。

こんなわたしにも、まだできることがあるの？

戸惑いと希望がないまぜになったまま、巡礼尼僧は横たわる退役軍人に向けて、治療の奇跡を祈り詠唱する。そして、鍵の開いた扉のように、再び顕現する奇跡の光が照らし上げる。その、小癒の光とは比べ物にならない光が退役軍人の身体を包む。しかし、彼は目覚めない。

「どうして……どうして……?!」

じわりと這い上がる焦燥、恐怖、動揺、それらを打ち消して、もう一度向き直る。ならばもう一度、自分の意識が、精神がすり減り無くなってもかまわない。この力が続く限り、奇跡を祈り続ける。そして何度も祈り、請うた治癒の奇跡。

しかし、それでも退役軍人の意識は戻らない。限界を迎えつつある精神と肉体。頭が割れるように痛い、眼球が飛び出しそうになり、体を焼け火箸でかき回されるような痛みが貫く。

あの人は、これに耐えていたの。

巡礼尼僧は、彼と剣を交えた時の事を思い出す。ならば、自分も、全てをなげうってでも、たとえここで力尽きてもかまわない。それで、このひとと、あの子をすくえるなら。

「もういっく」

若い戦士の声、制止するような声と共に、静かに首を振る。

「貴女が倒れても、先生は喜ばない。もう、いいんだ」

そんな、でも、それでも。

動揺、絶望、焦燥、それらがなまぜになつたその時、笑い声のようなものが聞こえた。

へらへらと

勝ち誇るように

自分を、自分達を、嘲笑っている。

彼の魂の在処、そこに、小さな悪魔がしがみついている。なんで、お前がそこにいる。でていきなさい、そこは、お前のいい場所なんかじゃない。

彼を、まだなおも縛る呪い。契約が成就されなかった腹いせに、ならば彼の命を、魂を持ち去ろうというつもりか。そうはさせない、誰がお前などに、このひとの魂を、命をくれてやるものか。

最後に残った心の火種、今にも消えそうなくらいに揺らめくそれに、彼女はためらいなく祈りの息吹を吹き込み、燃え上がる炎に変える。わたしがわたしでなくなっても構わない、でも、最後の炎は、今この時の為に。

我が掌は火焰の如く、されど、その心は明鏡止水。巡礼尼僧の右手が、紅く燃えるように光を帯びる。そして、退役軍人の顔を覆うようにその手を乗せた刹那、彼女の掌は光の波動となって、その顔の向こうに浸透していく。

羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩提薩婆訶

灼けつくような掌の痛み、爪を剥がされ、生皮を剥がれるような激痛。手指の骨を割

り砕き、手首から先を消し飛ばしてしまいそうな衝撃に、顔を、全身を、冷たい汗が覆いつくす。それでも、巡礼尼僧は真言の詠唱を唱え続け、その精神をなおも研ぎ澄ませていく。そして、神仏からの最後の加護と共にあるその細指は、やがて禍々しきものを掴み取った。

神の加護の宿る指から逃れようと、もがき、暴れる契約の呪い。しかし、その指は決してそれを離さない、許さない。やがて、静かに引き上げたその手には、紫炎の揺らぎがなおも見苦しく揺らめき動く。

「剥呪（リムーブ・カース）」

巡礼尼僧の眩きと共に、握りしめた神の指。その刹那、呪いの残渣は完全に握り潰された。

地下下水道の暗闇の中を、半闇狩人はひたすら走る。呼吸を取り戻した師、それと引き換えに、力を使い果たし昏倒した巡礼尼僧。ふたりは、戦士が守ってくれている。こんな暗闇の中を、明かりももたず走り抜けられるのは自分しかない。そして、今まで辿ってきた道のりを空で覚えているのも自分だけ。

地底の急傾斜を必死に這い上がり、真つ暗な地下下水道を駆け抜け、そして、町へ。汚泥にまみれ、それでもひた走る半闇狩人を、町をゆく人々は何事かと立ち止まり、振り

返る。それでも、彼女は冒険者ギルドを指し、今にも外れ落ちそうな膝を叱咤しつつ、走り続ける。

ようやくたどり着いたギルドの建物、安堵に緩みそうになる心を胸の奥に押し込め、夕暮れに染まり始めたその扉に体当たりするように飛び込んだ。そして、ギルドの広間に駆け込み、もつれた足がからまり床の上に転がり倒れる。それでも、半闇狩人は懸命に体を引き起こし、あらん限りの声で叫んだ。

「助けてください！誰か、助けてください！！」

ギルドの真ん中で助けを叫ぶ、その刹那、半闇狩人の身体も限界を訴え、血の混じる咳を吐き出しながら背中を丸める。

「お弟子ちゃん？……お弟子ちゃん!?」

そして、苦悶に呻きながら、糸の切れた操り人形のように床の上に崩れ落ちた彼女に、悲鳴じみた呼びかけと共に獣人女給が駆け寄った。

それぞれの出

『お前、よく頑張ったな。さすが、俺の弟だ』

懐かしい声、ずっと、ずっと聞きたかった、あの声。

『あなた、お疲れ様でした』

ずっと願っていた、もう一度聞きたかった、あの懐かしい声

『疲れたろ、今はゆっくり休め。誰も文句は言わない』

ああ、兄さんだ。僕の兄さんだ。

『でもな』

思い直したように、口調を変えた。

『ひと休みしたら、すぐ帰れよ』

どうして、僕はここにいたい。兄さんのいる、ここにいたい。

『あなた、あまりお義兄様を困らせては駄目ですよ』

なんだ、お前まで。久しぶりに会えたのに、ひどいじゃないか。

『いいじゃないか、そう言ってるな。こいつも、ずっと頑張ってきたんだ』

『お義兄様、あまりこのひとを甘やかさないでくださいね』

「お弟子ちゃん、おはようー！」

「さあ、朝ご飯を持ってきたよ。起きれるかい？」

「あ……あ、ありがとうございませいゆ、お師匠さま、お姉ちゃん……」

朝食を載せたトレイを持ち、獣人女給とともに半闇狩人の居室を訪れた退役軍人は、だいぶ回復してきた愛弟子の様子に安堵の笑顔を浮かべる。

極限まで覚醒させた神経、そして筋力。それは、空中を飛ぶ弾丸を短弓の狙撃で撃ち落とすという神業を実現させたことと引き換えに、彼女の肉体を極度に疲弊させた。

目は余計な光が差し込まないよう包帯が巻かれ、耳は余計な音を拾わないよう綿が詰められ、鼻や口は吸いこむ空気の雑味をこしとる綿布のマスクで覆われた。逆に、全身の感覚がほとんど麻痺してしまったため、身体を冷やし過ぎぬよう、熱がこもり過ぎぬよう亜麻布の寝間着。

「それじゃあ、君、申し訳ないけれど、この子の食事、よろしく願いますよ」

「あいあーい、りよーかいです」

そして、獣人女給にたすきを交代。

「ねえ、君。ここに私がいる意味があるのかい？」

いくら家族同然の弟子とは言え、若々しい曲線が浮かび上がる薄衣姿を目にするのは忍びないし、それを見て喜ぶ趣味もない。だから、部屋の隅っこで、椅子に腰掛けなが

ら獣人女給が食事の世話が終わるまで待つ。それが、かれこれ一週間近くは続いているだろうか。それでも、彼女も忙しいだろうに、こうして弟子の看病を進んで協力してくれることには、感謝の念に堪えない。そして、その時間を快く割いてくれた圃人料理長にも。

「なにいつてるんですかあ、だって、先生がいないと怖がつて食べてくれないんですよ？」

によよと笑いながら、獣人女給が振り返りつつ応える。

(そんな、狼の子じゃあるまいし)

退役軍人は、ふうと小さくため息をつきつつも、まあそれも仕方ない、と考え直す。なにしろ、全身がほとんど麻痺しているのに、音や光だけは必要以上に伝わってくる。神殿の術師によれば、筋肉痛のようなもので一過性であり、時間の経過とともに回復すると保証してくれた。が、それでも。

「お師匠しやま……お師匠しやま……」

「ん？どうしたんだい」

幼児のような言葉に、退役軍人は思わず吹き出しそうになるのをぐつとこらえる。別にこの子は甘えている訳でもふぎけている訳でも、ましてや心が壊れてしまった訳でもない。要するに、麻痺した感覚が彼女の舌の動きの滑らかさを奪っている、ただそれだ

け。

「お師匠しやま……わたちの手、ありましゅよね？わたちの足、ありましゅよね……？」
「大丈夫だよ、みんなちゃんとおあるから、安心しなさい。それより、すっかり食べて、栄養を取らなきゃ治らないよ？」

「あい、わかりました……」

「うんうん、それじゃお弟子ちゃん、あーんして、あーん」

ようやく安心したのか、獣人女給に手伝わられて朝食を食べ始めた半闇狩人の様子に、退役軍人も、それならそれでと安心しつつ、小さな椅子に身をよりかける。

「それにしても、ホント頑丈ですよねえ、先生って」

「そうかい？」

「だって、みんな地下から連れて帰った来た時、全然意識がなかったし、顔中傷だらけで」

「いや、これは元々だから」

獣人女給の冗句に、退役軍人は苦笑交じりに応える。自分が呪いの軛から逃れられた理由、それは、全てを見ていたこの子から聞いた。

「お坊様も一週間くらい寝込んだままだったし、戦士さんもしばらく具合悪そうにしましたもん。先生だけです？一晩寝たら元気になったのは」

「ハハハ、まあ、それだけが取り柄だからねえ」

そんなわけではない。

心の中で、獸人女給に詫びながら、退役軍人は半闇狩人の言葉を思い出す。巡礼尼僧が、最後の願いを神仏に祈り、引き換えに彼女自身の命を差し出そうとしたことを。そして、崩れかけた自分の身体を、奪われかけた魂を取り返してくれたことを。

「……お師匠しやまは、ちゅよいんでしゅ、だつて、あたちの、お師匠しやまなんでしゅ」
「うん、そうだよね」

玉子粥を飲み込んで、心から信じる言葉を呟く半闇狩人に、獸人女給は優しくうなずく。

「ホントに、そうだよね」

そんな彼女たちの言葉を聞きながら、退役軍人は寂しそうに笑う。

強くなにかあるものか。

弟子に、若者に、尼僧殿に助けられて、今自分はここにいる。彼らの誰一人欠けても、自分はここにいなかっただろう、助からなかっただろう。彼らに誇れるものがあるとなれば、ただ重ねただけの馬齢くらいなもの。だが、それこそ何の自慢にもならない。

楽しい彼女たちの会話を聞くでもなしに、退役軍人は、ふと取り出した小さな銀色の笛を手の平の上で転がす。巡礼尼僧からの切実な願いで託された、魔銀の笛を。

「やあ、みんな、お疲れ様。よくきてくれたね」

ギルドのロビーに集まった面々を見て、退役軍人は大きな包みを傍らに、いつも調子で手を振って出迎えた。今日は、皆の体調が回復する頃合いをみて、ギルドと調整した報告会の日。

「どうしたんだい、みんな元気ないじゃないか」

若い戦士にいつもの朗らかさはなく、巡礼尼僧にいたっては、これから絞首台に向かうような悲壮な表情を浮かべている。理由は、わかり過ぎるくらいわかっている。

「こんな年寄りに負けちゃいけないなあ、みんな元気出して」

ことさら明るく振舞う言葉も、今は虚しく空滑りするだけ。しかし、退役軍人もなかなか負けを認めようとはしない。

そう、これは必要な事。自分にとつても、彼らにとつても。彼に残るわだかまり、彼女に残る罪悪感、それは、いくら自分が言い聞かせたところで、そう簡単に消えはしないだろう。しかし、理由をつけて彼らを遠ざけ離しては、余計にその溝は深く、暗くなるだけ。だから、最後の締めくくりは、一党全員でなさねばならない。未だ体の自由が効かない、他の何よりも、休息が必要なあの子は仕方がないとしても。

「さあ、ともあれ最後までやるべきことはちゃんとやろう。大丈夫、何も心配いらな

らね」

皆を励ますように声をかけ、退役軍人はギルドに提出する書類や証拠物品をひとまとめにした包みを抱え上げると、いざや報告会場であるギルドの面談室へと歩き始めた。

「ああ、それと」

何かを思い出したかのように、退役軍人は後ろをついてくる若い戦士と巡礼尼僧を振り返る。

「全ての報告と発言は、頭目の権限で私がするから、君達はそのつもりでいるように、いいね？」

ギルドからの要請による地下下水道の再調査、その報告会場に出頭した退役軍人たちの一党。まだ歩くことも、話すこともままならない半闇狩人は療養に専念させることとして、退役軍人と若い戦士、そして、巡礼尼僧が出頭し、地下下水道探索の顛末を報告することとなった。

（やはり、彼女がいるよねえ）

退役軍人は、馴染んだ顔である受付嬢の隣に座る、監督官の姿に無言で唸る。それも当然だろう、通常の依頼任務遂行とは違い、これは、ギルドから直接要請された形の依頼。つまり、公務といってもいい。それに対し、虚偽報告の対策として監督官が同席するのは、当然の流れ。

(まあ、いいさ)

退役軍人は、すでに固めていた意思をもって、自身がまとめ上げた詳細な報告書と、若い戦士が回収していたケルベロスの耳と竜の顎の牙を合わせて提出し、一連の出来事を報告し始めた。

地下下水道は、深部に行くほど経年劣化と整備不足で破損が進んでいる。したがって、再調査と再整備の必要性を具申する。

根拠資料として、調査結果資料及び見取り図、検証用模型等を提出する。

なお、地下下水道坑内で、ケルベロスと遭遇せり。

戦術的撤退及び転進中、ゴブリンの群体を発見、これと交戦せり。

その過程で発見、到達した地下下水道最深部にてケルベロスを邀撃せり。

当該個体については、一党の戦力を集中・連携してこれを撃退せり。しかし、撃破はならず。

証拠品として、ケルベロスの右耳及び竜頭尾の牙を提出するものとする。

大鼠禍および黒蟲禍の原因は、地下下水道に出現したケルベロスであると認められる。

その脅威により、最深部から大規模な大鼠及び黒蟲の移動が認められた。

当面の間は、これらの事例を示し地下下水道に赴く際は注意喚起の要を認める。

尚、ゴブリンの残党が存在する可能性があり、これの探索・掃討の要を認める。

以上、本件事案に関する報告終わり。

「と言う訳なんだけどね」

報告を終えた退役軍人に、同席した監督官が、鋭い目を向ける。ギルドからの直接の依頼という特殊性から、報告の場に同席した監督官は、看破（センス・ライ）の奇跡によつて、意図的に隠蔽されたものの存在を察知していた。

「それは、『嘘』ですね。先生」

「おやおや」

「概ねその通りだというのはわかりました、けれども、貴方は何かを意図的に報告していない。貴方ともあろう方が、何故そんなことを？」

監督官の言葉に、若い戦士と巡礼尼僧は表情を硬くする。しかし、当の退役軍人は、少しも意に介した様子も見せず、悠然とした態度を崩さない。

「そりやあもちろん、これが、私の『報告』だからだよ」

「先生、わかつているとは思いますが、貴方のしていることは、ギルドの規則に反しています。意図的な虚偽や怠業は、処分の対象になります。それはご存じのほうでは？」

やはり、見抜かれたか。退役軍人は、この仕事熱心で責任感の強いギルド職員を前に、小さく苦笑する。

「もちろん、そう判断されたのなら、私もそれ相当の責任は取らせてもらおうよ」
「……………本当のことをおっしゃるつもりはない、ということですか？」

「本日も何も、私たち四人で地下下水道を探索して、大鼠禍の原因も突き止めたし、排除もしたよ。こうして文書にもまとめて、みんなと読み合わせをした上で確認の署名も揃えた。これが、今回の全てさ。そして、この報告書の責任は、全て私にある。そういうことだよ」

「先生、本当にそれだけで済むと思っっているんですか？他の一党の面子に、まったく累が及ばないと、本当に思っているんですか？」

「もちろんだよ、だって、彼らは責められるようなことは何もしていないんだからね」

さっきの報告の中に、意図的に隠されたものがあるという事はわかった。しかし、それ以降の退役軍人の言葉に、それ以上の隠蔽も嘘も感じ取れない。干渉を遮断する術を行使しているか、あるいは心の底から正しいと思っっていなければ、こうはならない。それでもなお、監督官の言葉は鋭く、厳しい。

「場合によつては、資格の剥奪もあり得るんですよ？」

しかし、退役軍人はうろたえない。

「だから、責任を取る必要があるのなら、私が取るのさ。なんと云ったって、この一党の頭目は、私なんだからねえ」

そういつて、退役軍人は首に下げた冒険者認識票を外し、ほんの一瞬だけ、その小さな白磁の板へ名残惜しそうに視線を落とした。

「せっかく頂いた冒険者の認識票だけど、これは、進退伺の代わりにそちらに返上させていただくことにするよ」

「先生!？」

予想もしなかった退役軍人の言葉に、若い戦士は思わず声を上げ、巡礼尼僧の顔がさらに青ざめる。これじゃ、向こうの指摘を認めるようなものじゃあないか。退役軍人は心の中で苦笑つつも、まっすぐこちらに鋭い視線を向け続けている監督官を見る。

「規則に従わなければならぬのは、当然のことだからねえ」

「先生、おっしゃりたいことはわかります。ですけど、どうか落ち着いてください。私たちは、なにもそんな——!」

受付嬢の狼狽する声を制して、監督官はじつと鋭い目を退役軍人に向ける。

「その言葉に、一言はないととらえていいんですね?」

「もちろんだよ、せっかく冒険者になれたのに、もう辞めなければならぬのはとても残念だけどねえ。ともあれ、こうして地下下水道の状況把握ができた、そして対策も具体化できて問題解決はもう、すぐ目の前だ。そうなれば、このギルドの実績も上がるだろうね。実に、いいことづくめじゃないか。それに、道楽で冒険者を始めたおいばれ貴族

が、現実を思い知らされて冒険者を辞めた。そんなこと、良くある話だろうか？」

そんな、あの時、あんなに冒険者になれたことを喜んでいたのに。あれが嘘だったなんて、とてもそうは思えない、思いたくない。少なくとも、自分にとつては。表情を曇らせる受付嬢の様子に、退役軍人は申し訳なさそうな表情で頭を下げる。

「お嬢さんにも、ずっとお世話になりっぱなしだったのに、最後の最後でとんだ迷惑をかけてしまったて、本当に申し訳ないと思うよ」

そして、退役軍人は巖のような胸板を張り、すつと姿勢を正すと、礼儀正しく監督官と受付嬢に一礼する。

「ともあれ、私の報告は以上だよ。この件について全ての責任は私にある、彼にも、私の生徒にも、尼僧殿にも、咎を受けるようなことは何一つないよ」

「……………わかりました、上には、今のやり取りも含め、全て報告させていただきます」

「うん、そうしてくれたまえ。それじゃあ、もういいかな？」

「はい、御苦勞様でした」

「ありがとう、さて、それじゃあいこうか、君達」

一党を促して、面談室を辞去した退役軍人。そして、そのテーブルの上には、進退伺の代わりに置いていった白磁の認識票が、静かに光る。そして、それを前に、ふたりのギルド職員は、それぞれの感情を抱えながら、しばらくの間、沈黙に包まれる。そして、

ややあつて、大きなため息が面談室に流れた。

「それじゃあ、みんな、お疲れ様。尼僧殿は、早く寺院に戻って手当てをしてもらいなさい。痕が残つてしまつては大変だからねえ」

「はい……承知いたしました、黒騎士様………」

「うん、それじゃ、お大事に」

退役軍人に一礼し、しおれた生け花のようにうなだれつつ、とぼとぼと歩き去つていく巡礼尼僧の後姿を見送りながら、退役軍人は、必死に感情をこらえている若い戦士に向き直つた。

「すまないね、君。悪だくみの片棒を担がせるような真似をしてしまつて」

「いえ……そんなことはいいんです、だけど、これはいくらなんでもおかしいですよ………」

「うん、それは本当に申し訳ないと思つているよ。けれども、これが一番いいんだよ。君にも、とても頑張つてもらつたからね。報酬の分配もそうだけど、私の裁量でどうにかできるものなら、君の希望どおりにするよ」

「そういうこと言つてるんじゃないんですよ！」

若い戦士は、たまりかねたように声を荒げて、退役軍人を睨みつける。

「どうして……………どうして、こんなことになるんですか、どうして、先生が冒険者を辞めないといけないんですか……………！」

若い戦士は、やりきれない感情をぶつけるように、退役軍人に叫ぶ。あれだけ真摯に、あれだけ誠実に、そして、自分の命を危険に晒してまで、懸命に事を成し遂げたというのに。そんな彼が、なぜこんな扱いを受けなければならないのか。

一瞬、あの女の顔が浮かぶ。あいつさえ、莫迦なことをしなければ。しかし、それは彼の望まぬ感情。地下水道探索から帰還した後、目を覚ました退役軍人が自分達に對して言った言葉。それは、一党の頭目としての命令や指示ではなく、懇願。

彼がそこまで願うのなら。だからこそ、納得いかなくても、行き場のない憤りを感じても、それは口に出しちゃいけない。必死に感情を抑えつけながら、若い戦士は拳を握り締める。

それに、もし自分が、彼女の立場だったら。誰かを蘇らせることができるかもしれない、もう一度、あの子に会えるかもしれないとしたら。そんな希望が目の前に揺らめいていたら、どうして自分が、それを振り払うことができると言い切れようか。

「おかしいですよ……こんなの、絶対おかしいですよ、先生……………」

「君……………」

「俺は……………俺は、何もしていません……………何もできなかった……………」

力がない自分が悔しい、あんな危険な武器を使う決心をさせてしまった自分が情けない。もっと自分が強くあれば、彼の足を引つ張らずに済んだのに。血が出ん位に唇を噛む若い戦士を前に、退役軍人は静かに慚愧の溜息を吐き出す。

彼に責められるべきものなど何も無い、責められるとしたら、自分の傲慢だ。夜回り程度に捉えていた地下下水道探索、それが、蓋を開ければ本物の問題に出くわすとは。だが、それはいい。見つけたのが、引退した自分だったから。

これが軍団だったら、彼女はもうこの世にいなかっただろう。見つけたのが自分だから良かったなどと言うつもりはない、自分の力を過信して、冒険というものを甘く見た。そんな思いがりが、慢心が、彼に、皆に、辛い思いをさせてしまった。

「俺は、手柄が欲しくて先生と一緒に行った訳じゃないのに……」

少年のように悔しがり、他人の為に憤りを露わにする若い戦士を前に、退役軍人は静かにうなずいた。

「私だって、手柄が欲しくて冒険をしているわけじゃないんだよ」

穏やかな言葉を聞きながら、若い戦士はただうなだれ続ける。

「私の目的は果たすことができた、でも、私ひとりじゃ出来なかった。あの子が、そして、君が手伝ってくれたからできたことなんだよ」

それに、尼僧殿がいなければ、あの子は無事では済まなかった。そして、自分も。そ

の言葉を、敢えて飲み込みながら、退役軍人は、若い戦士の肩に、優しく、静かに手を置いた。それだけではない、彼女の弟の遺灰を、残さず集めおいたのは、彼。そんな彼に、全く余裕のない自分達がどれだけ救われたか。力だけの強さじゃない、人として本当に大切なことを知っている青年。

「これで、今日から町のみんなが安心して眠れる。それが、私にとって一番の御褒美さ」
「先生……………」

「なにもしてないなんてとんでもない、君がいてくれたから、私はここにいられるんだ」
退役軍人は、息子を励ます父親のように、力強く、優しい言葉を送る。

「ありがとう、本当に、ありがとう」

寺院を訪れた黒騎士は、見習い僧侶に案内され、巡礼尼僧の元を訪ねる。あれから、彼女は宿坊に戻らず、拜殿で懺悔と慰霊に明け暮れているという。自分のしたことの代償、それは、闘技以外の全ての力を失った。それでも彼女は、もう神仏に許しを請うこともなく、あるがままを受け止めているという。それが、僧侶としての死に等しいことだとしても。

「やあ、尼僧殿。怪我の方は、どんな具合かな？」

「これは……………黒騎士様、ご足労、感謝いたします」

「何を言ってるんだい、君は。仲間にあうのが苦勞なわけないじゃないか」

怯えるように畏まる巡礼尼僧に、退役軍人はいつもの調子で話しかける。そして、火傷の痕の残る顔と手の平に目を落とし、残念そうにつぶやいた。

「やはり、その痕は、治すつもりはないのかい」

「……………はい」

力なくうなづく巡礼尼僧に、退役軍人は小さくため息をつく。

「私が言ったことを気にしているんなら、それは違うよ？君が気に病むようなことじゃないんだから。でもね、他はともかく、傷痕だけは綺麗にしておきなさい。そんなこと、弟くんも望んではいないと思うよ」

退役軍人の言葉に、巡礼尼僧は一瞬、小さく唇をかむ。両手と、左の頬に残った火傷の痕。贖罪、戒め、そして、弟との別離の証。いや、そんな綺麗なものじゃない。これは、自分の醜さの証。いつか、したり顔であの子に説教を説いた自分が、どうしようもなく滑稽に思える。しかし、ふと顔を上げると、精一杯の強がりのように笑顔を浮かべた。

「それならば、お兄様も同じことを黒騎士様に申し上げるかもしれないね」

「ハハハハハ、これは参った、さすが尼僧殿、これは一本取られたねえ」

「楽しそうに笑う退役軍人を、巡礼尼僧はどこか悲しそうな笑顔で見つめる。あれだけ

のことを彼にしてみましたのに、どうして、この人はこんなにも笑っていられるのだろう。どうして、こんなにも穏やかにいられるのだろう。

「黒騎士様」

「ん、なんだい？」

「……………どうして、黒騎士様は、私めのような愚か者をかばうのですか。罪は罪、その報いを受けるのは当然のことではございませんか」

「まだ言ってるのかい、君は。どうしてなかなか、真面目だねえ……………いや、真面目だからこそ、僧侶なんだしね。私とは、大違いさ」

「黒騎士様、私めはもう、覚悟はできております。こうしてこの愚か者の身を案じて頂けた、それだけでもう十分でございませす！」

巡礼尼僧の訴えに、退役軍人はふと悲しそうな表情を浮かべる。

「君も、死んだ家内と同じことを言うんだねえ」

「え……………？」

「兄を恨むな、仕方のないことだから。あの時、家内は私にそう言ったよ。もう、十分だから。つてねえ」

時が止まったような寺院の中庭で、ただ風や草木のそよ音だけが、暫しふたりを包む。そして、退役軍人ひとりが時間の流れに逆らうようにうなづく。

「十分な訳ないじゃないか、それだと、残されたものはたまったものじゃないよ」

退役軍人は、紅眼鏡の奥の目を細めながら、どこか懐かしそうな表情を浮かべる。

「人には、『区切り』が必要なんだ。それさえもさせてもらえなかったら、あんまりにもみじめ過ぎるじゃないか」

退役軍人は、紅眼鏡の奥で、穏やかに目を細める。

「私だって、あの時この笛を手に入れたとしたら、きつと同じことをしたと思うよ」

そう言つて、退役軍人は、帯革の弾薬盒の上に手を添える。七発の契約の弾丸が入っていた革の小箱は、今は巡礼尼僧から託された魔獣使いの魔銀笛が収められている。

「——契約の弾丸を手を入れた時、自分が間違つたことをしてゐるなんて少しも思わなかつたよ。後先なんて全然考えてなかつた、ただ、家内の仇を取る。それしか考えていなかつたからね」

しかし、そのための弾丸は、兄に向けて放たれることはなかつた。いや、撃てなかつた。そして、様々な感情と共に、あの七個の弾丸は弾薬盒の中にあり続けた。しかし、それももう今はない。そして、もう鑄出すつもりもない。そんな思いを隅に押しやり、退役軍人は、まるで少年のように照れくさそうに笑う。

「今でも、兄さんや家内のことを思い出すと、どうしようもなく苦しいよ。顔も、声も、はつきりと覚えている、それなのに、絶対に会うことは出来ないんだと思うとね。でも

ね——」

退役軍人が、ふと顔を向けた先。そこは、ギルドの社屋がある方向。そして、今も居室で傷を癒している我が弟子を思う。

「あの子が教えてくれたんだよ、生きているものは、先に逝ってしまったひとの分まで生きていかなければならないんだ、つてね」

両親を亡くし、村を追われ、放浪の末にたどり着いた町で、泥水をすすり、雑草を噛んで、それでも、決して生きること諦めなかつた少女。そんな彼女ですら、生死の縁に立ったあの時、死神と思つた自分に向けた願い。父親に会いたい、ただそれだけを願つた。

「私が、あの子の支えになれるなら、私は、この命が尽きるまで、あの子が、もういいというその時まで、喜んでその支えになるよ」

ずきり、傷を負っていないはずの胸が痛む。どうして、そんな気持ちになるんだろう。わかりきつた答え、そして、なおもそれを誤魔化そうとしている浅ましい自分に、巡礼尼僧は唇をかんでうつむく。

「私は、いつまでもあの子のそばにはいられない。あの子と私とでは、持っている時間の長さが違うからね。それでも、あの子が望むなら、私の持つ全て、私の知る全てをあの子にあげるつもりだよ。それがあの子の、力になるからね」

「そう………で、ございますね」

くやしい。

なんで？ どうして私は、そんなことを考えているの。わかりきっている感情を押し殺し、巡礼尼僧は、それでも静かにうなずいた。自分はいつもそう、他人を、自分を、何もかもを、誤魔化して、騙して、取り繕って、そんなのばかり。

「それにね」

退役軍人は、紅眼鏡の奥の目を、巡礼尼僧へと真つ直ぐに向ける。

「君も、あの子を大事にしてくれた。とても感謝しているよ、だって、もうあの子はひとりじゃないんだから。なんといいっても、友達は何人いたって困らないからね」

「わ………私は………」

こんな自分が、あの子の友になる資格なんてあるわけない。だけど、それでも。あの子といた時間は楽しかった、これだけは、嘘じゃない。こんな自分を慕ってくれたあの子、まるで、妹が出来たようで、どこかに落としたものが、無くしてしまったものが戻ってきたみたいで。

あの時、あの子に危険が及ばぬように、騒ぎに紛れて共に水路へ引つ張ったことも、ゴブリン共をケルペロスで蹴散らしたことも。それでも、今ならそれが身勝手な独りよがりだとわかる。もしあの子のとき、彼が命を落としていたら、あの子はどうした？ どうなっ

ていた？それを考えると、自分の余りにも救いようのない愚かしさに、胸に大穴が開きそうになる。

「それに、こういうことを言ったら、君に叱られてしまいそうだけどねえ。私は、神様のお告げなんかより、君が、もう一度やり直したいと思ってくれる方がよっぽど大事だよ」
「えっ……」

「神様が許さないというのなら、そんな神様、こちらから願ひ下げさ。今ここで生きているのは、神様なんかじゃやない、私たちだからね。所詮、罪（ルール）なんてものを最初に考え出した、その程度の存在さ。そんなつまらない連中なんかより、私は君達にすがって生きていきたいよ」

「黒騎士……様……」

「まあ、そういうわけさ。それに、君があの時、治癒の奇跡を私に施してくれたんだらう？あの子たちから聞いたよ。君は、まだまだ神様と付き合っていかなきゃならないみたいだねえ」

そういつて、退役軍人はひとり可笑しそうに肩を揺すつて笑う。

「君は、もうひとりなんかじゃないんだ。だから、もつと自分を大切にしてほしいんだよ」

そういつて、腰の雑嚢に丁寧に収めてあつた小綺麗な包みを取り出すと、それを巡礼

尼僧の手にそつと手渡した。

「銀等級の魔女殿から教えてもらった、薬効あらたかなお肌の薬だよ。君に使ってもらえたら、嬉しいね」

なにしろ、私には若い子の好みはわからないからねえ。そんな照れ笑いと共に手渡された包みを胸に、巡礼尼僧は言葉を詰まらせる。何か言わなければならぬのに、胸が、喉が、口が、言葉を出させてくれない。

そんな巡礼尼僧の前に、退役軍人は穏やかにうなずきながら、辞去の言葉を口にする。そして、それじゃあ、また、と言つて立ち去つた退役軍人の背中に、巡礼尼僧は深々と頭を下げた。

帰つてきた冒険者ギルドの社屋の前でふと立ち止まり、退役軍人は、思案に暮れるようにその建物を見上げる。早々に、ここを立ち去る準備をしなければならないだろう。その前に、まだ傷の癒えないあの子に、きちんと話しておかなければならない。そう思いながら、夜の帳がおり始めた町の中にたたずむ退役軍人の前で、ギルドの扉が開き、ひとりの冒険者が姿を見せた。

「おや、君は——」

使い込みも過ぎた鎧兜を、一部の隙も無く着込んでいる。ああ、もしかして彼が、ゴ

プリンスレイヤー君か。そういうえば、念のためにと、地下下水道の探索と掃討をギルドに具申したが、あの後どうなったのだろうか。

そんなことを考えながら、声をかけようとしたその時、何かに思い当たった様子で、向こうから声をかけてきた。

「地下下水道の最深部で、ゴブリンが出たと言っていたな」

「うん、そうだね。もしかして、君が確認に行ってくれたのかい？」

「ああ」

ゴブリンスレイヤーと呼ばれる若い冒険者は、そっけない返事と共にうなずいた。

「ゴブリンは、全て殺した。もう、心配はない」

「そうか、それは助かったよ。いや、手間をかけてしまったが、本当にありがとう」

「——いや」

ゴブリンスレイヤーは、退役軍人を見上げて、簡潔な言葉を向ける。

「ゴブリンは、皆殺しだ。何も問題はない」

「なるほど」

退役軍人は、そんな彼を前に、思うところあるような様子で尋ねた。

「失礼だけど、ひとつ聞いてもいいかな」

「なんだ」

「君は、兵士として戦場に行ったことがあるのかい？」

退役軍人の問いに、ゴブリンスレイヤーは、一瞬沈黙する。

「……………いや、ない」

ややあつて帰ってきた、短い答え。

「そうか、いや、おかしなことを聞いてすまなかつたね」

「気にしていない」

どこまでも素っ気ない言葉、けれども、見栄や虚勢で出る言葉ではなく、実際に、彼そのものの思考がそのまま口に出た言葉。しかし、その様は、彼自身幾度となく見てきた、戦場で心を壊したものの特有の危うさを感じる。そんな者の末路は、知る限り大抵悲惨なもの。しかし、それを彼に言う資格は、今の自分にはどこにもない。

「ありがとう、そう言つて貰えると助かるよ」

「ああ」

「うん、疲れているのに、引き留めてしまつて申し訳なかつたね。それじゃあ、また」

「ああ」

ゴブリンスレイヤーと呼ばれる冒険者と別れ、退役軍人はギルドの扉をくぐる。酒場では相変わらずの喧騒、そして、彼の一党らしき面子が、思い思いの酒や料理を前に、他愛のないくだを巻いているのが聞こえた。どうやら、彼の付き合ひの悪さについて、愚

痴をもらしているようだ。

「なんだ」

酔いの回つた上森人の愚痴、それをなだめている見覚えのある若い女神官に、大酒をかつくらいながら呵々大笑する鉦人、そして、チーズを頬張り賛美の声を上げる蜥蜴人。彼らは、口々に、彼を思いやり、氣遣い、そして、不平をぶちまけている。その、騒々しくも温かい心と言葉が飛び交う様子に、退役軍人は、ふっと小さく笑みをこぼす。

「心配御無用、というやつだね」

そう言つて、退役軍人は酒場を横切り、借宿の居室へと続く階段を昇つて行つた。

「しよう……でしゆか」

退役軍人から、全ての話と説明を聞き終わった半闇狩人は、未だ不自由な口で返事をして、小さくため息をつく。

「本当に申し訳ない事をしたと思つているよ、すまなかつたね」

「いえ……しよんなことないでしゆ、お師匠しやまは、間違つてましえん」

未だ舌足らずな言葉、けれども、今はもう可笑しいとは思わない。この子とて、思うように動かない自分自身を懸命に奮い起こして、こうして応えてくれるのだから。

しかし、まさかずつとこのままなんてことはないだろうね。退役軍人の胸中に、そん

な懸念がふとよぎる。酒場の獸人女給には、可愛いと滅法気に入られたようだが。まあ、それはともかく。

しかし、もしそうだとしても、自分は一向に構わない。一緒に背負っていこう、それをこの子が許してくれるのなら。けれども、それを決めるのは自分ではなく、彼女だ。

「もう、君の師匠でいられなくなるかもしれないけど、君は、どうしたい?」

冒険者としての資格を失った自分、しかし、それだとしても、出来る限りのことはしてあげたい。心の底から、そう思った。

「……………私たちは、いちゆだつてお師匠しゃまのおしよばにいましゅ」

たどたどしいながらも、はつきりと自分の意思を告げる半闇狩人。そして、包帯を目に巻かれた顔を、苦勞しつつも退役軍人に向ける。

「どうちて……………しよんなことをきくんでしゆか?」

とがめるでもなく、悲しむでもなく、何故わざわざそんなことを、と言わんばかりの言葉。どこまでも、どこまでも真つ直ぐな、曇りなき心。

ああ、あなたはなぜ、この子を不自由のない家にお授けにならなかつたのか。

巡礼尼僧に語つた話でもないが、退役軍人は、見たこともないこの世界の神に、この世の不条理を嘆く。なぜ、この子から、暖かい両親を、思い出詰まる故郷を、大切なものを取り上げてしまったのか、と。

この子に、何の落ち度があったというのか。何故、この子の運命を弄ぶような真似をしたのか。これが試練だというのなら、共に耐えましょう。しかし、悪戯だというのなら、絶対に許さない。

「お師匠しやま……………」

黙り込んだ退役軍人に、半闇狩人は気遣うように声をかける。そして、我に返った退役軍人が返事をしようとしたその時、部屋がノックされた。

『夜分失礼します、よろしいでしょうか？』

ドア越しに聞こえてきたのは、受付嬢の声。なんと、こんな時間まで残業とは。しかし、何の用事だろうか。

「やあ、お嬢さん、こんばんわ。この子のお見舞いに来てくれたのかい？」

いつもの調子で出迎えてくれる退役軍人と、ベッドの上で柔らかな寝具に包まれ、その身を休ませる半闇狩人の姿に、受付嬢はほろ苦い笑みを浮かべる。師弟を越えた絆、まるで、本当の家族のよう。

「はい、先生、今日は本当にお疲れ様でした。それと——」

いつもの笑顔と声、そして、受付嬢は、両手に包むように持っていた、一枚の認識票を退役軍人の前にさしだした。

「これは大事なものだって、最初に言ったじゃないですか。もう置き忘れなんてしたら、

ダメですからね?」

「だけど君、これは——」

思いがけない出来事に、退役軍人は思わず声を詰まらせる。

「あと、伝言があります」

「伝言?」

「悪を裁くことではなく、悪があると気づかせることが、至高神の正義であり望み。だそうです」

受付嬢の困ったような笑顔を前に、退役軍人は全てを理解したようにうなずいた。

「ああ——なるほど」

さてさて、どうやら、子供じみていたのは自分の方だったようだ。退役軍人は、監督官の顔を思い出し、どうにもぼつの悪そうな笑顔を滲ませた。

「ありがとう、彼女にも、そう伝えてくれないかい」

「はい、わかりました。それとこれ、お弟子さんに」

受付嬢が、ポケットの中から取り出して、退役軍人に手渡した小瓶。綿と麻布で蓋をした、柔らかなで清々しい香気を穏やかに漂わせる、鎮静の効能をもつ香草のポプリ。

「私も使ってるんです、よく眠れるんですよ、これ」

「ああ、これはありがとう、こんないいものを頂いてしまって……そうだ、立ち話も失

礼だし、どうか上がっていつてくれないかい、あの子も喜ぶよ」

大きな体を縮めてお礼の言葉を繰り返す彼、まるで、本当のお父さんのよう。そんな退役軍人の姿に、受付嬢は穏やかに微笑んだ。

「いえ、私はこれで失礼します。お弟子さんには、ゆっくり休んでと伝えてくださいね」
「うん、わかったよ。本当に、ありがとう」

「はい、それでは、お大事に」

「先生、どうだった？」

帰り支度を済ませ、ギルドを退庁した受付嬢を待っていたのは、監督官の声。

「ええ」

受付嬢は、困ったように笑いながら応える。

「ありがとう、って伝えてくれて」

「そっか」

「待ってるくらいなら、一緒に来ればよかったですよ」

わざと意地悪を言ってみる。

「それじゃ、感動的な場面にならないよ」

「え？」

「あれだけ厳しく突き放した至高神の神官が、実はちゃんと理解してくれていた——
——　　つて、カツコよさがわからないかなあ？」

「自分で言っちゃいます？それ」

監督官の言葉に、受付嬢はくすくすと笑う。

「あまりわかってもらえないと思うけど」

「そうかなあ」

並んで帰路を歩き出しながら、ふたりのギルド職員は他愛もない会話を交わす。

「それより、いいの？ありのままを報告するんじゃないのかしら」

「だから、ありのまま報告するよ？先生が報告してくれたとおりにね」

監督官は、苦笑まじりに答え、指先で頬をかく。

「それよりさ、帰りどつか寄って食べてこようよ」

「あ、いいですね、それ」

「うん、君のおごりでね」

「意味わかりません」

それこそ、他愛のない会話を交わしながら、ふたりのギルド職員は、まだ開いていそうな店を探しに進む先を変えた。

「それでは、黒騎士様、この度はご迷惑をおかけして、大変申し訳ございませんでした。狩人様や戦士様にも、よろしくお伝えくださいませ」

まだ日も登りきらぬ早朝、巡礼尼僧を見送るため訪れた町の門で、退役軍人は別れの時間を名残惜しむ。彼女は今日、弟を故郷に葬るための旅に出る。半闇狩人は、まだ歩けるまでには回復していない、あの子には、まだ休息が必要。見送りに行けないのを心底残念がっていたが、枕元で交わした言葉と再会の約束は、しっかりとふたりを繋いでいる。

そして、若い戦士は、あれからまた、駆け出しの冒険者たちに請われ、共に依頼の場所へと赴いていった。むしろ、彼にとつてはその方がいいのだろう。益体もない物思いに苛まれているよりも、彼は、彼を頼りとする仲間と共に、その力と心を輝かせている方が、あの真つ直ぐな魂にこそふさわしい。

それでも、と退役軍人はため息をつく。やはり、そう簡単に割り切れるものではないのだろう。それは、仕方のないこと。が、それにしても。

「いや、君。門出の挨拶にそれはないだろう？これからしばらく会えなくなるのに、そんなこと言われたら本当に寂しくなってしまうじゃないか」

不満そうな、そして、ワザとらしいすね方をする退役軍人の仕草に、巡礼尼僧は苦笑交じりにうなづく。

「それに、あの子との約束はどうするんだい。また、一緒に冒険をするって、約束してくれなきゃないか。君は、あの子の友達なんだろう？ 違うかい」

「そう……で、ごさいましたね……」

あの子が枕元で懸命に語りかけてくれた、あの純真な言葉を思い出す。そして交わした、必ず帰ってくる、その約束に誓って嘘はない。そして、微かに目を伏せながら、肩から下げた雑嚢に手を添える。そこには、姉の手で茶毘に付された弟の遺灰。それは、小さな壺に納められその胸に抱かれる。もう、後悔も心残りもない。最後に、別れを言えたから、謝ることが、できたから。

「それにしても、あんなに綺麗な髪の毛だったのに、そこまですることはなかったんじゃないのかい？」

白い頭巾の下、秋の日差しのような、暖かく、どこか郷愁を感じさせた柔らかな栗色の髪は、巡礼尼僧の手によって剃髪されてしまっていた。それで多少なりと彼女の気持ちに整理が付くのであれば、余人がどうこう言えた筋合いではないとは言え。

「でも、君がそうしたいというのなら、仕方なかったけれど……まあ、やってしまったものは仕方ないしね。そうだね、とりあえず、君の髪が元どおりになった時、また会いに来てくれると思っていいよね？」

「それは——」

わかりかねます、そう口にしかけて、それが音を為す前に飲み下す。そうじゃない、私
が言いたかったことは、彼がききたかったことは、そうじゃない。

「お待ち———ただけるのですか？」

「何を莫迦なこと言ってるんだい君は、当たり前じゃあないか。あまり、寂しいことを言
うもんじゃあないよ、本当に」

まるで、娘の門出を見送る父のような言葉に、巡礼尼僧の表情がふと緩む。そして、大
きくうなずく退役軍人。そして、帯革の弾薬盒から、銀色の小笛を取り出した。

「それと、これは君に返しておくよ」

「黒騎士様、ですが、これは………！」

どうして、私はもう、こんなもの必要ない。いや、見るのが怖い。自分の醜さを、自
分の罪を、目の当たりにするのが嫌だ、思い知らされ続けるのが、怖い。

「女の子のひとり旅が危険なことくらい、知ってるつもりだよ。いいから、私の代わりだ
と思つて、もつていきなさい」

そして、半ば強引に手の中に握らされた、銀の小笛。

「今の君なら、だいじょうぶ、私が請け合うよ」

自信に満ちた言葉と共に、自分の手を包み込む大きな手。そして、その紅い眼鏡の奥
から向けられる穏やかな眼差し。こんな私を、それでも信じてくれるひと。そうだつ

た、そんな彼の前で、もう取り繕うのはやめにしよう、自分自身の言葉で伝えよう。そう、決めた。

「はい……………それじゃあ、いつてきます！」

「うん、気をつけていつてくるんだよ」

「ありがとうございます！それと……………わたし、もう女の子やありません、おじさま！」

「お、おじさま!!」

思いもよらぬ言葉が返ってきたことに、退役軍人の目が丸くなる。相変わらず、黒い兜と色眼鏡に覆われているけれど。でも、今なら、ものすごく慌てふためいているのが、はつきりわかる。やっと、黒騎士様に一矢報いた。巡礼尼僧は、若草色の目をいたずらっぽく細めながら、落ち着かない様子の退役軍人をみつめる。

「ああ、そうだったね、確かに、今のはちよつと失礼だったかな、ハハハ」

「そうですよ、おじさま！」

わざとらしく頬を膨らませて見せる彼女に、退役軍人は頭をかきながら詫げる。

「いやいや、御免御免、でも、君が元気になってくれたなら嬉しいよ。それじゃあ、また会える日を楽しみにしているからね」

「はい！だから、それまでさよならです、おじさま」

およそ僧侶らしからぬ、村娘のような言葉遣い。でも、これが、わたしの言葉。冒険者でも、僧侶でもない、わたし自身の言葉。そして、嬉しそうに、そして、大きくうなずく退役軍人を前に、巡礼尼僧も、晴れ晴れとした笑顔を返す。そして、訪れた別れの時。

けれども、さようならば別れの言葉なんかじゃなくて。

手を振る退役軍人に送られ、巡礼尼僧は一礼し、故郷へと続く道を歩き出した。一歩、一歩、確かめるように、踏みしめるように。遠ざかる町、遠ざかるあのひと、やがて、その頬を一粒の涙が滑り落ちる。

(私は——わたしは——)

これから贖罪の旅に出る自分、それならば、もう一つ罪を加えても同じこと。

(貴方を——あなたを——)

それでも、その先の言葉が出てこない。心の中でなら、どんなに思っても、叫んでも構わないはずなのに。どうしても、その先を言えなかつた、形にできなかつた。そんな彼女の心を知ってか知らずしてか、退役軍人は、その姿が見えなくなるまで、手を振り続けた。

いつまでも、いつまでも

私はここにいて、この場所で待ち続けている、と伝えるように。